

ために貯蔵穴の周囲に小規模な堤を盛るなど)、といった観点から埋土の流入のあり方を考えたがその根拠がなく、覆土の性格については明らかにできなかった。

以上のことから、埋没過程から貯蔵穴放棄について言及するには無理があるので、視点を変え遺物の出土状況からこの点をさらに考えてみたい。

貯蔵穴内からは、VII a 層の流入にかかわらず遺物が出土した。礫や大形石器(石皿・石棒など)を除いて、その出土位置は覆土中層に多く、貯蔵穴底部に集中するのは第72号貯蔵穴だけである。完形土器の出土例はいくつかあり、注口土器がめだつ。第15号貯蔵穴からは浅鉢が出土している。石器は多種出土したが、とくに使用面をもつ礫が多いことは目を引く(第24表)。また、これら礫のほか石棒・立石状の礫もある。使用面をもつ礫は台石・石皿・多孔石などの総称で、一抱え以上ある巨礫を含む。その大きさ・重量からみて、使用面をもつ礫は本来貯蔵穴周辺での作業に用いられたと考えられる。

以上のような状況は貯蔵穴の機能が終了した後、意図的に置かれたか、投げこまれたか、の結果と考えてよからう。そうであれば、貯蔵穴の放棄(放置)は地形環境に左右されたものでなく、使用者の判断により行われたと結論できる。貯蔵穴は一定期間利用された後、意図的に放棄され、新たな貯蔵穴が別の場所に掘られたのである。

⑤貯蔵穴の再利用

調査中より谷底部で発見された土坑がすべて貯蔵穴と判断してよいのか疑問があった。堅果類が出土した土坑は貯蔵穴と判断してもよからうが、石棒・注口土器などの出土は貯蔵穴以外の性格を示しているとも推測させた。おそらく貯蔵穴の再利用の結果と考えられるが、かりに貯蔵と作業域である谷底部が墓域と祭祀域として再利用され、両者が併存するのであれば当時の人々の集落構造を考える上で貴重な資料が提示できよう。

以上の経過から、全体の約三分の一にあたる28基の貯蔵穴についてリン酸・カルシウム分析を実施し、そのあり方を自然科学的方法により探った(註6)。

リン酸・カルシウム成分に富む内容物の痕跡をもつ貯蔵穴が4基、相対的にその成分の富化が認められる貯蔵穴内覆土がいくつかある。リン酸・カルシウム成分含有値のどちらか一方が相対的に高いものもみられた。分析結果からは、いくつかの貯蔵穴が墓として転用された可能性を指摘できた。

むしろ、「リン酸・カルシウム成分に富む内容物」が具体的に何を示すのかは不明である。貯蔵する機能からみれば小動物が坑内に入り込んだ結果とも考えられよう。小動物の墓であったかもしれない。偶然か、意図的(マツリとして埋めるなど)かはわからない。環境変化などの自然要因も顧慮せねばなるまい。

マツリを想定する根拠としては、谷底部およびその周辺での出土遺物の内容(V章3節)と、段丘斜面上に存在する3棟の敷石住居址を指摘できよう。貯蔵穴は生業に直接かかわる遺構である。同時に作業場としての配石も生業にかかわる。両者が存在する谷底部を中心に、日常生活の中で大きな位置を占める生業のマツリが行われた可能性は捨て切れない。

今のところ、貯蔵穴の一部は単に放置されずに再利用がされた可能性が極めて高いことを指摘するととどめる。

⑥水さらし場状遺構の時期

部材のひとつを放射性炭素年代測定法によって分析した結果、 5250 ± 110 (1950年よりの年数)が得られた(註7)。同様に第76号貯蔵穴から出土したクルミは 4040 ± 80 (同)となった。出土土器から第76号貯蔵穴は後期前葉(3期)である。この点からみると、水さらし場状遺構の時期は栗林遺跡の主要な遺構群よりかなり古いことになる。

また、谷底部の利用がピークを迎える後期前葉(3期)に、水さらし場状遺構を伴う小谷に貯蔵穴群がつ

くられる。同遺構の構造は堅果類などをさらすのに適している。その底板に接して出土した浅鉢は後期中葉(4期)である。これらは同遺構が他の諸遺構と結びついて機能していた可能性を示している。この点から同遺構が後期前葉もしくは後期中葉につくられたと考えられる。自然科学的方法による年代観と考古学的所見の相違が何に起因するかわからない。資料採取時点で慎重さに欠けた点があったかもしれない。また、使用された材の由来や以後の埋没・保存状況が影響することはないであろうか。本報告では結果を提示するにとどめたい。

⑦水利作業場的な土坑

第18・22号土坑はともに段丘側からの湧水によって、坑内に水が溜る構造であったと考えられる。同様な構造として水さらし場状遺構がある。しかし、堅果類などは両土坑から出土せず、さらし場的な機能をもつか不明であるが、水を利用した施設の可能性はあろう。両土坑の時期はそれぞれ後期初頭・同前葉であり、水さらし場状遺構との継続性が指摘できる。水さらし場状遺構がつくられる以前にこれらの土坑を使って水さらし作業が行われており、その継続・発展として水さらし場状遺構がつくられたとは考えられないであろうか。

10 貯蔵穴と水さらし場状遺構発見の意義

栗林遺跡は乾燥した段丘上ならびに緩斜面を居住域とし、低地(谷底部)に貯蔵穴や植物質食料加工場を備えた集落遺跡といえる。このような例は熊本県曾根遺跡と石川県ダイラクボウ遺跡に続いて全国で3例目となる(註8)。従来、縄文時代の集落範囲は、居住域とせいぜい墓域などを以て解釈されてきたが、低湿地利用が広範囲に存在することが明らかになるにつれて、集落範囲を拡大して考えなければならなくなった。その点で、栗林遺跡が低地利用の実態を提示しただけでなく、具体的な集落構成を示し、かつ時間の経過とともに、居住域と利用される低地との間に、近接から分離といった変化(後期中葉になるとそれまで継続して認められた住居址が発見されない)があることを明らかにできたことは、集落の範囲を考える上でその変遷をも含めて意義をもとう。居住域と生産域(貯蔵・作業域)の分離には、金箱文夫が赤山陣屋遺跡とその周辺の遺跡のあり方から指摘するような「社会構造上の変貌」(金箱1990、本巻560頁)が反映されているのか。栗林遺跡周辺にそれを類推させる遺跡もなく不明とせざるを得ないが、その具体像はともあれ、後期における集落立地や土地利用の変貌が一定の方向性を示しながらも、自然環境・文化的伝統などによる地域相の違いも大きかったことを示すと考えたい。

また、中部高地においては隆盛を誇った縄文時代中期の後、後期に入り遺跡数の激変が一般に指摘され、該期の集落の調査例も少なく、その実態が不明瞭でもあった。後期の遺跡分布が低地に下がり、かつ湧水などの水場に接近する傾向を小宮山隆が指摘(小宮山1992)しているが、栗林遺跡はこの点でも好資料を提示したといえよう。

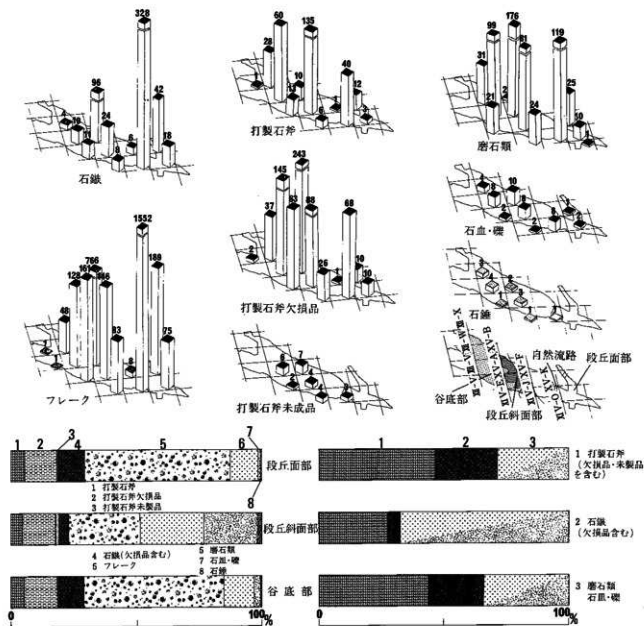
さて、栗林遺跡における低地(谷底部)の利用は貯蔵・加工の場であった。貯蔵穴の設置場所は、大きく二つに分けられる。低湿地など地下水の影響を受けやすい場所(以下湿地型と記す)と、台地などの乾燥した場所(以下乾燥型と記す)の2者である(今村1899・潮見1986・塚本1993・山田1993など)。湿地型は西日本に例が多く、東日本で東京都北江古田遺跡の例があげられるのみで、栗林遺跡が東日本でありながら湿地型である点注目される。東日本における貯蔵穴の代表例は、縄文時代前期末から中期中頃にかけて、北・東関東で発見される乾燥型のフラスコ形である。大量貯蔵と定住生活を背景として、遺跡でまとまって発見される例が多い。むしろ、台地に発見されるフラスコ形以外の土坑は集落にともない発見されている。ただし、これらの土坑は往々にしてその性格を推測できない場合が多い。中部高地においても同様であり、貯蔵穴が北・東関東に比べ中期に少ないという認識がなされてきた。しかし、栗林遺跡の集落範囲が示すように、

貯蔵穴構築場所は低地を配慮に入れねばならなかったといえよう。例えば、貯蔵穴の立地に関しては次のいずれかの前提の上で解釈が必要になると考える。

- ① 乾燥型と湿地型は共存しており、今まで湿地型が未発見だったのは低地の調査例が少なかったため。
- ② 乾燥型と湿地型は共存しない。時期、地域によって貯蔵穴の立地に選択がはたらいっていた。

①・②は極端に分けてみたが、実際には、時間的・空間的な枠組みの中で、様々な状況があったろうし、調査事例の増加を待たねば理解できないものであろう。

ところで、乾燥型と湿地型にみられる貯蔵穴の研究はその立地をおもな糸口としてきた。両者の差について貯蔵方法の違いとして捉える立場（堀越1975-1977）、生業形態の違いから論じたもの（今村1989）、貯蔵対象・用途の違いから解釈した研究（佐々木1973）などが代表的であろう。また、湿地型の立地選択理由は、シブ抜き・アク抜き説、貯蔵対象説、短期貯蔵説、備荒説などが指摘されている（今村1988）。一般にいわれるのはシブ抜き・アク抜き説であるが、本遺跡のクルミはそれを必要としない。クルミは本来乾燥させて食するものであるのになぜ、湿潤な場所を貯蔵場所として選択したのか、よくわからない。調査によって得



第435図 石器の出土状況

られたクルミの中身はすでに腐って空の状態であったが、ねずみなどの小動物によって殻が破られている資料はほとんどない。立地環境がこれらの侵入を防いだ可能性は指摘できるが、それだけでは説明できない。また、クルミの厚い皮は腐らせておけば簡単に取れるものであり、ただ単にクルミの厚い表皮を取るためとは考えられまい。

また貯蔵対象説は②の立場にたてば、次の点が問題となる。クルミが縄文時代全般にわたる主要な食物であり、本遺跡の主体となる後期以前にも食し、かつ貯蔵していたであろう。この貯蔵は今までの調査例だけからみれば乾燥型貯蔵または屋根裏貯蔵が主流であったと考えられるのになぜ、後期になると突然湿地型になるのが問題となる。この点からは①の立場が若干有利ともいえるが、これとて、根拠はない。具体的には解らないが、クルミの乾燥によらない生貯蔵が長期間可能なかどうかという点で備荒説は疑問である。

それなら、クルミが湿地型貯蔵される原因は生業形態の変化が問題なのだろうか(今村1989)。例えば根茎類の採取が自然的・人為的なことにより減収し、主要食物構成のなかで、クルミにかかる比重が極端に増大せざるを得なかった。そのために、クルミを大量に貯蔵し得る場所として新たに栗林遺跡のような場所が選択されたと解釈するのである。この場合は②の立場に立つことになる。また、湿地型がクルミに良いと仮定したとして、クルミ自体の加工方法に何らかの新技术が生まれたとか、食物構成における堅果類に占めるクルミの比重が移り変わったために、今までの貯蔵方法では間に合わなくなり、しかたなく低地を選んだとか、いろいろな解釈も生まれよう。

縄文時代の生業が根茎類・堅果類を主とした植物質食料であるとする見解は、渡辺誠を始めとする先学の諸研究によりすでに明らかである(渡辺1975)。本遺跡と同じ中部地方においても、多数の縄文人骨が発見された北村遺跡のコラーゲン分析によって、それを裏付ける見解が示された(赤沢威ほか1991)。現在、植物質食料資料の増加は著しく、かつその多様性が指摘されている。栗林遺跡では、クルミ・トチ・ドングリが発見され、さらに調査で得られた木材の大半がクリであり、おそらくクリも主要な食料資源であったろう。調査で得られた堅果類のほとんどがクルミであったとはいえ、花粉分析の結果(トチの花粉化石が多く認められたこと)や水さらし場状遺構および水利作業場の土坑の存在は、根茎類や堅果類、とくにトチの水さらし(虫殺し段階も含む)が行われたことを暗示している。その場合、なぜ貯蔵穴からトチがほとんど発見されなかったのだろうか。クルミが湿地型貯蔵されることと、根茎類の利用と、アク抜きが必要な堅果類の利用との間にどのような関連があるのであろうか。根茎類の利用→クルミの利用→アク抜きが必要な堅果類の利用というような時間的な流れが存在したのであろうか。それともすべてが併存していたのだろうか。

生産調理用具である石器からは、所属時期はすべてが明らかでないが、ほぼ狩猟・採集・漁労にかかわる石器は出揃っている。遺構内出土の磨石・石皿類(使用面をもつ礫を含む)が高い比率であることと、全般に打製石斧の出土量が多いことが特徴である(第435図・第24表)。とくに打製石斧は根茎類の採取に利用したと考えられ、堅果類とともに縄文時代の主要採取植物構成の問題と係ってこよう。最も出土量の多い段丘斜面の打製石斧は高位段丘面上から廃棄・流出した可能性もある。打製石斧の播磨時期は大枠では主たる遺構の最盛期である時期にあたると考えているが、何割かがそれ以前に捨てられた可能性はあろう。打製石斧の出土量と貯蔵穴の多寡が反比例し、その成因を生業形態の変化(根茎類主体から堅果類主体へと)として捉える考え方からみれば、本遺跡のような多数の貯蔵穴と多量の打製石斧というありかたはこれに不整合である。おそらく、この要因は貯蔵穴を含めた本例のような立地を示す調査例がなかったことによるのであろう。石器から想定される生業は狩猟・採集・漁労全般にわたって活動していたことを示す。とくに採集はクルミを主体とした貯蔵穴が目立つとはいえ、実際には多様な活動(打製石斧にみられる根

莖類やクリ・トチ・ドングリといった堅果類採取)が想定できよう。当地に生活を営んだ縄文時代の人々の暮らしよりは決して特殊なものでなく、自然環境と対峙した縄文時代後期における普通のかつ地域的なひとつの姿であったと考えたい(註9)。

以上、今回の調査成果からその意義と課題に触れた。実際にはこれ以上の問題点が残されている。とくに、生業を結めた縄文時代後期の社会構造を、より具体的に考えるのために遺跡が豊富な内容をもちながら、十分に責任を果たせなかったことを反省している。今後、資料の増加を待って再検討を加える機会をつくりたい。

註

註1 花粉分析はバリノ・サーヴェイ株式会社委託して実施した。試料は貯蔵穴5基で、主に黒色を呈したシルト-粘土からなる。採取された位置は、いずれも底部付近である。

結果は註3図6に示した。花粉化石は、5試料とも良好に検出される。花粉化石群集は、第59・73・71号貯蔵穴で採取された試料と第77・56号貯蔵穴で採取された試料と若干異なる。前者は、ニレ属-ケヤキ属が最も高率に出現し、クルミ属・ブナ属・コナラ属・コナラ亜属・トチノキ属を伴う。これに対して後者は、ほぼ同様な種類が検出されるもの、ニレ属-ケヤキ属の出現率が前者と比較して低率であり、トチノキ属が多産する。一方、草本花粉は、イネ科・セリ科ヨモギ属などが検出されるが、その出現率が低い。なお、第73・71号で採取された試料では、浮水性シジミ類のサンショウモガが検出され、また第73号でガマ属・ミクリ属・サジモダガ属など水生植物が検出されている。

註2 種子・昆虫同定は興水太伸氏のご協力による。試料は第56号貯蔵穴底部付近の覆土(コンテナ1箱分)である(註1図)。試料を手で細かく分割し、低倍率のルーペで抽出した。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 *Aescalus*

果内は見られず果皮と種皮の何れも破片によって同定した。同定理由は記すまでもなく果皮は極めて厚く一見材片のようではあるが断面は材のそれと全く異なること、何よりも皮の表割(面)には特有のコブ状突起が散布されていることですぐわかる。種皮は、安定した組織で、どの遺跡のものも残存程度が高く、表割(面)はつやがあり内面にはこれが見られず、大破片の多くは曲って二つ折状になったものがあり、また、平圧されることも少なく腕状形になった状態のままのものが多い。また、実の底部はつやがなくつやのある部分との境は、明らかに区別されそこが縮状に見られることですぐわかる。

トチノキはトチノキ属に属し現生種は世界に12種あり、東アジア・ヨーロッパ・東南アジア・ヒマラヤ・バルカン半島・北アメリカにはほぼ不連続的に分布する。日本のものは一属一種の「トチノキ」で、落葉高木で高さ20-30mにもなるが、10m近くになると実をつけはじめる。日本産トチノキの三種にケトチノキがあり、これは葉裏に細軟毛を密生することによるが、実では区別がつかない。従って出土のトチノキもともすれば「ケトチノキ」の種子に相当するかも知れないが、多くの場合これは少ないので先づはその心配はない。でも念のため出土地付近の現生トチノキを検討することは大切である。

近年街路樹にマロニエが植えられているのを見るが、これは移入されたもので「セイヨウトチノキ」の別名を有し、バルカン半島に自生するし果皮にみじかいトゲがあるので区別し易い。

クリ *Castanea crenata* Sie bet Zucc. ブナ科 *Fagaceae*

コナラ *Quercus serrata* Thunb. ブナ科 *Fagaceae*

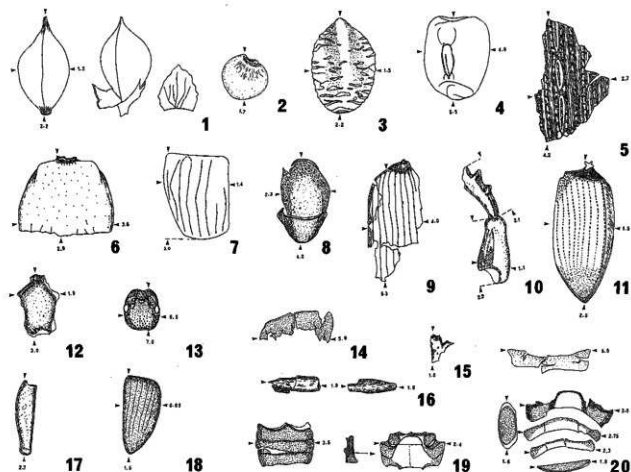
ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino (Ulmuskeaki Sieb.) ニレ科 *Ulmaceae*

どれも小片で特にケヤキは1片の検体であったため、同定にあたって信頼性に欠けるだろうが、これまで幾多の木炭片同定の経過から、おそらくはこの結果でよいと思う。方法は現生種の木炭片との比較による。なお、ケヤキは木部外周部であろうと判断した。

検体の種はどれもごく普通の落葉広葉高木で、長野県では低山帯を形成する樹種である。生木・枯木の何れを炭としたか不明であるが、おそらくは枯木から出来たものと考えのがよからう。

貯蔵穴に用いるための木炭とは考えられない小片と数の少ない点から考え、付近で燃やしたものが風で飛ばされるか、流水によって運び込まれたと考えるのがよいだろう。

アキノウナギツカミ *Persicaria sieboldii* (Meisn.) Ohki Polygonum sieboldii Meisn. ダテ科 *Polygonaceae* イヌタデ属 *Persicaria* Miller



出土種子

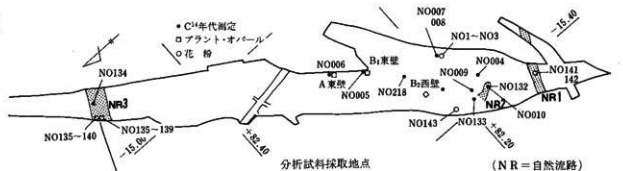
NO	科・属名	種名	部位	NO	科・属名	種名	部位
1	タテ科イヌダテ	アキノウナギツカミ		3		エソタチカクバミ	
2	ケシ科	ムラサキケマン		4		リョクトウ	

出土昆虫遺体

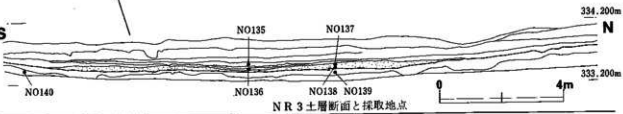
NO	科・属名	種名	部位	NO	科・属名	種名	部位
5	オサムシ科	アオオサムシ	上翅中央一部	15		ハムシ	前胸板前縁半分
6		ハネカクシ?		16		ゴミムシ?	上翅
7	ヒメエンマムシ属	ハコネエンマムシ		17		オサムシ	膝節
8		マグソコガネ?	基節	18		トビハムシ?	
9		ゴミムシ?	左上翅	19		ゴミムシ?	後胸板と側板
10	コガネムシ科	オオマグソコガネ		20		ゴミムシ?	膝節1~3節
11		トビハムシ?	左上翅			コガネムシ?	膝節板 第2板
12		ゴミムシ?	腹面節片			コガネムシ?	膝節板1~3
13	アリ科	オオハリアリ				コガネムシ?	膝節板後胸側板
14		ヒメコガネ?					

註1図 種子・昆虫同定

1



S



N

NR 3 土層断面と採取地点

分析資料の一覧

2

資料番号	層位	質	**C	P
AKB-001	焼成灰層	灰	*	
AKB-002	焼成灰層	焼成物	*	
AKB-004	0層	繊維じり砂質シルト	*	
AKB-005	5b層	粘土	*	
AKB-006	9b層	焼成灰シルト質粘土	*	
AKB-007	3b層下層	シルト質じり砂	*	
AKB-008	4b層下層	繊維状シルト	*	
AKB-009	6b層中	砂質土	*	
AKB-010			*	
30-B-1 ONO. 1	3b層中	シルト質じり砂	*	
30-B-1 ONO. 2	4b層中	繊維状シルト	*	
30-B-1 ONO. 3	5b層中	シルト質じり砂	*	

放射性炭素年代測定結果

試料番号	年代 (1950年よりの年数)	Codo No.
AKB-001	900 ± 140	Gak - 15799
AKB-002	1,820 ± 130	Gak - 15800
AKB-004	11,620 ± 270	Gak - 16501
AKB-005	2,250 ± 90	Gak - 16502
AKB-006	9,340 ± 180	Gak - 16503
AKB-007	5,180 ± 110	Gak - 16504
AKB-008	2,730 ± 130	Gak - 16505
AKB-009	3,180 ± 90	Gak - 16506
AKB-010	5,250 ± 110	Gak - 16507

**C: 放射性炭素年代測定 P: 花粉分析

3

プラント・オパール分析結果表

中層部、分析遺跡

30B層地点

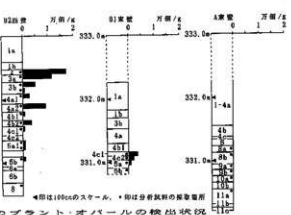
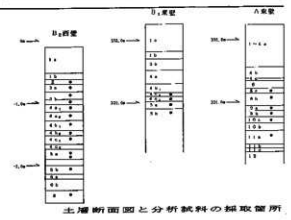
試料名	深さ cm	層厚 cm	板状度	イホ 個/g	(個/10g)	豆イホ 個/g	オパール 個/g	ウツクイホ 個/g	半七層 個/g
2	52	2	1.00	17,000	14.01	1,800	6,000	7,500	0
2a	60	12	1.00	11,300	13.97	900	5,000	2,800	0
30-1	72	9	1.00	4,900	4.84	900	900	3,900	0
30-2	81	9	1.00	900	0.83	900	900	1,800	0
4a1	90	16	1.00	2,600	4.28	800	3,600	6,100	0
4a2	106	12	1.00	9,100	11.26	2,500	1,000	3,900	0
4b1	118	14	1.00	700	1.01	1,800	3,800	3,900	0
4b2	132	15	1.00	3,400	3.50	1,700	2,500	1,700	0
4c1	142	14	1.00	900	1.30	5,400	4,800	1,800	0
5a1-1	164	8	1.00	900	0.74	6,000	2,800	900	0
5a1-2	172	8	1.00	900	0.74	1,900	2,400	900	0
5b	190	16	1.00	900	1.48	5,300	5,900	3,900	0
8	232	20	1.00	0	0.00	37,200	0	0	0

31層地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	板状度	イホ 個/g	(個/10g)	豆イホ 個/g	オパール 個/g	ウツクイホ 個/g	半七層 個/g
4a1	183	7	1.00	3,400	2.45	2,800	1,700	800	0
4c2	190	7	1.00	2,000	1.44	4,000	1,900	0	0
5a	197	12	1.00	900	1.11	4,900	5,900	900	0
5b	209	-	1.00	0	0	700	3,900	3,900	0

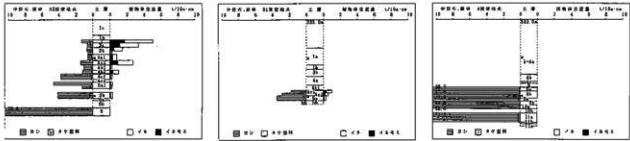
4層地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	板状度	イホ 個/g	(個/10g)	豆イホ 個/g	オパール 個/g	ウツクイホ 個/g	半七層 個/g
8a	177	10	1.00	0	0.00	38,900	1,800	0	0
8b	187	10	1.00	0	0.00	25,300	1,700	0	0
9a	200	8	1.00	0	0.00	34,300	4,000	0	0
9b	214	10	1.00	0	0.00	39,300	900	0	0
10a	224	10	1.00	0	0.00	32,100	3,900	0	0
11a	245	23	1.00	0	0.00	45,200	5,900	1,900	0



イホのプラント・オパールの検出状況

註2図 科学分析結果アータ(1)



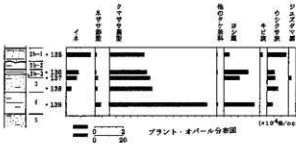
おもな植物の推定生量と深層

(注) ◀印は100gのスケール

4 プラント・オーバーオール分析結果 2

試料1g当りのプラント・オーバーオール組成

試料	イネ	雑草	動物糞	クマザサ	高麗根	タケノコ	甘藷	芋	ワシ	クマザサ	ジュズダマ	木屑
1.3.5	12,900	1,600	14,500	1,400	1,300	1,400	1,400	0	3,800	19,000	0	2,500
1.3.6	5,400	5,400	10,800	0	7,800	0	0	0	2,800	0	0	15,300
1.3.7	5,200	14,400	19,600	0	7,800	0	0	0	2,800	1,300	15,700	0
1.3.8	2,600	11,600	14,200	0	7,800	0	0	0	2,800	0	0	14,200
1.3.9	0	24,300	24,300	0	12,700	0	0	0	2,300	0	0	24,300



プラント・オーバーオール分析結果 (x10%)

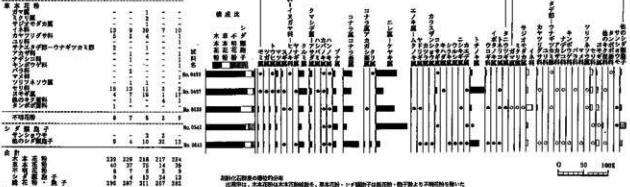
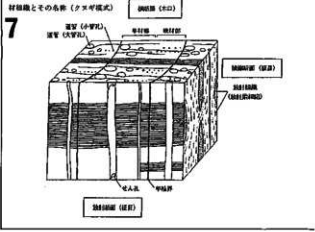
5 放射性炭素年代測定結果 2

試料番号	層	測定試料	コード番号	測定値 (yrs BP)
No.131	7号野積穴	タニゲルミ根	GsK-18934	4,019 ± 80
No.132	水あらし場状遺構 黒褐色有機質シルト		GsK-18933	11,416 ± 170
No.133	6層	木屑 (クマザサ)	GsK-18932	1,185 ± 80
No.134	5層下層	黒褐色有機質シルト	GsK-18931	2,890 ± 80
No.111	7号層	木屑	GsK-18930	5,188 ± 80

花粉分析結果

種名 (Taxon)	1971		1972		1973		1974		1975	
	個体数	割合 (%)	個体数	割合 (%)	個体数	割合 (%)	個体数	割合 (%)	個体数	割合 (%)
イネ	2	2	4	4	4	4	4	4	4	4
雑草	2	2	4	4	4	4	4	4	4	4
クマザサ	2	2	4	4	4	4	4	4	4	4
高麗根	2	2	4	4	4	4	4	4	4	4
タケノコ	2	2	4	4	4	4	4	4	4	4
甘藷	2	2	4	4	4	4	4	4	4	4
芋	2	2	4	4	4	4	4	4	4	4
ワシ	2	2	4	4	4	4	4	4	4	4
クマザサ	2	2	4	4	4	4	4	4	4	4
ジュズダマ	2	2	4	4	4	4	4	4	4	4
木屑	2	2	4	4	4	4	4	4	4	4

6 7



註3図 科学分析結果データ(2)

種子：三稜形で長さ2.3mm。 稜線は角ばらず丸く、黄褐色のイナダク形は中央部で最長となる。他のイヌタダ属のどれよりも本種に最も近い形状である。色は黒褐色で生時のそれとは全く異なるがこれは対象になり得ない。固体によって大きさを異にするがこれは個体差によるものである。ガクの付いた検体もあり、この属の生態的特徴を現わしている。

イヌタダ属は北半球に約100種あり、日本に30余種が分布している。習性はさまざまであるが、普通目に付くものは水湿地に生え、群をなして繁り薄紅または総状花で、よく見ると美しく可憐である。アキノウナギツカミの自生地もイヌタダ属と同様で、河川の堰や水田用水路、湿地、河原などに自生する。葉は柳葉状で互生し基部は矢じり状形をする。葉及び茎には下向きのトゲがあり、葉手てこれをつかむとひっかかり、痛い。和名のアキは秋に花が咲く(実は盛夏以降)ためと、ウナギをつかむのにこのトゲをもってすれば容易であることにちなむ。分布は、温帯以北が主で普通種であるが割合に見掛けることが近年特に少ない。

群生繁茂するため、一旦繁茂すれば種子は無数に散り、時にしきつめた種にも落散する。果(種)皮が厚く、出土率も高いこともあるが、元来多数なるため保存されることが容易である。貯蔵穴付近もこの自生地としてよく、この種子の発見されたことは容易に想像される。

ムラサキケマン *Corydalis nica*(Thunb.)Pers. ケシ科 Papaveraceae

ゴシ形の小黒色種子の植物はケシ科・アカザ科・ヒユ科などがあり、再三にわたり迷ったが種子に種枕の跡が大きくあること、断面形が楕円形で上下が多少角ばること、大きさ、色、表面のつや、表面に何の紋様もみられないことなどで本種とした。

ムラサキケマンはやぶの辺線など半日かげ様の草むらなどに生える。乾燥地より畑様の腐葉土質の地に好んで育ち、花後ササゲ様の種をつけ、熟すと一寸した物理的衝撃きによって割れ種子をはじきとばす。繁殖した中をみると痛い程の種がある。本遺跡構内にも比較的多数の遺存個体のあったことは、この種がよく繁茂していたことが推測される。アリは、種枕に誘引されこの種を運ぶことがあるが、貯蔵穴内はアリが巣作りする様な乾燥地にあったのでないとすると、アリの運搬ではなく飛散によるものと考えてよいであろう。

アオオサムシ *Carabus insulicola chaudoir* オサムシ科 Carabidae

オサムシ類似区別点は、全体の形、色彩、翅紋などによることが多いが、検体は上腿の中央はんの一部のため、オサムシの種別観点の全てを満たすわけにはいかず、色彩と刻紋のみによるほかない。しかし、たまたま刻紋の残存部分が特徴を示す部分であったことにより、おそらく本種にまちがいないものとする。

オサムシ類は現生甲虫類の中では最多種を含む大群で、これをいくつかの亜属として考えるが、現在の甲虫分類学ではこの亜属の扱いは諸説があり、一定でなく問題もあるが、大形の美しい種を一般にオサムシ、黒色の中、小形の区別困難の種が多い一群をゴミムシとし二大別している(オサムシ・ゴミムシの2分して扱うこともある)オサムシ科の甲虫は、現在世界から約30,000種、日本で約1,000種と考えられている。検体のアオオサムシは日本には普通に分布する種であるが、分布地域によって変異が一定し、地域ごとに亜種を形成している。従って、検体のオサムシはこのどれに類するかは交尾器により区別するのであるが、これは不可能のためいわゆるオサムシとしての学名をあてた。食肉性甲虫で、地表を歩行し、昆虫の幼虫をはじめ小動物を食べる。そのため比較的有機質物の多い(他の昆虫の発生し易い)比較的植物かげや草むらなどに多い。乾燥した草地草むらなどは好まない。

ハコネエンマムシ *Margarinotus sutus*(Lawia) エンマムシ科 Fam.Histeridae ヒメエンマムシ属

現生のハコネエンマムシは体長4.0~5.0mmの黒色、つやのある、日本産エンマムシ類中、中~小形の種であるが、色と大きさが近似する。前胸背板はないので比較できないが、上腿背条がこの類の重要な種別観点となるため、その比較では1.1条~4背条は完全である。2.5・6条は後半部存在する。ことによってきわめて近似する。ただし1・2条は基部において連結することが気になる。しかしこれは個体変異による異状とみても差つかえないと思う。従ってこの標品は、ハコネエンマムシと判定しよう。

エンマムシとは体長0.5~18mm内外の暗色で頑丈な甲虫の一群で、世界に3,600種、日本に32属80種ほど知られている。食性は腐敗動物質や糞などに集まるほか昆虫類の幼虫(ウジ)なども食べ、材害虫の孔道にもぐりその害虫を食することなどもある。現生エンマムシは、枯材の樹皮下、材害虫の孔道、キノコの生える材床、動物の死体、獣糞下、腐敗材付近などで得られる(一般に)。ハコネエンマムシの生態は未だ子細不明であるが、寄生菌類の生える様な腐敗材のまわりやその材皮下、時には材中から見ることが出来る。おそらくはこの様なところで昆虫の卵や幼虫を捕食したり菌類をたべているのではないかと考える。

以上のことから、貯蔵穴内は、落葉や材質のものが、高温のためこれらは腐敗したり菌類の繁殖する様な条件下にあり、この臭気がハコネエンマムシを誘引したであろう。

ハコネエンマムシは低地性のエンマムシではあるが、低地性のエンマムシで他に同様な性質を持つ種がいくらもいるのに何故この種のみ発見されたのか。貯蔵穴と活用している時点で入ったのか掘穴になってから入ったのか。

オオマゴソコガネ Aphodius raroldianus Balthasar コガネムシ科 Scarabaeidae

コガネムシ科のうちマゴソコガネの種は、一部前脚の形が同定観点になっていることや、マゴソコガネ特有の外刺形からすぐこれとわかった。エンマコガネ類とも直ぐ区別できることで、大きさの点からもまちがいない。

マゴソとは馬糞を指す。つまり馬糞に集まるコガネムシの意で、そのうち大形の種の意体長8.5~12.5mmとマゴソコガネの日本産中大形種である。分布は九州以北シベリヤ・サハリンにわたり、邦産種は70種ほどいる。食性はマゴソならず牛糞や堆肥などにも集まり、その時は群衆する。

特に糞にきたとは考えにくく、腐敗臭によって集まったものであろうかと考えられる。ともすれば人糞や人尿の臭にさそわれたのかも知れない。しかしこれらには他の甲虫の方が多く集まるので、あえて本種が来た要因を考えない方がよく、むしろまづれ的なものとみた方がよからう。

オオハリアリ Brachyponera chinensis EMERY(?) アリ科 Rormicidae

種体は頭部のみであるため同定は不確かな点はまぬがれないが、頭部の全体形、頭部長から推測した体長、種体の色による生時の色から本種の種アリであろうと考える。

オオハリアリの他にヒメハリアリがいるが、これは赤黄褐色をしている。本種は最も普通種で4~4.5mm(種アリ)で湿地の腐木を好んで営巣する。つかまえると腹端の針でよく刺し痛い。ハリは6~7月にとび立つ。

貯蔵穴中に直径10cm以上の木材が存在したことはないであろう。従ってこのアリは付近の枯木または倒木に営巣したものであろう。このアリは行列をつくって餌を運ぶ習性があることから、貯蔵穴中にもその行列は見られたであろう。湿地または湿性地であったことはこれまでと同じである。

注3 樹種同定はパレオ・ラボ社に委託した。資料は水さらし場状遺構・第56・59号貯蔵穴出土の材である(第3章遺構各説参照)。

方法は次のように行った。同定を行うに当たって、片刃カミソリを用いて試料の横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面(径目と同義)の3断面についてつくり、ガムクロール(GumChloral)で封入し、永久標本を作成する。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40~400倍の倍率で行い、現在標本との比較により行う。以下に各種本の記載を述べる。なお、記載中の主な用語については、注3図7に図解する。

クヌギ節 Quercus sect. Aegilops ブナ科

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが見られる(放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものがある(接線断面)。以上の形質から、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木は関東地方に普通に見られるクヌギ(*Quercus acutissima*)と、東北・北陸以西に主として分布するアベマキ(*Q. variabilis*)がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースの見えるものもある。また、輪糸組織は短接線状に配列する(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、2~15細胞高である(接線断面)。

以上の形質からブナ科のクリ属クリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科

年輪のはじめに大型の管孔が1列ないし2列に並び、晩材部では小管孔が2~10個程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内腔にはらせん肥厚が明瞭に認められる(放射断面、接線断面)。放射組織は、異性1~7細胞幅、2~52細胞高で、大型の結晶細胞が見られる(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のケヤキと同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

年輪のはじめに大型の管孔が1~3個並び、以後径を減じた管孔がやや塊状に分布する環孔材である。また、木部柔細胞は周辺状もしくは連合異状である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、同性1~3細胞幅、3~10細胞高

である(接線断面)。

以上の形質から、モクセイ科のトネリコ属の材と同定される。トネリコ属の樹木には、トネリコ(*F. japonica*)やシオシ(*F. spathiana*)あるいはヤチダモ(*F. mandshurica*)などがあり、全国の温帯に分布する。

散孔材A: 小型の管孔が単独あるいは放射方向に1~3個程度複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性で1~3細胞幅、2~15細胞高である(接線断面)。

以上の形質が認められるが、保存が悪いため樹種を特定するには至らない。

散孔材B: 丸みを帯びた小~中型の道管が放射方向に2~5個複合した散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、3~39細胞高である(接線断面)。

以上の形質が認められるが、保存が悪いため樹種を特定するには至らないが、カバノキ科のアサダに似ている。参考までにアサダは全国の温帯に分布する標高15mに達する落葉広葉樹である。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 (炭化材)

小型の管孔が放射方向に2~5個複合し、夏材部ではやや径を減じて放射方向に2~5個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は12本程度の太い横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、2~38細胞高である。

以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定される。エゴノキ属の樹木は、本州以南の温帯から暖帯に分布するエゴノキ(*S. japonica*)や全国の温帯に分布するハクウンボク(*S. obassia*)あるいは関東以西の温帯に分布するコハクウンボク(*S. shirasawana*)などがあり、樹高5~15mの落葉広葉樹(小高木)である。

註4 小林達雄氏のご教示による。

註5 小林達雄氏のご教示による。

註6 リン・カルシウム分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。試料は貯蔵穴および土坑31基、弥生時代中期の井戸状の遺構が4基である。各遺構の覆土断面から、上記目的のために必要と考えられる土壌が遺構の規模に応じて採取された。分析試料の採取地点は、各遺構毎の覆土層位に対応する。合計200点の分析を行った。

試料を風乾後、軽く粉砕して径2.0mmの篩を通過させる(風乾土試料)。風乾土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾土試料1.00gをケルゲルフラスコに秤り、はじめに硝酸(HNO₃) 5mlを加えて加熱分解をする。放冷後、過塩素酸(HClO₄) 10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸染色液を加えて分光光度計によりリン酸(P2O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後原子吸光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これらの測定値と試料の水分量から、乾土あたりのリン酸含量(P2O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。結果は註4図に示した。

本報告中ではリンをP2O₅mg/g、カルシウムをCaOmg/gに換算して表示した。これらの事例から推定される土壌中のリン酸自然賦存量は、最高でも3.0P2O₅mg/gと考えられる。言い替えば、この値を著しく越える土壌(5.0P2O₅mg/g以上の土壌)では、外的要因(おそらく人為的影響)によるリン酸の著しい富化を指摘できる。一方、土壌中のカルシウムの自然賦存量の範囲は広く、リン酸よりは富化の指摘できる目安が設けにくい。ただし、同質な他試料との比較において著しく高い値が認められれば富化を指摘できよう。

以上の観点と今回の結果を考慮し、その概略を遺構各説の備考のところに記載した。

註7 放射性炭素年代測定はパレオ・ラボ社に委託した。試料とその結果を註3図5に示した。なお、遺構外の試料は採取地点を註2図1に示した(以下同様)。分析用試料は、有機質シルトやオニグルミの核および自然木を用いた。なお、測定は学習院大学放射性炭素年代測定室の水越邦彦氏にお願した。

年代は、14Cの半減期5570年(LIBBYの半減期)にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数(yrsBP)として示している。付記された年代誤差は、 β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONESIGMA)に相当する年代です。また、 β 線計数率と自然計数率の差が2 σ 以下のときは3 σ に相当する年代を下限の年代値として表示してある。

追記 註に記載された意外にもいくつかの自然科学分析を実施したのでその結果をここにまとめて記載する。

・バリノ・サーヴェイ株式会社放射性炭素年代測定試料9点、花粉分析試料3点、合計12の採取試料(シルト~細砂を主体とした堆積物)を分析委託した。

放射性炭素年代測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室に習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。なお、年代値の算出には、14Cの半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用している。結果は註2図2に示す。

花粉・胞子化石は、湿重約10gの試料について、KOH処理、除別(250 μ m)、重液分離(ZnBr₂比重2.2)、HF処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数を行う。

3試料とも花粉化石が検出されず、試料番号2(4b層)でシダ類胞子がわずかに検出されたのみである。

・古環境研究所にプラント・オペール分析を委託した。調査地点は、B2西壁、B1東壁、A東壁の3地点である。

プラント・オペールの抽出と定量は、次の手順で行った。(1)試料土の絶乾(105 $^{\circ}$ C・24時間、仮比重測定)(2)試料土約1g秤量、ガラスビーズ添加(直径約40 μ m、約0.02g) *電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量 (3)電気炉灰化法による既有機物処理 (4)超音波による分散(300w・42KHz・10分間)(5)沈底法による微粒子(20 μ m以下)除去、乾燥 (6)封入剤(オイキッド)中に分散、プレパラート作成 (7)検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オペール(以下、プラント・オペールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オペールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オペール個数を求めた。また、この値に試料の仮比重(いずれも1.0と仮定)と各種物の換算係数(機動細胞珪酸1個あたりの植物体乾重、単位:10 $^{-5}$ g)をかけて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03)、6.31、0.48である(杉山・藤原、1987)。

プラント・オペール分析の結果を註2図3に示す。なお、耕作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ族(ヒユなどが含まれる)の主要な5分類群に限定した。

・パレオ・ラボ社にプラント・オペール分析・花粉分析を委託した。

プラント・オペール分析用試料はNR-03西壁セクションより5試料(No.135~139)が採取され、同試料を用いて花粉分析も行われている。これらの試料は、No.135(2b-1層)が褐色を帯びた黒色の細砂混じり粘土で、小穴がみられるなど土質的であり、粘性が高く、土器片が含まれる。No.136(2b-3層)は褐灰色の粘土で粘性が高く、No.137(3層上部)は灰黄褐色の砂質シルトで、小穴がみられるなど土質的であるが上位層より粘性は低い。No.138(3層下部)はNo.137より粘性が高く、炭化材料のみみられ、No.139(4層)は褐灰色の粘土質シルトである。時代としては、No.135~138が弥生時代以降、No.139が縄文時代と考えられている。

以上の5試料について次のような手順にしたがってプラント・オペール分析を行った。

体積を計測・秤量した試料を乾燥後再び秤量する(仮比重測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約40 μ m)を加える。これに30%の過酸化水素水を20~30cc加え、既有機物処理を行う。これに水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により20 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりオイキッドを用は縦に長い長方形をしており、一面に小さな亀甲状文様が観察される。

今回の試料において最も多く検出されたのはクマザサ属型で200,000個前後であり、No.139では400,000個に達している。ネザサ属型は、10,000個前後のものも多く、No.139では24,300個得られている。ヨシ属はNo.138を除く試料より得られており、No.136や139では12,000個を越えているなどヨシ属としては比較的多く得られている。ウシクサ族はNo.135において10,000個に達しているが、他は4,000個前後とあまり大きな変化はみられない。またキビ族がNo.135より若干検出されている。

花粉化石は殆ど得られなかった。

註8 波辺 誠氏の御教示による。

註9 長野県小県郡東部町中原遺跡でも後期前葉の土坑が低湿地で発見されている。周辺には当該期の住居址も検出されており、本遺跡と同じく集落が広範囲に存在する例としてあげられる。報告書作製中、群馬県の矢瀬遺跡や栃木県の寺野東遺跡などの水場を利用した遺跡の通報があった。本遺跡に限らず、今後もこのような例が増加するであろう。

参考文献

- 赤沢威、米田繁、吉田邦夫 1993 『第8章環境生態学』『中央自動車道長野線垣塚文化財発掘調査報告書11-1明科町内一北村遺跡』
 アレン・テスタール 観澤 恵訳 1990 『狩猟-採集民における食料貯蔵の意義』『現代思想』12
 今村 啓爾 1988 『土坑性格論』『論争・学説 日本の考古学』2

- 今村 啓爾 1989 「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌 渡辺仁教授古稀記念論文集』
- 今村 克夫 1990 「白山山麓の薬草と食物植物」『山の味—山村の食制と山の植物誌』エンタプライズ
- 伊与部論夫 1991 「寺前遺跡A-2地区」『新潟県埋蔵文化財調査だより』No.7
- 岡村 秀雄 1992 「長野県中野市栗林遺跡」『日本考古学年報』44
- # 1992 「長野県栗林遺跡の貯蔵穴とさらし場」『考古学ジャーナル』354
- 柏崎市史編さん委員会編 1987 『柏崎市史資料集 考古篇』1
- 金指 文夫 1990 「川口市赤山屋跡遺跡西側低湿地検出のトチの実加工場跡」『考古学ジャーナル』325
- # 1989 「赤山」川口市遺跡調査会
- 北江古田遺跡調査会 1987 『北江古田遺跡発掘調査報告書(1)』
- 小宮山 隆 1992 「中部高地縄文時代後晩期の遺跡立地について」『筑波大学先史学・考古学研究』第3号
- 斎藤 基生 1982 「植物調理用石器」『季刊考古学』1 雄山閣出版
- 坂本 育男 1990 「トチと魚—大野市下打波の食と味」『山の味—山村の食制と山の植物誌』エンタプライズ
- 佐々木高明 1988 『縄文文化と日本人—日本基層文化の形成と継承』小学館
- 佐々木藤雄 1973 『原始共同体論序説』共同体研究会
- 瀬見 浩・近藤義郎 1956 「岡山県山陽町南方前池遺跡—縄文式末期の貯蔵庫発見—」『私たちの考古学』第7号
- 瀬見 浩 1986 『探訪 縄文の遺跡 西日本編』有斐閣選書R
- # 1986 「縄文時代の食物植物—堅果類の貯蔵庫群を中心として—」『日本考古学論集2 集落と衣食住』雄山閣出版
- ジョン・M・コールズ 河合信和訳 1987 『古代人はどう暮らしていたか [実験考古学入門]』株式会社どうぶつ社
- 鈴木 公雄 1985 「日本の新石器時代」『講座 日本の歴史1 原始・古代1』東京大学出版会
- # 1988 「2 縄文時代論」『日本考古学を学ぶ(3) 原始・古代の社会』有斐閣選書
- 仙台市教育委員会 1981 『仙台市大野田六反田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第34集
- 高橋一夫、他 1989 「後谷遺跡」『平成元年度考古学協会大会資料』
- 橋 礼吉 1989 「白山麓の焼畑地域における堅果類の植物利用」『石川県立歴史博物館紀要2』
- 塚本 脚也 1993 「食物貯蔵」『季刊考古学』第44号
- 津南町教育委員会 1984 『新潟県中魚沼郡津南町 八反田遺跡発掘調査報告書』津南町文化財調査報告書 No.14
- 戸沢光則編 1985 『探訪 縄文の遺跡 東日本編』有斐閣選書R
- 長岡市教育委員会 1981 『埋蔵文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡』
- 永瀬 福男 1982 「貯蔵穴」『季刊考古学』1 雄山閣出版
- 長野県埋蔵文化財センター 1992 「中原遺跡」『年報9』
- 西田 正規 1989 『縄文の生態史観』考古学選書13 東京大学出版会
- 日本考古学協会・日本考古学協会山梨大会実行委員会 1984 「昭和59年度大会資料 シンポジウム縄文時代集落の姿遷」
- 橋口 尚武 1983 「調理」『縄文文化の研究2 生業』雄山閣出版
- 橋本澄夫・垣内光水郎 1990 「龍野町ダイラクボウ遺跡の貯蔵穴」『考古学ジャーナル317』
- 羽生 淳子 1990 「縄文人の集落の大きさと人口はどの程度か」『争点 日本の歴史1 原始編』新人物往来社
- 林 謙作 1992 『縄紋時代史12 縄紋人の生業(4)』『季刊考古学』1 雄山閣出版
- 林 弥栄・富成忠夫監修 1987 『樹木たちの歳時記』講談社
- 星川 清規 1991 『新編 食用作物』養賢堂
- 北海道埋蔵文化財センター 1989 『小樽市 忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北海道埋蔵文化財調査報告書 53
- 堀越 正行 1975-1977 「小笠穴考」(一)~(四)、『史館』5・6・8・9
- 松山 利夫 山本紀夫編 1992 『木の実の文化誌』『朝日選書』459 朝日新聞社
- 宮城県教育委員会 1987 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書3. 小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書 第122集
- 三宅 敦筑 1993 『縄文時代後・晩期のムラ 一群馬県・矢瀬遺跡—』『考古学雑誌』第79巻第1号
- 村田 文夫 1985 『縄文集落』考古学ライブラリー-36 ニュー・サイエンス社
- 安田 喜憲 1987 『世界史のなかの縄文文化』考古学選書26 雄山閣出版

第3節 縄文中期後葉から後期初頭の土器群

はじめに

栗林遺跡から出土した土器群は縄文時代中期中葉から後期中葉に編年される。しかし、長野県北部や千曲川水系では、当該期の遺跡調査例に照らしても、土器編年については周辺地域との並行関係を指摘するにとどまり、地域的様相が把握されていないのが現状である。本報告でも他地域の編年と対応させ、出土土器を12群に分類したが、型的に分離できない群もあり、編年単位となしえない。

そこで、長野県北部や千曲川水系の、中期後半から後期初頭の土器変遷の概略を把握しながら、栗林遺跡の縄文土器のありかたを簡単にまとめておきたい。なお、縄文時代後期前葉から中葉の土器群については不明な部分が多く、ふれることができなかった。

1 中期後葉の土器群

本報告のⅡ・Ⅲ群土器は、器形や文様から加曾利E式土器様式(以下加曾利E様式と呼ぶ)の後葉に並行する土器群であるが、加曾利E様式そのものなのか、あるいは別様式と考えるべきなのか、問題点となる。器形や文様を関東地方のそれと比較すると若干の地域性をもつが、様式の範疇を逸脱したものとはいえない。本遺跡を含めた千曲川水系にはこの加曾利E様式を主体とする遺跡が点々と分布している。

本遺跡を含めて千曲川水系が、加曾利E様式分布圏の西北限を形成している事実は、あまり広く知られていないのではなかろうか。ちなみに、各土器様式の分布図が掲載されている『縄文土器大観』をみると千曲川水系の当該期は空白地帯となっている。もちろん、千曲川水系に加曾利E式様式が分布することは県内の多くの研究者の指摘するところであるし、いくつかの遺跡では独自に編年案が提出されている。しかし、体系的にまとめられることがなかったといえよう。

そこで、次のような視点から、千曲川水系の中期後葉の土器様相を概観することから始めたい。

千曲川流域の加曾利E様式に比定される土器群の様相や変遷は、原則的に加曾利E様式のそれと同じと考えられる。しかし、千曲川流域の当該期の土器群は、加曾利E様式の土器のみで構成されてはならず、一定量の唐草文系土器や圧痕隆帯文土器等の複数の系譜からなる土器群によって構成されている。

そこで、こうした異系統の土器から構成される土器を概観するために、それぞれの系統の土器の量的な構成比に注目した。

もちろん、ひとつひとつの遺跡の土器を個別に分類し、その系統と量を数え上げることは不可能であるため、報告書に図示された資料を対象とした。そのため、各系統の構成比は正確なものではないが、一定の傾向は知り得ると考える。以下、千曲川水系のいくつかの遺跡について、土器様相を概観してみたい。

①吹付遺跡(長野県佐久市大字香坂曲尾311番地)(第436図)

南向きの緩斜面に形成された小谷を囲むように、12棟の住居址、1基の屋外埋壘、約80基の土坑が検出されている。住居址はいずれも中期後半で、敷石住居址2棟を含んでいる。

第11号住居址：加曾利E様式V段階。Ⅶ段階(第436図1～8)

拓影図も含めて全部で21点の土器が図示されているが、加曾利E様式9点、唐草文系土器様式(以下「唐草文系」とする)が10点、判別不能2点の構成となっている。ただし、本住居址一括資料は第V(1・2)と第Ⅶ段階(3～4)が混在している。

第5号住居址：加曾利E様式第VI段階(第436図9～16)。

拓影図も含めて全部で21点ある。うち、加曾利E様式29点、唐草文系18点、判別不能4点である。

第6号住居址：加曾利E様式第VI段階(第436図 9・10)。

2点あり加曾利E様式の範疇で考えることができる。ただし、この住居址は覆土が失われており、全体の様子は不明である。

第4号住居址：加曾利E様式第VI段階(第436図 19～14)。

拓影図も含めて24点ある。うち、加曾利E様式18点、唐草文系5点、その他1点である。敷石住居址で、3基の埋甕を伴い、いずれも加曾利E様式である。

第9号住居址：加曾利E様式第VII段階(第436図25～28)。

敷石住居址で、合計5点の加曾利E様式が出土している。

②四日市遺跡 小栗郡真田町長横尾四日市(第437・438図)

上田盆地の北東、千曲川の支流である神川の形成した河岸段丘上に、中期後半の住居址25棟と多数の土坑が検出されている。

遺跡全体で合計33点の土器が図示されている。うち、加曾利E様式21個体、唐草文系10個体、圧痕隆線文土器は1個体、その他2点となっている。

加曾利E様式には口縁部文様帯が胴部文様帯とつながるもの、U字状のモチーフが施文されるもの、頸部に隆線がめぐられ、そこから隆線が垂下し、胴部を縦方向に区画するものなど、第VI～VII段階が出土している。唐草文系土器は口縁部から垂下するように、胴部全体に渦状のモチーフが施文されるもの、口縁部に渦状のモチーフが施文され、そこから隆線文が垂下するもの、口縁部の渦状のモチーフが消失しているもの等がある。

③円光房遺跡：埴科郡戸倉町大字須坂(第439図)

扇状地上に立地し、22基の縄文中期後半の住居址が検出されている。主体となる土器群は加曾利E様式である。そして、とくに注目される刻目隆帯文の存在である。

第2号集石遺構：加曾利E様式第V段階

加曾利E様式6点(1～6)、加曾利E様式系2点(7～8)、圧痕突帯文土器1点(図9)が図示されている。加曾利E様式は、口縁部文様帯と胴部文様帯の間に無文部をもつ(1)、口縁部文様帯と胴部文様帯が接続する(2)、大きな逆U状のモチーフが施文される(3)などがある。圧痕突帯文土器は波状の条線文を地文として、刻目隆帯が頸部をめぐり胴部へ垂下し、その末端が渦を巻いている(9)。

第1号住居：加曾利E様式第VI段階

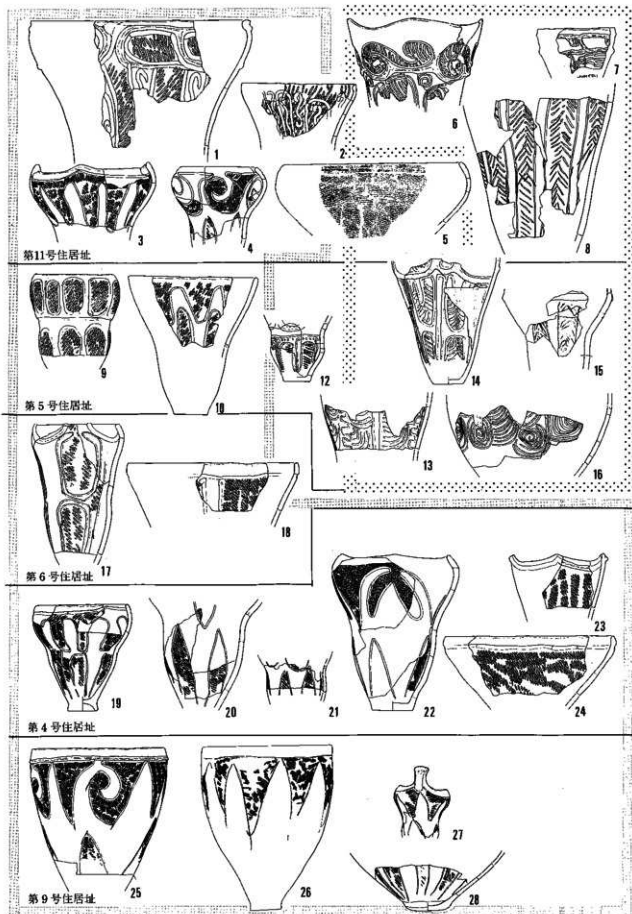
加曾利E様式3点。U字状のモチーフが施文されるが、沈線によるものと隆線による二者がある。

第4号住居：加曾利E様式第VI段階

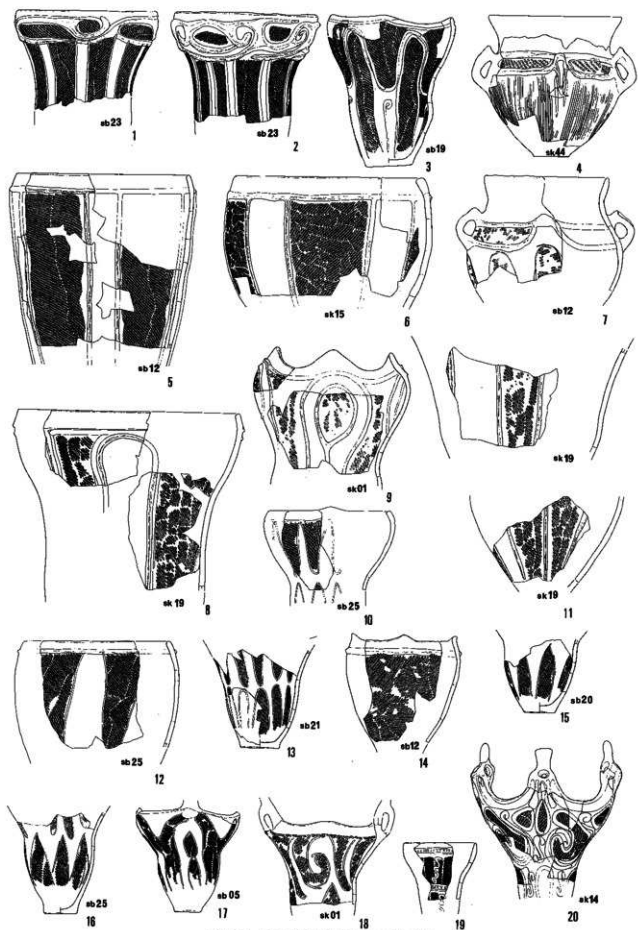
加曾利E様式1点、圧痕隆帯文土器2点。加曾利E様式は互いに向き合うU字状のモチーフが施文される。2点の刻目隆帯文土器は縄文を地文として刻目隆帯が施文される。両例とも完形ではなく全体の文様構成は不明である。14は頸部に刻目隆帯がめぐり、二条の刻目隆線が対になって垂下し、沈線文が施文されている。15は刻目隆帯が頸部から垂下する。おそらく、頸部に刻目隆帯の渦巻文があり、その一端が頸部を水平にめぐり、1/4周し、胴部に垂下するものと思われる。

第13号住居：加曾利E様式第VII段階

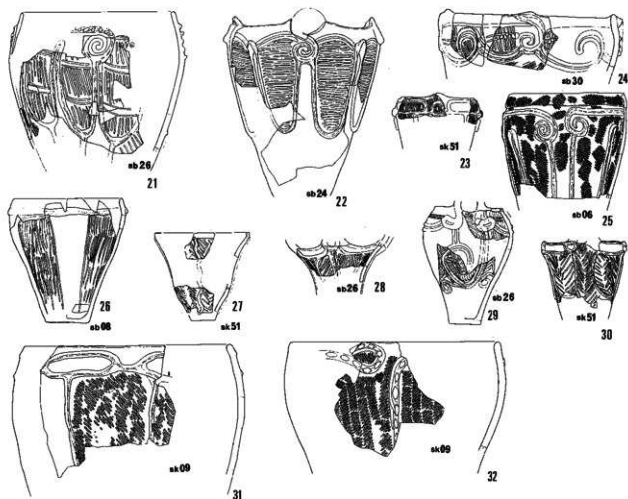
加曾利E様式と唐草文系が1点ずつある、加曾利E様式は隆線による渦巻文描かれる。



第436図 佐久市吹付遺跡出土の土器



第437図 真田町四日市遺跡出土の土器 (1)



第438図 真田町四日市遺跡出土の土器 (2)

唐草文系は胴部全体に縦に長い列点が施文されている。

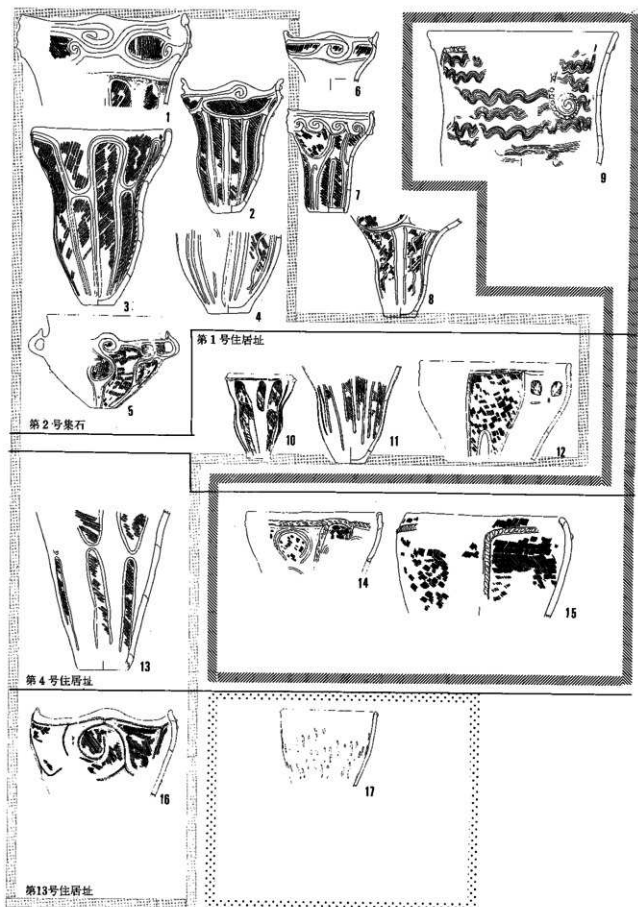
④大庭遺跡：北佐久郡立科町大字芦田字大庭(第440図)

台地上に位置し、中期後半の住居址13棟が検出されている。10点。うち、加曾利E様式2点、唐草文系4点、その他系統不明4点がある。加曾利E様式はU字状のモチーフや、その先端が曲がり渦巻状になったものである。唐草文系は口縁部文様帯が無文化し、頸部をめぐる隆線から二条の沈線が垂下し、胴部を縦に区画するもの、逆U字状のモチーフが胴部に施文され、矢羽状の沈線文が充填されるもの、逆U字状の内側にさらに円形の区画が施文されるものなどがある。

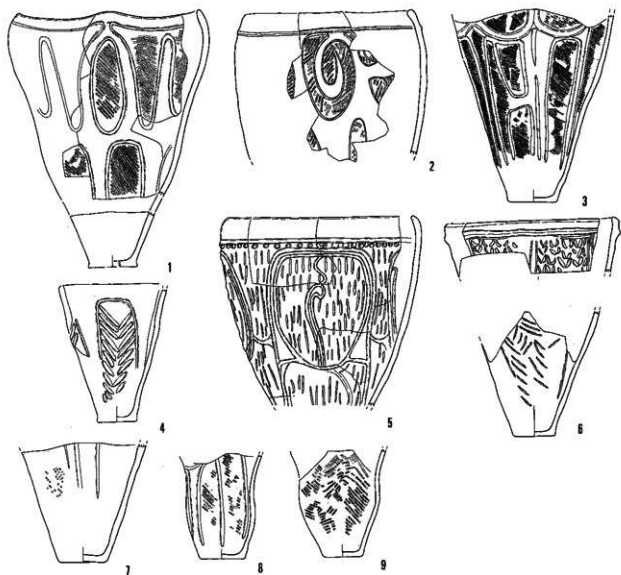
⑤北村遺跡

千曲川の支流である犀川水系に属し、松本盆地北部にある北村遺跡の出土土器についてふれておきたい。遺跡全体の当該期土器は、加曾利E様式と唐草文系で構成されている。ただし、千曲川水系における様式の構成比が逆転し、唐草文系の占める割合が大きい。加曾利E様式の影響をうけながら、千曲川水系とは異なる地域相がうかがわれる。

このように、千曲川流域の中期後半の土器群は加曾利E様式と唐草文系土器、圧痕突帯文土器で構成される。加曾利E様式が中期後葉の土器群の、主体となっていることが明らかである。そこで、加曾利E様式の編年を準用し、千曲川水系の中期後葉の土器群を次の①～⑩に編年することが可能である。



第439図 戸倉町円光房遺跡出土の土器



第440図 立科町大庭遺跡出土の土器

①加曾利E様式第V段階

深鉢形土器の口縁部及び胴部文様帯が明確に区分されるが、その間に無文帯が設けられない段階である。吹付第11号住居(SB11)、円光房第2号集石出土の土器群を本段階に位置づけることができよう。千曲川上流域の吹付遺跡では唐草文系が伴い、千曲川中流の円光房遺跡では刻目隆線文が伴う。いまのところ、千曲川流域はこの段階から、加曾利E式土器様式圏に組みこまれるようになったと考えられる。

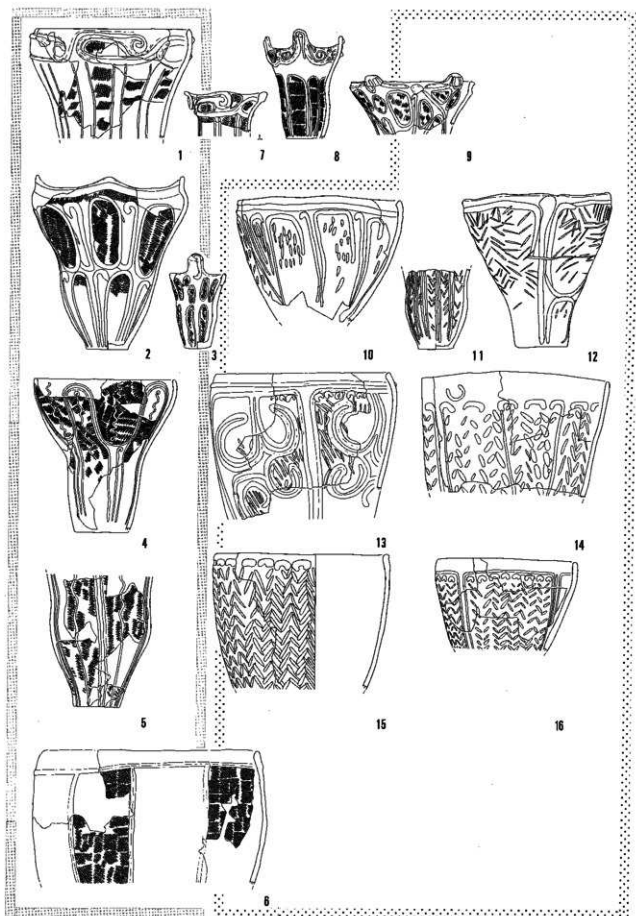
②加曾利E様式第VI段階

深鉢形土器の口縁部文様帯が形骸化あるいは無文化する段階で、対向するU字文が出現する。吹付第5・6号住居(SB05・SB06)、円光房第1・4号住居の資料はこの段階である。前段同様吹付では唐草文系が、円光房では刻目隆線文土器がそれぞれ伴う。

③加曾利E様式第VII段階

口縁部文様帯が無文化する段階であり、胴部上半に渦状のモチーフが現れる。吹付第4・9号住居、円光房第13号住居出土土器が相当する。

傾向として千曲川流域の中期後半の土器群は以上のように変遷すると考えられ、その変遷の大意は、関東地方の加曾利E式土器様式とほぼ同様であると考えことに矛盾はない。



第441図 明科町北村遺跡出土の土器

栗林遺跡の加曾利E式土器様式を、文様が沈線か、あるいは隆線で施文されるかによって、大きくII群とIII群に分類したが、III群A類を除くと、両者の文様構成はきわめてよく似ている。II群A類とIII群B類は対向するU字文、II群A類とIII群B類は口縁部文様帯が無文化し、胴部に沈線あるいは隆線による垂下文、II群C類とIII群D類は口縁部文様帯と胴部のそれが区画されるが、胴部は縄文ないし無文となる。これらの土器群は、沈線と微隆起線の違いが時間差か、系統の違いか判然としなが、稲村が指摘するように時期的に並存したと考えたい〔稲村1990〕。

千曲川流域の地域性とみられる要素もあるが、胴部に沈線あるいは隆線が垂下する類は口縁部文様帯が無文化している点、対向するU字状文は互いに深く入りこまず、渦状モチーフが認められる点などは、我孫子編年のVI段階以降の要素として位置づけられるものであろう〔安孫子1981〕。

一方、変遷の項で述べたように北信地方では加曾利E式に圧痕隆帯文土器が伴う。本遺跡第IV群土器がそれにあたる。圧痕隆帯文土器は綿田弘実が最初に抽出した土器群であるが、本調査では綿田の指摘以上の新しい知見を与えることはできなかった〔綿田1983〕。

本遺跡出土の圧痕隆帯文土器には二種ある。一つは太めの隆帯上に指頭で押圧した綿田分類III群、篋状工具で刻目を刻んだI・II群である。前者は刻目隆帯が口頭部のみをめぐると思われるが、後者は胴部に垂下する。この二者は系譜的に連続するのか、あるいは異なるのか、資料が少なく不明瞭な部分が多い。綿田が指摘するように、篋状工具で刻目を施文する類はより古い段階に、太めの隆帯で指頭によるものは新しい段階、場合によっては後期初頭まで残存すると考えられる。中期後半に伴うものは篋状の工具で刻目した類であろうか。

こうした一群の土器が千曲川流域を中心とした地域に散見されるが、今のところ、この土器群が中期後葉では主体を占めている事実は認められない。おそらく量的にはそう多くなく、加曾利E様式の後半段階に伴い、独自の地域相を形成する要素とはなっているが、加曾利E様式が千曲川流域に浸透する以前の土器に系統がたどれるのではないかと想定している。また、太い隆線に指頭による押圧文(圧痕隆帯文と呼ぶにふさわしい)を施す類は、それとは別の系統上にあるのではないかも考えている。

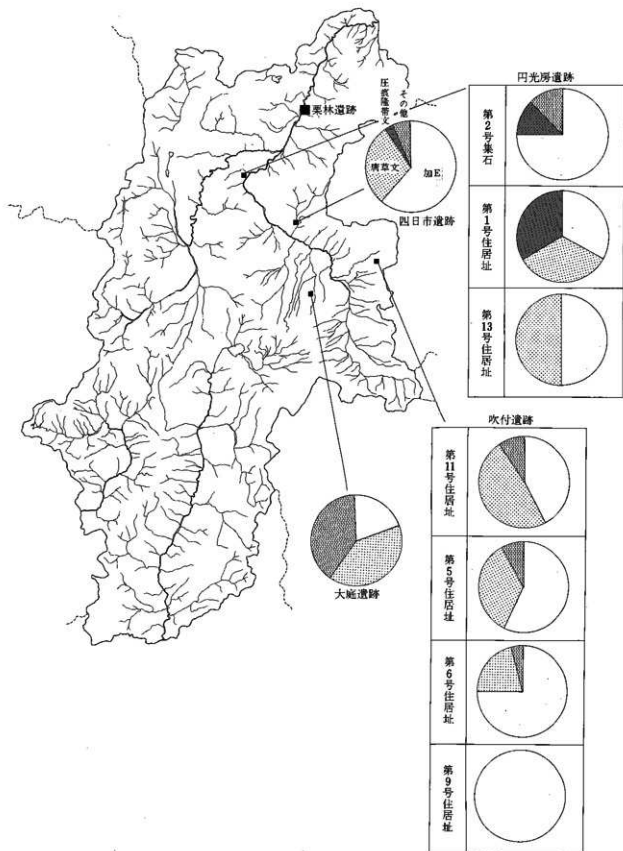
以上、概観したように、栗林遺跡も含めて、中期後葉の千曲川流域は、加曾利E様式分布圏の周縁的な地域といつてよい。唐草文系の存在は確認されるが、加曾利E様式と比較すると量的に少なく、長野県南部の唐草文系分布圏とは別の地域として区別されるべきであろう。

今のところ、千曲川流域に加曾利E様式が登場するのはその第V段階以降である。末木健は唐草文系の後半に至って、加曾利E式の影響が強くなる傾向があると指摘〔末木1983〕している。こうした状況は千曲川流域における加曾利E様式の進出と関連するかもしれない。なお、千曲川流域の加曾利E式第V段階以前の中期後半の様相は不明である。

千曲川流域は加曾利E式土器様式分布圏内にあるといえども、そこには一定量の唐草文系や圧痕隆帯文が伴っている。確かなことはいえないが、東信地域では唐草文系が伴い、北信地域ではその量が少ない。反対に、圧痕隆帯文土器は前者に少なく、後者地方の方が多いという傾向にある。また、唐草文系は加曾利E式第V・VI段階においては一定量伴う、第VII段階に至ると極端にその量が減る。

当該期の関東・中部高地・東北南部・北陸地方北半には複数の土器様式が並存している。隣接する地域に分布するいずれの様式も何らかの形で類似点をもっている。こうした、大きな類似性をもつ土器群を分割して、複数の様式圏が存在する。様式の分布圏はその周縁部で互いにオーバーラップする。そして、様式の分布圏内の一定の小地域では複数の土器群が、それぞれ異なる構成比率で存在し、地域相を形成している。

千曲川流域における中期後葉の土器群の変遷過程や、唐草文系土器様式・圧痕隆帯文土器との共存関係



第442図 千曲川流域遺跡における加曾利E・庄底隆帯文・唐草文系の組成

のあり方は、この地域独自の地域相と考えられよう。地域相を構成する加曾利E様式・唐草文系各土器様式のあり方や変遷は、それぞれの様式分布圏の中心地域のそれと原則的に同じであるということができよう。

また、石坂茂・藤巻幸男・桜岡正信等は加曾利E式末葉の土器群を分析し、それらが称名寺式の段階まで残存していることを明らかにしている〔石坂他1991〕。栗林遺跡出土のⅡ・Ⅲ群も当然のことながら、こうした視点からも検討されるべきであろう。

2 後期初頭の土器群

長野県下の後期初頭の資料は極めて少なく、しかも断片的に知られるのみで、その様相はほとんど不明である。栗林遺跡でも破片資料が大半であり、その全形を知りうる資料は少ない。そのため、遺物各説では文様を構成する要素で分類したが、本遺跡の称名寺式土器様式のあり方を知るために、あえてここでは文様のモチーフを考えてみたい。

称名寺式土器様式の文様は大きく次のタイプに分けられる。地域性を示す基本タイプ、北関東内陸、同海岸、房総、中津などに分類することができる。これらのタイプのうち、変遷過程を最も良く表現するのは基本タイプのJ字状文系の土器文様である〔中島1983〕。称名寺様式第Ⅰ段階のJ字状文は文様モチーフの反転という特殊な変化の過程を経て、M字状文へと変化し(第Ⅱ段階)、変化したM字状文は沈線と列点のみで構成されるようになり(第Ⅲ段階)、次に沈線のみで施文され、モチーフも形骸化する(第Ⅳ段階)。

比較的大形の破片で文様モチーフの全体が推測できたものは、基本タイプのM字状文の類(第82図30~33)であるが、30・31はM字状文をさらに反転させたものと思われる。同様の資料は多い。二回反転することで生じるM字状文は北関東地方に比較的多く、千曲川流域と北関東との関連性を示すものかもしれない。

栗林遺跡出土の称名寺式土器様式には、最も古い段階が存在しないとは断言できない。この様式の最も古い段階の基本タイプに属するJ字状文はないが、中津タイプが出土している。中津タイプは称名寺様式の古い段階に位置するという見解があり、場合によってはJ字状文に先行することも考えられる。その根拠は中津タイプに加曾利E式土器様式の系譜上にある土器が伴うことにある。本遺跡でも胴部に縄文や条線のみが施文される第Ⅶ群土器があり、これらは加曾利E式と系譜的に連続し、時期的に後出的な様相をもっており、これが中津タイプに伴う可能性が考えられる。

今、筆者は中津タイプが最古段階に位置するという見解を否定する確証をもたないが、称名寺式土器様式が関東地方の荒川流域で、加曾利E様式を母胎に成立し、その分布圏に拡散すると同時に、周辺地域の土器群にも影響を与えたのではないかと考えている。中津タイプは神奈川県以西に高い密度で分布し、その主たる分布領域がかたよること、加曾利E式土器様式の系譜をひく土器群が、称名寺式土器様式の比較的新しい段階にまで並存する事実が明らかにされ、加曾利E式土器様式の系譜をひく土器との共伴関係のみでただちに古い段階と結論づけられないことなどから、それを古相と見るのではなく、地域相とすることも可能ではなからうか。

また、長野県下の称名寺式土器様式の成立を考えると、その前段階の土器様相も考慮しなければならない。千曲川流域は加曾利E様式の分布圏であり、長野県の南半は曾利様式や唐草文系土器様式の分布圏となっている。こうした前段階土器様式の違いが、称名寺式土器様式の成立、あるいは波及のあり方に影響していると考えられるからである。先述した中津タイプの編年の位置づけにもよるが、千曲川流域の称名寺式土器様式の成立あるいは波及は、北関東の加曾利E式土器様式圏との関連で捉える必要があるだろうし、長野県南半は神奈川県以西の土器様相との関連で追及する必要があるだろう。

一方、当地域の称名寺式土器様式の後半を考えるうえで、第82図32、第97図449～451、454は重要な意味をもつものかもしれない。これらの文様モチーフは称名寺式土器様式II段階と類似するが、モチーフが1本の沈線で施文されるにもかかわらず、3本の沈線のようにみえる。このような例は称名寺式土器様式では希であり、当地域の独自性、あるいは堀之内式土器様式で3本組の沈線が多用されることに関連するとの想定もできる。

どのように加曾利E式土器様式並行段階に後続し、堀之内式土器様式へ移行するかは不明であるが、いずれにしろ、後期初頭の千曲川流域に称名寺式土器様式が広範囲に分布する可能性は高い。

参考文献

- 安孫子昭二他 1981 「縄文時代中期後半の諸問題」
 石坂茂 他 1991 「縄文時代後期初頭における加曾利E式系土器の様相」『群馬県史研究』第35号
 末木 健 1983 「曾利式土器様式」『縄文土器大観』2
 中部高地縄文土器集成グループ 1979 「山梨・長野における縄文時代中期後半の土器編年」
 中島 庄一 1983 「称名寺式土器様式」『縄文土器大観』3
 綿田 弘実 1983 「北信地方における縄文中期後葉より後期初頭の土着土器」『須高』 須高郷土史研究会

第4節 縄文時代の石器

1 時期と組成

縄文時代の石器は、打製石斧(約1400)、同素材剥片(約30)、同調整剥片(約1100)、磨製石斧(約90)、石匙(約10)、石錘(約45)、石鏃(約410)、石鏃未製品(約270)、石錘(約15)、石核(約130)、剥片(約4200)、磨石・凹石類(約720)、石皿・使用面をもつ礫(約160)、搔器(約70)、総数約8700点となる。打製石斧と石鏃の出土量が多さが特徴的である。

関東・中部高地では、打製石斧が縄文時代中期の石器組成の大半を占め、中期後葉から減少し、後期では少量となり、分銅形の打製石斧を伴う。こうした趨勢からみれば、栗林遺跡の石器群は中期的な様相と考えることができる。しかし、本遺跡の主体となる土器群は中期後葉以降であり、打製石斧の数が減少に転じている時期である。一方、北陸地方は、関東・中部地方とは異なり、中期末葉から後期前葉にかけて打製石斧が増加するが、本地域の打製石斧の多さは北陸地方における後期の様相と類似していると考えられる。しかし、土器群が関東地方とのつながりを示していることから、石器群が北陸地方と同様な傾向をもつと即断することはできない。共伴した土器群の時期とそう大きく異なる時期とは考えず、中期後葉(より新しい時期)から後期前葉にかけての石器群としてよいであろう。

水さらし場状遺構・貯蔵穴との関連性、植物性食料の加工と貯蔵に関連する特徴的な石器組成や器種は、表面に摩滅痕がある一抱え大の礫が多出したことを除けば、通常の集落遺跡とそれほど変わらない。

2 分布

出土位置を概観するといずれの器種も各グリッドから出土しているが、石鏃・剥片類(チャート・黒曜石)と打製石斧、磨石・石皿類の分布密度が異なっている。石鏃・剥片類は居住空間と考えられる段丘面上の自然流路付近(XIV-J)に、打製石斧類は貯蔵穴群の分布する谷底部から段丘斜面(XIV-A・B、XII-U)にそれぞれ集中する。また、磨石や石皿は谷底、段丘面上どちらにもほぼ同様に分布する。

こうした石器の分布密度が、直ちにその場の作業の違いを反映するとはいえない。石器は廃棄され、さらにその後自然の営力を受け、移動していると考えられるからである。しかし、廃棄以前の状況をまったく反映していないとも一概にはいえない。少なくとも、打製石斧と石鏃類は異なる地点に廃棄される傾向が強いことから、打製石斧の使用と石鏃の使用や製作が一緒に行われず、別の作業単位であったことがうかがわれる。打製石斧の機能は不明であるが、狩猟と採集に用いる石器の区別、あるいは作業の季節性による使い分けなどが、石器の廃棄と結びついている可能性が高いのではなからうか。

縄文時代の石器の分布分析では、集落内における作業空間の認識と機能という視点が重視されてきた。しかし、石器が原位置を保っている場合は少なく、多くの場合は廃棄されたものであり、直接的に機能空間を想定することは難しい。一方、廃棄に作業単位が反映していると考えれば、今述べたようにいくつかの背景が想定される。栗林遺跡では石鏃の使用と製作、打製石斧の使用が別の作業単位であることを推測できたにすぎないが、こうした視点からの分析も縄文社会復元の糸口にならう。

3 石器の製作

次いで、打製石斧と石鏃を中心に、栗林遺跡における石器製作のあり方を概観したい。石器製作の分析は剥片剥離技術など技術論の側面が中心に論じられてきた。しかし、一方では母岩の採取、母岩・製品の運搬・交換という側面が石器生産を考えるうえで重要な要素である。そこで、本遺跡出土の打製石斧と

石鏃について、石器や石材がどのような遺跡にもたらされているのかをまず考えたい。

打製石斧の母岩は出土していないが、製品や未製品などの形状から、やや磨減した角礫であり、その状態から母岩の採取地点は露頭からそう離れた地点ではないと思われる。石材は頁岩が中心で、近隣で採取可能であるが、採取地点を確定することはできなかった。

素材は採取した母岩をそのまま利用する場合と剥片を利用する場合があり、剥片素材も縦長、横広剥片の両者が混在し、形状は様々ではない。調整加工は比較的丁寧であるが、調整剥片の中には磨減痕が認められるものが相当数含まれており、刃部再生などの二次加工の結果である可能性も高い。

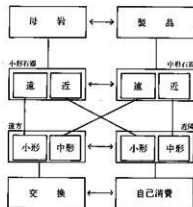
ここでみられるような打製石斧の母岩の形状や素材剥片の剥離方法の多様性は、旧石器時代の石器製作との大きな相違点である。母岩の採取から製品にいたる打製石斧の製作工程が連続した一連の作業ではなく、素材製作と調整加工の作業工程が別々に考えられていた結果ではないか[中島1983]。言いかえれば、手順や方法はどうかであれ、打製石斧が完成すればよいという結果重視形の石器製作であり、縄文時代特有の石器製作方法であると考えたい。

ところで、栗林遺跡からは打製石斧が約1400点出土したのに対して、打製石斧調整剥片は1100点出土したにすぎない。打製石斧1点に対して調整剥片が1点未満という割合は、斎藤基成が指摘するように、集落内で打製石斧が製作されたとするには余りにも少ない[斎藤1978]。出土した打製石斧調整剥片には二次加工で生じた剥片も含まれているのであるから、その割合はさらに小さくなる。素材や未製品もあるが、その数は少なく、大半の打製石斧は集落以外の場所で製作され、製品として遺跡にもたらされている可能性が高い。

他方、石鏃の石材はチャートと黒曜石が主体であり、石核と多量の剥片が出土していることから、母岩が集落に搬入され遺跡内で製作されたことは明らかである。石核の大きさから、持ち込まれた母岩は拳大以下のものであろう。石核は不定形であり、剥離された剥片も規格性に乏しく、剥片の用い方も多様である。

石鏃の未製品が集中して出土した新潟県十二木遺跡例を分析した鈴木俊成は、まず母岩から任意に大量の剥片が剥離され、その中から適当な剥片が石鏃の素材として選択されるとしているが、本遺跡の石核や剥片と同様の様相が観察され、縄文時代的な結果重視形の石器製作方法が採用されていたとすることができる。また、鈴木俊成の分析によれば、出土した大量の石鏃未製品は原石の採集、剥片剥離、初期の調整加工を終えたものが置き忘れられた結果とされ、打製石斧と同様に、最終的な調整加工と素材製作が時間・場所的に非連続である可能性を示唆している(鈴木1992)。

以上、打製石斧と石鏃の製作は縄文時代的な結果重視形の石器製作という共通性をもつが、打製石斧は製品の形で集落にもたらされ、石鏃は集落内で製作される。こうした石器製作のあり方は栗林遺跡の特殊な例ではなく、縄文時代の遺跡に普遍的に認められる(鈴木1983)。一方は製品で、他方は母岩で遺跡に持ち込まれているのはどうしてであろうか。また、小形剥片石器の母岩であるチャートは近隣で採取可能であるが、黒曜石の産地は遠方にある。中形石器である打製石斧と蛇紋岩製の磨製石斧はいずれも製品の形で遺跡に持ち込まれるが、打製石斧は近隣で、磨製石斧は遠方で製作されている可能性が高い(山本1991)。中形石器は製品、小形石器は母岩で持ち込まれ、石斧と石鏃にはそれぞれの運搬距離に遠方と近隣がある。つまり、運搬距離と持ち込まれる形態に差異の二重構造ともいべき様相が読み取れる。そして、遠距離から運搬された蛇紋岩の磨製石斧、黒曜



第443図 石器製作のあり方

石の母岩は近隣のものが代用可能であり、機能主義的な必要性のみでは理解し得ない側面を含んでいる点に注意したい。

また、モノの所有権が移る交換と移動は区別されなければならない。縄文時代における事物の拡散が移動、交換、あるいは両者が並存しているのかを考えるうえで、上述した二重の構造は興味深い。例えば、いずれも交換であったとすれば、広域流通圏と狭域交流圏の二重構造が想定される。また、移動であったとすれば広域を移動する人々の存在が考えられる。栗林遺跡の事例のみで、早急に結論をみいだすことはできないが、こうした視点からの石器群の分析ができれば、一步踏み込んだ縄文時代像を描くことができよう。

4 打製石斧の使用痕

98点(約6%)の打製石斧に磨耗痕が認められた。使用痕にはいくつかの種類があり、対象や石材、機能の違いを反映している。磨耗痕はヤスリで削られたような痕跡を指し、石器の表面が削りとられたように見えるところから光沢痕や線状痕と区別しているが、その形成のメカニズムは不明である。今回、観察した磨耗痕には光沢や線状の痕跡が並存して認められた。

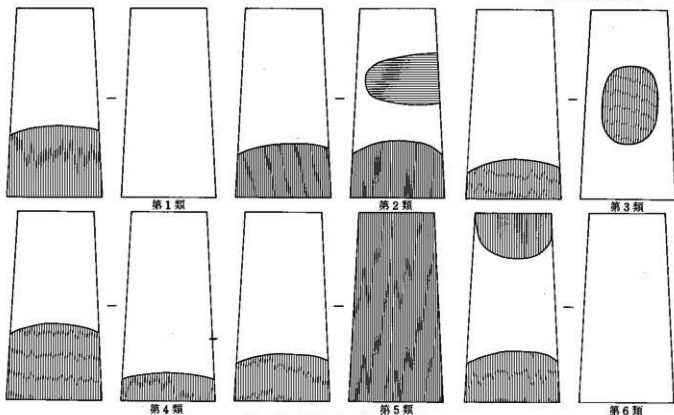
磨耗痕の生じている部位から以下のように分類できる。

- 1類：刃部の片面に垂直方向の磨耗痕が生じている類(72点)。
- 2類：刃部の両面に垂直方向、裏面の中央に横方向の磨耗痕が生じている類(4点)。
- 3類：刃部の表面と裏面の中央部分に垂直方向の磨耗痕が生じている類。中央部分の磨耗痕の範囲は刃部にとどかない(5点)。
- 4類：刃部の表裏面に垂直方向の磨耗痕が生じている類。表裏同様の範囲、一方が狭いもの、どちらかの側縁にかたよる例がある(12点)。
- 5類：表面は刃部先端部に、裏面はほぼ全面に磨耗痕が生じている類(3点)。
- 6類：刃部と頭部の片面に垂直方向の磨耗痕が観察される類(2点)。

磨耗痕の方向は刃部に対してほぼ垂直であるが、2類に見られるように側縁部に垂直方向に形成されているものもある。また、1類を例にとると、刃部から全長の約1/8部分まで生じているものが14点(19%)、1/4が15点(20%)、3/8が15点(20%)、1/2が19点(26%)、5/8が8点(11%)、3/4が1点(1%)となっている。全長の約3/8、1/2部分までのものが全体の約46%を占め、磨耗痕は意外と広い範囲に生じている。また、5類のように全面に、あるいは3類のように中央部分に観察され、刃部にまで連続しない例もある。

磨耗痕の生じる部分には若干のバリエーションがあるが、刃部に生じた磨耗痕の方向は刃部にほぼ垂直で共通している。1・6類では片面が、2～5類では表裏面ともに対象に接しているが、後者には表面が広く、裏面が狭いものが含まれ、両例とも現在の「クワ」のような使われ方(運動)で生じると考えられる。しかし、最も知りたい対象は明らかでない。磨耗痕は剥離の凹面内にも認められるが、剥離面の稜にある磨耗痕と比較すればその程度は弱い。したがって、対象は石器の表面の凹凸に密着するほど柔軟ではないが、ある程度の柔らかさをもつと考えることができる。磨耗という使用痕の性格と考え合わせると、「土壌」が条件を備えているが、限定することはできない。

刃部の磨耗痕については以上のように推測することができるが、3類や5類のように中央部や全面、側縁に垂直方向に形成された磨耗痕の性格は不明である。磨耗痕は運動量の大きい使用痕と考えられ、一定の方向性をもち、表面が削りとられたような状況を示すことから、着柄部のように固定された部分の使用痕とは考えにくい。量的に少なく、突発的に本来とは別の作業に使用された結果とも考えられるが、今後の課題である。



第444図 打製石斧の磨耗痕の分類

打製石斧の機能については大山柏の指摘以来、「土壌」に関連した道具であると指摘されてきた。本遺跡の打製石斧の磨耗痕の観察結果も、この指摘を否定しない。むしろ、補強したともいえる。しかし、少数とはいえ例外的な磨耗痕も観察され、着柄の方法なども明らかでない。打製石斧の機能を明らかにするためには、さらにデータの蓄積が必要であろう。

5 小 結

石器組成は遺跡の性格に応じて変化すると考えられる。本例は遺跡の性格が特定できる希な例であり、堅果類などの加工に関連する石器組成が予想された。しかし、使用面のある大形礫を除けば、石器組成は通常の集落遺跡と大きく異なることはない。また、打製石斧と石鏃、磨石類の分布に偏りが認められたが、水さらし場状遺構や貯蔵穴との関連性は指摘できない。

これには二つの解釈が可能である。一つは、栗林遺跡がなにも特異な例でなく、通常の集落は水さらし場状遺構や貯蔵穴を普遍的にもっていると考えられることである。実際、乾燥型の貯蔵穴は多くの集落遺跡で検出されているし、水さらし場状遺構と似た遺構の発見例も増えている。

他方は、堅果類の貯蔵や加工には特別な石器が必要なかったとする解釈である。しかし、磨石や石皿は粉化の機能が類推されており、今のところ否定する材料はない。とすれば、少なくとも堅果類の加工に磨石や石皿が利用されていたと考えるべきで、石器組成と無関係であるとすることはできまい。このように考えると、石器群からみた栗林遺跡は特殊な遺跡とはいええない。これまで検出されてきた他の集落遺跡にも、堅果類の貯蔵施設や加工施設が普遍的にもなっていると考えられるべきであろうか。

石器には製品で持ちこまれる石器と遺跡内で製作する石器、原材入手に遠方と近隣という二重の対構造を考慮することができた。さらに、石器の製作という視点からみれば、「交換のための石器製作」と「消費のための石器製作」が存在した可能性が指摘されよう。こうした事象は縄文時代の物の生産や分配、すなわち、広い意味での経済活動を反映したものと思われる。経済人類学の指摘によれば、交換は(1)互酬性、(2)再分配、(3)市場交換の三者に類型化され、それぞれ固有の社会構造を背景としているとされる。今のとこ

ろ、縄文時代では互酬性が最も妥当なあり方と考える。M・D・サーリンズのよれば、互酬性は一般互酬性、均衡互酬性、否定的互酬性に細分される。栗林遺跡で想定した石器製作の二重の構造はこうした互酬性のあり方の重層性を反映していると考えられる。具体的な指摘はできないが、親族関係の遠近や階層性が互酬性に関与していると思われ、縄文時代の社会構造の一端が現れているのではなかろうか。

以上、簡単に栗林遺跡の石器群を概観した。栗林遺跡の石器群はまだ多くの情報を内包しているが、十分な検討ができなかったことを自省している。ただ、石器の廃棄や製作方法のあり方を縄文社会と結びつけるよう努力した。決して、試みは成功してはいないが、今後もこうした視点で資料を蓄積する必要性を痛感している。

参考文献

- 家田順一郎ほか 1988 「十二木遺跡」塩沢町文化財調査報告8 塩沢町教育委員会
 齋藤 基成 1978 「第7章 第六節 中期の石器」『貫井』小金井市教育委員会
 酒井 龍一 1991 「弥生時代の石器生産」『季刊考古学』35 雄山閣出版
 鈴木 次郎 1983 「第6章第3節 石器」『早川天神遺跡』神奈川県立歴史文化財センター
 鈴木 次郎 1985 「石斧の大量生産」『季刊考古学』12 雄山閣出版
 鈴木 俊成 1992 「縄文時代の石鏃」『新潟考古学』13 新潟県考古学会
 山本 正敏 1991 「蛇紋岩製石斧の製作と流通」『季刊考古学』35 雄山閣出版
 M・D・サーリンズ 青木 保 訳 1982 『部族民』

第24表-1 遺構出土石器一覧(1)

	打 斧 (欠)	打 斧 未 製 品	小 形 打 斧	打 斧 素 材	打 斧 フ レ ー ク	石 鏃 (欠)	石 鏃 未 製 品	ス ク レ イ バ ー (円形)	石 錘	P S ・	R F ・	フ レ ー ク	石 核	磨 斧 (欠)	不 定 形	磨 石 類	石 皿 ・ 磨	石 錘	石 製 品	計
第3号貯蔵穴	(2)				1											2	1			6
第4号貯蔵穴					1															1
第5号貯蔵穴	(1)				1											1	1			4
第6号貯蔵穴																1	2			3
第8号貯蔵穴					1						2									3
第9号貯蔵穴																1	4		2	7
第10号貯蔵穴	1(4)	1										1				1				8
第11号貯蔵穴					2											2				4
第12号貯蔵穴		1														1	3		1	6
第13号貯蔵穴	(1)																			1
第14号貯蔵穴	(1)															3	4			8
第15号貯蔵穴																2				2
第16号貯蔵穴																	1			1
第17号貯蔵穴					1												1			2
第18号貯蔵穴																	1			1
第19号貯蔵穴																	1			1
第20号貯蔵穴	(3)					1					1	3								8
第21号貯蔵穴												1	1			4	4			10
第23号貯蔵穴												1				4	3			8
第24号貯蔵穴					2		(1)					2				2	3			10
第25号貯蔵穴																1	2			3
第26号貯蔵穴					1							3								4
第27号貯蔵穴	(3)															1	1			5
第29号貯蔵穴	(1)																1			2
第30号貯蔵穴																1	2			3
第31号貯蔵穴	1																			1
第32号貯蔵穴					1							1				1				3
第35号貯蔵穴																3	2			5
第36号貯蔵穴																	2			2
第37号貯蔵穴	1(2)				1		(1)					4				8	2		1	20
第38号貯蔵穴												1				1	1			3
第39号貯蔵穴	(1)															5	1			7
第40号貯蔵穴	1											1				1	3			6
第41号貯蔵穴					4	(1)	1					2								8
第44号貯蔵穴																1	1			2
第45号貯蔵穴	1																1			2
第46号貯蔵穴																3	3			6
第47号貯蔵穴		1			1											2	3			7
第48号貯蔵穴					1							1								2
第49号貯蔵穴																3	1			4
第50号貯蔵穴																4	4			8
第51号貯蔵穴																2	4		1	7
第52号貯蔵穴	(3)				1							3					1			8
第53号貯蔵穴	(2)	1		1	1							1				2	1		1	10
第54号貯蔵穴	(1)	1			1					1	1					3	1			9
第55号貯蔵穴																1	1			2
第56号貯蔵穴	(1)				1							9				2	4			17
第57号貯蔵穴	1				2			1(1)												5
第58号貯蔵穴	(1)				2							2				3				10

第4節 縄文時代の石器

第24表-2 遺構出土石器一覧(2)

	打 斧 (欠)	打 斧 未 製 品	小 形 打 斧	打 斧 素 材	打 斧 フ レ ー ク	石 鏃 (欠)	石 鏃 未 製 品	ス ク レ イ バ ー (円形)	石 錘	P S ・	R F ・	フ レ ー ク	石 核	磨 斧 (欠)	不 定 形	磨 石 類	石 皿 ・ 礫	石 錘	石 製 品	計
第59号貯蔵穴																1				1
第60号貯蔵穴	1				3							5				1	2			12
第61号貯蔵穴											1	3				1	2			7
第62号貯蔵穴	1(2)			1	3							11	1	(4)						23
第63号貯蔵穴	(3)				1							8			2	3				17
第64号貯蔵穴																2		1		3
第65号貯蔵穴	1(1)																			2
第67号貯蔵穴	1																			1
第68号貯蔵穴																	3			3
第70号貯蔵穴											1						6			6
第71号貯蔵穴	1				1													2		4
第72号貯蔵穴	(2)				3						1	5			4	2		1		18
第73号貯蔵穴	1		1														1			3
第74号貯蔵穴																	2			2
第76号貯蔵穴	1											1								2
第77号貯蔵穴	(1)																			1
第78号貯蔵穴												1	2	1						4
貯蔵穴集計	1206	5	1	2	37	1(1)	1	1(3)	0	1	5	72	4	1(4)	0	79	94	4	8	372
第1号土坑	(3)				11	1(2)	7	(1)			1	26				5	4			61
第2号土坑																2	1			3
第3号土坑	1(2)				4	1						3				8	3			22
第10号土坑					1	(1)						1								3
第12号土坑	(1)																			1
第14号土坑																	1			1
第18号土坑	(3)				1							3								7
第19号土坑												1								1
第21号土坑	1(2)				1	(1)				2		8				3				18
第1号住居址	2(1)				2							2				2				9
第2号住居址	(1)					1														2
第3号住居址	(1)				2		1		1	1	2	17		1	2					28
第5号住居址				1								1								2
第1号配石	2(6)		1		5	2	1				4	7		1(1)		7		1		38
第2号配石	(1)																			1
第4号配石	3(5)	1			1							2			1	2				15
第5号配石												1								1
第7号配石	(1)			1																2
第8号配石	1(1)																			2
第10号配石												1				1		1		3
第11号配石																2	1			3
第12号配石																4	1			5
第13号配石	(1)																			1
第14号配石																	1			1
第16号配石																1	1			2
第17号配石	1																			1
第18号配石																	1			1
第19号配石					1											8				9
第24号配石																2	1			3
第26号配石	2(2)	1														1				6
配石集計	907	2	1	1	7	2	1	0	0	0	4	10	1	1(1)	1	28	6	0	2	94

第5節 縄文時代の土製品

土偶および動物型把手や動物形土製品は、その具象性からも縄文時代人の精神活動の一端をよく示すものである。

1 土 偶

栗林遺跡では今回の調査で14点の土偶が出土した(第213図)。その部位ごとに特徴をまとめてみたい。

頭部(1~4)は4点出土し、眉から鼻にかけてY字形の隆帯で表現する点はすべて共通する。これは加曾利B様式の山形土偶に共通する特徴のひとつである[小野1983]。県内には明科町北村(1・7)・松本市坪ノ内(2)・大町市一律(3)・東部町桜井戸(4)各遺跡等に類例がある。腕部は1点(5)出土し、全形はかなり大形であったと考えられる。全高20cm以上の大形土偶は中期以降に現れ、腕や足を写実的に表現するのは後期からといわれる[小野1983]。胴部は3点(6~8)出土し、形状が逆三角形である点が共通する。8は腕部をわずかに残して、万才をしているように斜め上方にのびている。他の2点は欠損しているが、同様であったと考えられる。同形態の類例が、戸倉町円光坊(8)・松本市坪ノ内遺跡(9)などにある。脚部は6点(9~14)出土し、9は8の胴部と同一個体と思われる。10・13は文様が加曾利B様式の特徴をもつ。10はパンツ状の衣服をまとっているようにみえる。このような例は、望月町浦谷B(10)・松本市エリ穴遺跡(11)に見られる。11・12は9cm以上あり、全高は25cm以上の大形品と思われる。大形品の例は、戸倉町円光坊(12)・辰野町新町遺跡(13)に見られる。14は破損が著しく詳細はわからない。

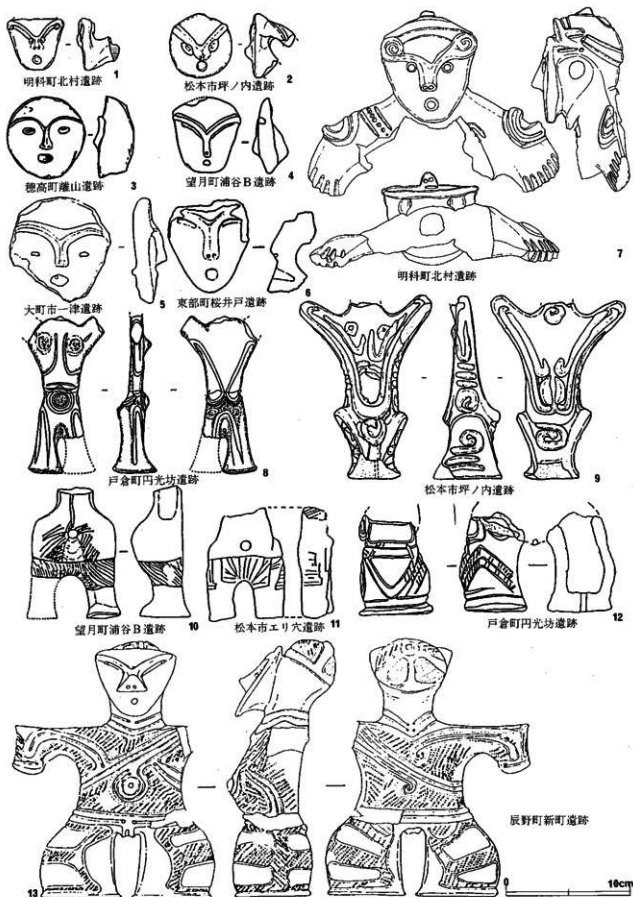
以上、類例としてあげたものはすべて縄文時代後期であり、これら類例や伴出遺物などから本例もすべて同期の土偶と考えられる。大形品が比較的多いが、大形土偶の破損率が低いのはマツリにおいて特別に扱われたからではないかという意見がある[種木1990]。しかし、本例はすべて破損しており、大形品と小形品で破損状況に違いを見出すことはできない。また、この破損が意図的に行われたものかどうかも確証がない。栗林遺跡では大半が遺構外で出土したが、水さらし場状遺構や貯蔵穴からの例もある。とくに安置したり埋納したという形跡はなく、包含層中から他の石器・土器とともにみつまっている。特別な意図をもって廃棄されたとは考えられず、出土状態から祭祀行為を復元することはできない。しかし、後述するように、他の土製品の出土位置や水さらし場などの遺構とのかかわりで理解する必要があるかもしれない。

2 動物形把手と動物形土製品

動物形把手は獸面把手ともよばれ、土器の口縁部や頸部の把手の先端に動物形の装飾をつけたものである。小野美代子によれば、最初に注意したのは東京都四枚畑貝塚の諸磯も式土器の類例という。この時期の獸面把手は深鉢形土器の四つの口縁波状部の先端につく場合がほとんどで、諸磯式の分布圏である関東地方西南部や長野県から山梨県にかけての中部高地に分布する。表現された動物はほとんどがイノシシと考えられている。獸面把手は関東地方では前期末で消滅するが、中部高地では中期にいたりイノシシ・ヘビ・カエルなどを模した動物形把手も盛行する。

勝坂式土器の分布圏ではヘビを模したものが多出している。ヘビは速く、青森県の岩木山北麓にある石神遺跡の中期末の土器片にもある。また、イモリのような装飾をつけた土器が富山県宇奈月町愛本新(あいまとしん)遺跡・朝日町下山新(にぎやましん)遺跡にある。このように、ヘビやイモリといった爬虫類や両生類を模した把手は東日本の中期に広く分布する。

後期の獸面把手になると、抽象的な表現が多くなり、写実的なものは少なくなる。後者の例に、熊本県



第445図 長野県内出土土偶の類別

多良木町出土の御旗式土器の把手と思われる例がある。犬の頭部のような形で波状口縁の突起部頂点につけられていたと考えられている。西日本、とくに九州地方では動物を模した土製品はほとんどなく、希少例である。晩期の獣面把手は少ない。埼玉県川口市石神遺跡で安行Ⅲ式の深鉢形土器の把手が出土している。カメかヘビの首を模したらしい【小野1983】。

以上、動物形把手は前期の諸磯Ⅱ式期に出現し、中期にヘビを模したものが勝坂式土器分布圏を中心に広く波及し、後・晩期には衰退する。

把手のほかに動物形土製品がある。宮城県座散乱木遺跡出土のヘラジカカウマを模した土製品が知られ、初源は後期旧石器時代にさかのぼるが、縄文時代に直接結びつかない【末田1990】。動物形土製品は縄文時代後・晩期に東北地方を中心に盛行するが、イノシシが多く、次いでカメ、ほかにクマ・サルなどがある。小野美代子によれば晩期には動物の種類や数が豊富になる。北海道日ノ浜貝塚の例は5～6条の沈線文が施され、イノシシの姿が写実的に表現されている。また奈良県橿原公苑の例もイノシシである。獣面把手同様、イノシシ模倣例が多いが、ムササビ・ハト・ゲンゴロウ・セミ・カマキリなどとされるものもある。

動物形土製品は後期に東北地方に出現し、晩期に近畿以東の広域に広がるといわれる。動物形把手と動物形土製品の盛行時期は交替するかのようであり、本来、把手であったものが土製品に発展したとも考えらう。その背景には縄文時代後期以降の動物相の変化とそれに対する縄文時代人の精神活動の変容を読み取ることができるかもしれない。

3 鳥形土製品

鳥を模した土製品や把手には次のような例がある(第213図)。

中期の例として、石川県真脇遺跡の中期初頭の層からイルカの骨とともに出土した好例がある。これは全高9.0cm、内径9.4cm、容量は250ccあり、手のひらにのるほどの大きさである。器面と鳥の顔は半截竹管により大胆に線刻され、目の中央は赤彩される。また、稲城市多摩ニュータウンNo.9遺跡では何についていたかが不明であるが、中期の例がある。



石川県鳳至郡能登町
真脇遺跡(縄文時代中期)



多摩ニュータウンNo.9遺跡
(縄文時代中期)



千葉県成田市近傍
(縄文時代後期末)



出土分布状況
第446図 鳥形把手の類例と栗林遺跡における出土分布状況

後期では、千葉県成田市近傍で、後期末の鳥の首の把手が出土している。これも何についていたか不明である。晩期では青森県十面沢(とつらざわ)と山形県東根市蟹沢遺跡にハトを模したと思われる類品がある。後者は中空で、両翼を広げ、背中には丸い口が開けられている。両翼と尾の先に刻みがあり、鳥類の特徴を良く表現しているといわれる【小野1983】。以上5例をあげたが、鳥は他の動物にくらべると少ない。この鳥形土製品は中期に北陸や関東地

方に出現し、晩期には東北にも認められるという状況である。

栗林遺跡出土の把手(15・16)は後期初頭の第1号住居址付近と第1号土坑から出土おり、類例からも後期初頭(堀之内様式)と考えられよう。16は全体に赤彩されていた痕跡がある。赤彩は特殊な土器であったことを示すといえよう。なお、今回の調査では鳥骨は確認されていない。しかし鳥を模した把手2点は、人々の鳥に対する特別な感情を示す結果と思われる。

鳥形把手の出土した付近では土偶や石棒が多数出土している。この廃棄状況から土偶・石棒・鳥形把手の付いた土器を、同様な祭祀行為に結びつくものとして考えることはできないであろうか。石棒祭祀は生命増殖、さらに男の仕事のイメージとして狩猟祭祀にもかかわるとの見方がある〔山本1983〕。一方、動物を模している点から鳥形把手の付いた土器や土製品は、狩猟との関係が考えられるかもしれない。

香川県永井遺跡では縄文時代後期中頃(彦崎K1様式)の自然河川跡から、ドングリ・トチ・クリを主体とする多量の堅果類とともに、鳥形の木製品や土偶などが出土している。これらは植物性食糧の貯蔵および加工、あるいは食糧の残滓廃棄などの生業活動に伴う祭祀品の可能性が高いという〔波部1986〕。本遺跡でも多数の堅果類の貯蔵穴や水さらし場状遺構が確認されており、土偶・石棒・鳥形把手の付いた土器はそれらの近くから出土している。永井遺跡と同様にも見られよう。

狩猟も採集も食糧獲得のための行為である。本遺跡では堅果類の貯蔵加工場所あきらかにっており、この場所で本項でふれたような遺物が、石棒などとともに存在することは、これらを用いた儀礼が食糧加工の一段階において実施されたとの想定もでき、だとすればこの場所では植物性食糧加工だけではなく、動物の解体なども行われていた可能性もあろう。今後利器としての石器などの分析も加えて、総合的な究明の必要があろう。

参考文献

- 植木 弘 1990 「土偶の大きさ」『季刊考古学—特集縄文土偶の世界』第30号 雄山閣出版
- 江坂 輝嗣 1990 『日本の土偶』六興出版
- 小野美代子 1983 『土偶の知識』考古学シリーズ18 東京美術
- 北国新聞社 1986 「まつりまじない」『縄文からのメッセージ 魅惑の真跡びと』社会思想社
- 東京都縄文センター 1993 「たまのよこやま」東京都縄文センター報
- 能登 健 1983 「土偶」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣出版
- 宮下 健司 1993 「長野県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』37
- 米田耕之助 1984 『土偶』考古学ライブラリー21 ニュー・サイエンス社
- 1990 『動物形土偶』『季刊考古学』第30号 雄山閣出版
- 山本 峰久 1983 「石棒」『縄文文化の研究9』雄山閣出版
- 波部 明夫 1986 「縄文時代後期の生業跡—香川県永井遺跡」『季刊考古学』第17号 雄山閣出版

第6節 弥生時代中期後半の土器群

はじめに

いうまでもなく、栗林遺跡は中部高地弥生時代中期後半の代表的な土器型式である栗林式の標式遺跡である。栗林式は近年資料数が増加し、その内容が明確になりつつある。同時に、従来の栗林式の細分や定義に、周辺土器型式との対応関係が課題として取り上げられている。

今回の調査では栗林式期の集落が検出され、従来資料の少なかった標式遺跡での栗林式本来の資料を得ることができた。ここでは簡単に、その細分の可能性について考えたい。

1 細頸壺の分類

栗林式土器の壺は比較的形状の変化に富み、従来から編年の尺度として利用できる可能性が指摘されてきた〔朝原1963〕。本遺跡では、細頸壺を口縁部の形状でA・Bに大きく分類したが、胴部最大径の位置や口縁部の外反の度合、文様の施文される部分を目安に、さらに細分した。これらの多様性はおそらく時間差を反映していると思われるが、変化は漸移的で一線を明瞭に画することはできず、層位や遺構の切り合いで検証することもできなかった。したがって、本稿は壺の文様が徐々に簡素化すると同時に、最大径の位置が徐々に下位に移るという従来の変遷観を踏襲しただけであり、作業仮説であることをお断りしておく。以下、壺Aを細分して、その変遷を検討する。

- A1(1・2) : 口縁部と胴下半部が欠くが、やや頸部が太く、最大径が胴部中位にあり、やや細身の器形になると推測される。文様は横方向に区画され、平行沈線文帯と縄文を地文として、大きめの山形文が施文される。
- A2(3・6・7) : 最大径が胴部中位にあり、文様が胴部上半から下半にまで施文される。文様は横方向に区画され、胴部上半では横走櫛描直線文や縄文帯、胴下半部は同様の手法で弧線文のモチーフが施文される。
- A3(7-10) : 最大径が胴部下半にあり、胴部上半から下半まで文様が施文される。文様は横方向に区画され、胴部上半には横走櫛描直線文、平行する何条かの沈線、胴部下半には弧線文が施文されるが、縄文はない。
- A4(4・5) : 最大径は胴部下半にあり、文様は頸部と最大径部分に集約する。
- A5(77-79など) : 最大径は胴部下半にあり、口縁部の外反度が増す。文様は頸部に集約する。
- A6(80など) : A5と同様の器形をとるが、無文のもの。

各類の出土状況を概観すると、A1~A4はA区、A5・A6はB・D区の主体をなす土器群であり、2グループに大別できよう。層的に確認できなかったが、両者はやや離れた地点から出土しており、時間差と考えることができよう。

さらにA1~A4について検討してみよう。これらは、A区の住居址覆土中より大半が出土したため、即一括性とはできないが、各類の共伴関係を目安とすることは可能であろう。第1号住居址ではA1とA2が、第2号ではA2~A4が、第6号ではA3とA4が出土している。少ない事例のため問題は残るが、第1・6号住居址覆土での共伴関係から、A1・A2とA3・A4を時間差として分離することができようか。

このように各類の共伴関係から、最大径が徐々にさがり、文様施文の部分も次第に頸部に集約されていく変化の傾向を読みとることができ、時間差を反映している結果であろう。ただし、第2号住居址例が示すように、A1~A6の各類の変化は方向性をもっているものの、明確に一線を画するような変化ではない。

おそらく、段階設定は類の消失をもって行うか、別の器種の分析・細分によることになろうが、本稿では第I群(A1)、第II群(A2~A4)、第III群(A5・A6)と大きく3群に分けておきたい。

2 甕の分類

甕の器形や文様は多様であり、またその変化も漸移的で、明確でないが、敢えて次のように分類する(第248~250図)。

- A (129・133) : 口縁部が外反し、頸部がほとんどくびれずに底部にいたる。横走柵描直線文などが施文される。
- B (147・154等) : 口縁部が外反し、頸部がややくびれ胴部上半に最大径をもち、直線的に底部にいたる。横走羽状柵描文・縦走羽状柵描文が施文される。また、これらに、頸部の簾状文や柵描直線文が組み合わされたものもある。
- C (167・168等) : 口縁部がくの字状に外反し、最大径が胴部上半に位置し、やや丸みを帯びる。頸部に簾状文、胴部には柵描波状文が施文される。

各類の壺との共伴関係を概観すると、Aは類例のない器形と文様であるが、第1号住居址で壺I・II群と共伴し、BはII群と、CはIII群と共伴する場合が多い。おおむね、A(壺I群)→B(壺II群)→C(壺III群)と変化すると考えることができよう。器形は口縁部が外反し頸部がくびれないものから、口縁部がくの字に外反し胴部が丸みをおびる器形に変化すると思われる。

一方、胴部の文様には横走柵描直線文や波状文、また横走か縦走羽状柵描文があり、縦走羽状柵描文と柵描波状文には、文様を縦方向に画するように垂下する縦走柵描直線文が組み合わさることがある。頸部の文様には横走柵描直線文と簾状文があり、前者には横走羽状柵描文、後者には縦走柵描波状文や柵描波状文が組み合わされることが多い。Aには横走柵描直線文、Cには頸部の簾状文と胴部の柵描波状文が施文される傾向はあるが、そのほかの文様と器形との対応関係は明確ではない。

3 小 結

壺と甕の細分類を試みたが、決して満足のいくものではない。壺を規準としたI群からIII群の大別は甕ともほぼ対応関係をもち、時間差を反映していると考えることができよう。特にI・II群とIII群は明確な時間差として認識したい。I群は器形全体を知ることができないが、胴部がやや細身で頸部がやや太く、胴部から頸部にいたる曲線や文様がII群と異なり、古い形態をとどめていると考える。

II群は多様であり、壺・甕ともに細分の可能性がある。壺は文様の施文部分から、A1~A4に分類した。甕の様相は複雑であるが、頸部文様の横走柵描直線文や簾状文は後出する土器群に引き継がれる要素であることから、II群の中でも新しい要素としてよいのではなかろうか。同様なことは胴部の柵描波状文にも指摘できる。頸部文様は横走羽状文や縦走羽状文とも組み合わせられ、胴部の柵描波状文より古い段階で成立したものであろう。

ところで、栗林式土器は栗林遺跡出土の土器群を標式とするが、今回の調査成果から、標式となった土器群は二種類あることが明らかになった。ひとつは坪井清足が設定に用いた第1次調査のD地点竪穴住居一括資料であり[坪井1948]、他方は桐原健の第2次調査の資料である[桐原1963]。前者は今回の第III群、後者は第II群に相当する内容と考えてよいであろう。両者は系譜的に連続するが、時間差をもつと考えられる土器群である。栗林式の再構成が必要となろう。

栗林式を再定義する力量は筆者にはないが、I群とした壺や荒山地籍出土の土器、中野市教育委員会が実施した第10次栗林遺跡調査の資料は、栗林式と関東地方の須和式との関連をうかがわせる。又、III群

に分類した無文の壺A6は、箱清水式の壺とは直接的に結びつかないであろう。

参考文献

- 神田 五六 1936 「北信楽林出土の土器」
棚原 健 1963 「栗林式土器の再検討」 考古学雑誌
坪井清足他 1948 「高丘村弥生式遺跡調査」〔下高井〕
笹沢 浩 1977 「弥生土器 — 中部・中部高地1～3」『考古学ジャーナル』131・132・133
藤森 栄一 1936 「信濃の弥生式土器と弥生式石器」『考古学』7-7
藤森 栄一 1955 「各地域の弥生式土器 中部高地・北陸」『日本考古学講座』4

第7節 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相

はじめに

七瀬遺跡では、在来の箱清水系土器に伴って、北陸・東海地方を中心とする外来系土器が多量に出土した。近年、古墳時代の幕開けを様々な側面から再検討しようという機運が全国的な高まりをみせており、土器様相の面では、とくに北陸・東海系土器を中心とした“土器の移動”に注目が集まっている(註1)。

以下、在地系・外来系土器の様相を略述し、相互に検証することによって土器編年を行い、その歴史的背景について考えたい。

1 土器編年

(1) 問題点の整理

箱清水系土器研究の現在の基礎的認識は、笹沢 浩[笹沢1970a・10970b・1977・1978・1986]・青木和明[青木1984]・千野 浩[千野1989]らによるところが大きい。その成果によって、箱清水文化圏や千曲川中流域といった広い地域での変遷観や地域差がより鮮明にされ、後の研究に指針を与えた点は特筆できる。しかし、その後は様式圏の細分や器種レベルでの時間的推移に関して、具体的な検討が本格的になされてきたとはいえない。これまでの研究は、資料上の制約もあって、決して土器の小地域相(例えば中野市周辺というような)をあきらかにするような内容ではなかった。

ところで、近年、県外では小地域編年を確立し、それを積み上げることによって大地域の様相をあきらかにしようとする研究がなされ、信濃でも、青木一男・宇賀神誠司らによって、同様な試みが始められている[青木1984・1989、宇賀神1988、青木・宇賀神1992]。地域区分は、さらに小さな範囲、究極的には一遺跡単位にまで細分して、そこでの変遷を明らかにし編年を組み立てていくことこそ箱清水系土器研究の急務と考える。

さて、箱清水様式圏における弥生土器から土師器への変化は、在来系土器の減少として捉えることができる。当該期においては、外来系土器の出土状況に、遺跡あるいは遺構単位で偏りがあることは、以前から指摘されている。しかしながら、現状では、在来の箱清水系土器の減少と“土器の移動”に伴う外来系土器(註2)の出土が、どのような関係を持つのか、具体的な姿があきらかになっているとはいえない。

箱清水系土器の変遷と外来系土器との関係を、小地域単位で検証する作業は未だ緒についたばかりである。小地域編年を確立し、それを他地域の様相と比較しながら相互の編年観を組み立てるにあたって、七瀬遺跡は今後も重要な遺跡となろう。

(2) 段階設定

A 分析の視点

本遺跡出土土器の段階設定では、“変形土器”を重視して型式学的な検討を行った。理由は以下の2点による。

- ・甕は煮沸具としての機能により、破損率が高く製作が繰り返され行なわれるため、他の器種に比べて形式的変化が早いといわれる。
- ・通常の遺跡内での出土量が多く、七瀬遺跡においても出土遺物中に占めるその割合は極めて高い。

B 分析の方法—住居址出土の甕口縁部数の計測

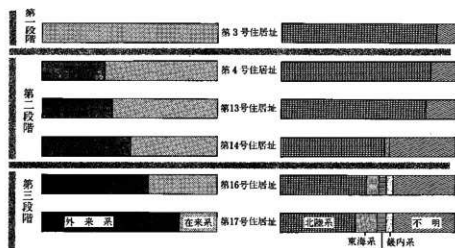
本遺跡の外来系土器は、おおむねどの遺構からも出土している。しかし、出土量は各遺構で均等ではな

いことが予想された。箱清水系土器の減少に“土器の移動”が何らかの役割をはたしたとすれば、外来系土器の量と時間の推移に関連が見出せるかもしれない。

そこで、第3・4・13・14・16・17号各住居址から出土したすべての甕の口縁部数を、以下のように計測した。

- ① 各住居址に占める在来系土器と外来系土器の割合。
- ② 外来系土器については、判別できる範囲での系統別の割合。

計測を上記の住居址に限ったのは、遺物量が比較的多く、他遺構との重複関係が少ないため、一括性の



第447図 甕口縁部の在来・外来系比(左)と外来系土器の系統別比(右)

次に、計測②の結果を第447図の右に示した。第4・13号住居址の外来系は、すべて北陸系によって占められるのに対し、第14・16・17号住居址では、北陸系とともに東海系が出土し、徐々にその量が増加する。

C 段階区分

これまで指摘されてきたように、在来系土器の割合が減少することが時間的な推移を示すものだとすれば、以上の計測結果から、外来系土器のありかたによって二つの面期を見いだすことができる。そこで、七瀬遺跡出土土器について、以下の3段階を編年軸として設定する。

- 第1段階 出土土器がすべて箱清水系土器によって占められる段階。
- 第2段階 北陸系が伴出する段階。
- 第3段階 北陸系以外に東海系の流入が本格化する以降の段階。

このうち、第2段階の後半期には、わずかではあるが東海系が認められ、(古)・(新)に二分できる。

(3) 在地系土器の変遷(註3)

在地系土器の器種は、甕・壺・高坏・鉢・有孔鉢・内彎口縁鉢・広口短頸壺・蓋形土器で構成される(註4)。

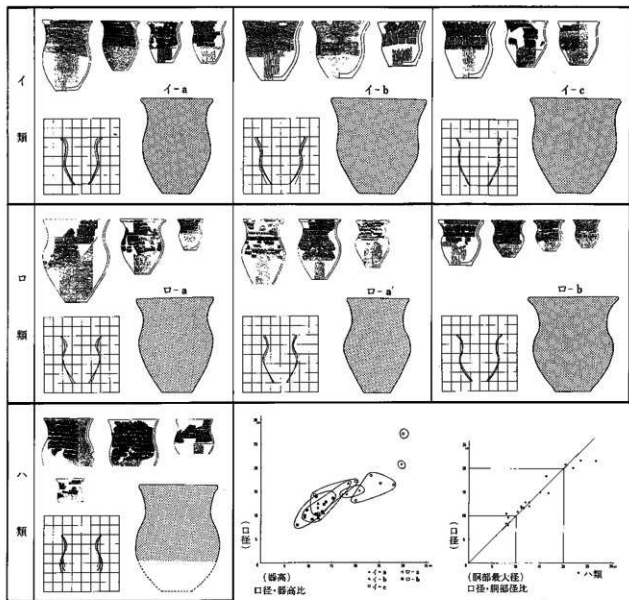
各段階を通じて、それぞれの器種は量的に減少する。この量的減少は、いわゆる古式土師器に連続する外来系土器への転換を意味すると考えられる。しかし、変化の様相や量的な推移は一律ではなく、この転換過程も器種によって異なる。

そこで、はじめに在地系土器、次に第2・第3段階に認められる外来系土器を概観する。

A 各器種の変遷

① 甕形土器(第384図～第387図)

先学の研究によると、甕は口縁部の外反度や胴部のはりが時期により変化する(註5)。すなわち、時期が



第448図 在地承襲のモデルの抽出と法量

下るにつれ、胴部が球胴化し、口縁部の外反が強くなる。そこで、胴下半までの形態がわかる土器を、イ～ハ類に分類し、さらに口径・底径などで細分した。

イ類：頸部のくびれが小さく、胴のはりも小さい類(233～248)。

- a：口径：底径比が小さく、頸部がややくびれる。
- b：口径：底径比は大きい、頸部がややくびれる。
- c：口径：底径比が大きく、頸部のくびれが小さい。

ロ類：頸部のくびれがやや大きく、胴部がはる類(250～255)。

- a：口径が胴部最大径より大きく、胴部から底部へは直線的にいたる。
- a'：口径より胴部最大径が大きく、胴部から底部へは直線的にいたる。
- b：胴部から底部へは曲線的にいたる(256～267)。

ハ類：胴部がはり、球形を呈する類(273～285)。

球胴化し口縁部の外反が強まるということが時期的に新しい様相であるとすれば、イ類からハ類への変化を確

認できるはずである。

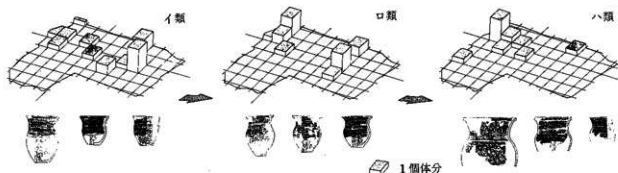
第448図のグラフでは、各類の口径と器高を示した。口径については、底部まで残存する土器がないため、器高に変えて胴部最大径を示した。

グラフから、類毎にある程度の傾向がうかがえる。例えば、イー・a・ロー・aに大形品が多く、イー・b・c、ロー・bに小形品が多い。

これによって、大形品ではイー・a→ロー・a→ロー・a'、小形品ではイー・b・c→ロー・bという変化を想定できる。

ハ類では口径と胴部最大径を示した。やや小形品が多いが、大小多様である。本類には分量との相関は認め難い。

第449図は各類の出土数をグリッド単位で示した。その際、住居址出土土器は所在グリッドに合算してい



第449図 各類型の出土量分布

る。イ類が東側に多く、ロ類は東と西双方の一定範囲に集まり、ハ類は西側に偏る傾向がうかがえる。

これらの分析から、各類別は時間差を示す可能性が強い。そこで、住居址出土土器を前の段階区分と照合する。

イー・a～cは、第1段階の指標とした第3号住居址から、ロー・bは第2段階の指標とした第4号住居址からまとめて出土している。ロー・aは住居址からは出土していない。ハ類は住居址からはまとめて出土せず、しかも完形品がない。しかし、第3段階にあたる17号住居址の資料(第363図)のうち、胴部形態が推定できるものはハ類にあたる。以上からイ～ロの類型を各段階の形態差と理解できる。

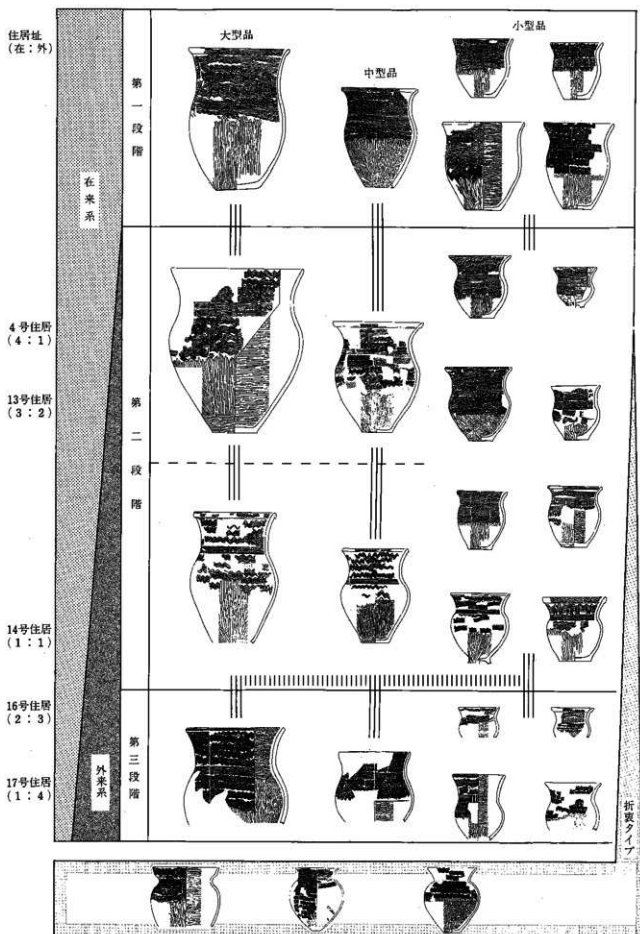
ここで、各段階における在地系土器の形態変化を再度まとめる(第450図)。

第1段階：第3号住居址のセットを指標とする段階。イー・a(口径：底径比が小さく、頸部がややくびれる。)、イー・b(口径：底径比は大きい、頸部がややくびれる。)、イー・c(口径：底径比が大きく、頸部のくびれが小さい。)からなる。さらに、イー・aは大形品、イー・bは小形品、イー・cは中形から小形品になる傾向が認められる。

第2段階：ロー・a・bからなる。aはイー・a類からの変化の延長上にある。口径が胴部最大径より大きく、胴部最大径の位置はイー・aより上方へ上がる。a'は、aが変化したもので胴部最大径が口径を上回る。大形品が多い。bは第4号住居址のセットを指標とする。胴下半部が湾曲して底部にいたり、球胴化が進む。小形品が多く、イー・b・cからの系統にある。

第3段階：ハ類の段階である。球胴化は一層進み、胴部最大径は口径よりも確実に大きくなる。形態はロー・bに系統がたどれる。ロー・bが小形品によって占められるのに対し、本類には大形品も認められる点が前段階とは異なる。おそらく、ロー・a'はロー・bに淘汰されるかたちで、本段階にはハ類に規格が揃えられるのであろう。

次に、在地系甕の口縁端部形態は、以下のように分類できる。



第450図 変形土器の変遷

1類 折り返し口縁、2類 端部を面とる、3類 単純口縁、4類 受口状を呈する。

普光寺平北部以北には1類が多いといわれてきた。本遺跡における1～3類の組成は、1類-38%、2類-20%、3類-42%となり、やはり1類が多い。4類には3類との区別が難しいものがあり、ここでは3類とした。3類中2割程度を4類が占めるとと思われる。1類が多いこの傾向は普光寺平中・南部で3類が多い様相と大きく異なり、在地系土器の地域相と考えられる。折り返し口縁の占める割合が高いのは、北関東の樽式に通ずる共通点である。

また、箱清水系変形土器の外表面は通常櫛描波状文で、頸部には櫛描縲状文が施文されることがある。これらの文様は時間の経過とともに、乱雑になるといわれるため、本遺跡の資料で施文単位や施文順序あるいは縲状文の有無などについて検討を加えた。しかし、一定の傾向を認めることはできなかった。

土器の形態が変化したにもかかわらず、その文様が全く変化を起ささないというのは逆に不自然である。なぜなら、「文様」は土器の側面であるばかりかそれ自体に意味を持ち、極言するなら、文化そのものを反映するものである可能性も秘めるからである。今回は、十分な成果をあげることができなかったが、今後さらに検討を要する問題であろう。

ところで、甕口縁部数で見ると(第447図右)、外来系は第2段階から出現し、第3段階には在来系・外来系比が逆転して在来系を上回る。その過程で、在地系との折衷タイプが現れる(第450図)。在地系の球胴化は、外来系が在地系の「設計図」に影響を及ぼした結果である。それに対し、折衷タイプは、単なる影響というより混同あるいは受容の結果というべきである。図示した土器の形態は、在地の系譜にはなく、外来系に酷似する。このような土器の存在は、搬入土器が客体的存在ではなく、在地系土器の姿容に深くかかわっていたことを示す。

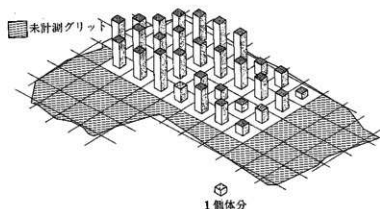
最後に、外来系変形土器の出土量をグリッド単位で示す(第451図)。外来系は西半に多く、在地系へ類の分布と類似する(第449図)。第1段階の第3号住居址と第2段階(古)の第4号住居址が調査区東半の低地部に位置し、第2段階(新)以降の住居址が、西半の斜面部に立地する傾向と符合する。新しい段階の生活域が斜面部に偏る傾向を指摘できる。

②壺形土器

全形がわかる資料が少なく、段階区分の基準とした住居址出土資料は皆無である。セット関係が十分把握できないため、積極的に段階区分することができない。

一般に、球胴化の程度が、箱清水系壺形土器の編年の指標とされる。つまり、球胴化につれて、頸部は湾曲が強まり屈折し、胴下半部の屈折は明瞭になる傾向がある。

しかし、本遺跡の壺形土器には、この傾向だけでは説明でき



第451図 グリッド別外来系土器の出土量分布

ない一面がある。例えば、頸部が屈折する土器はわずかしかない。また、胴部最大径の位置が比較的高く、胴下半部から底部が屈折せずに湾曲するものが多い。さらに箱清水系土器のメルクマルとされる赤彩が施されないことも多い。

これらの特徴は、従来知られる箱清水式土器と異なり、むしろ箱清水式の前型式である吉田式あるいは北関東の樽式の内容にちかといえる。さらに、吉田式のメルクマルとされ、樽式にも認められる鋸歯

状のモチーフを肩部文様帯に施した土器の破片も出土している(第413図1233-1237)。

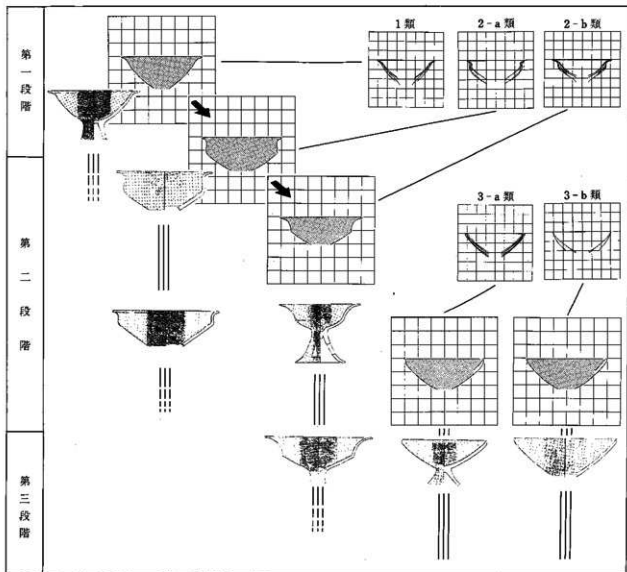
壺では外来系土器の影響によって球胴化が顕著に認められるのに対し、壺では顕著な球胴化はみられず、このように旧い要素が残される傾向がある(註6)。つまり、外来系土器の影響は、壺と甕では異なって現れ、壺においてはバラエティーとしての形態差は現れるが、甕のような画一的变化をせずに外来系土器への転換がなされたと思われる。

ところで、口縁端部形態では受口状口縁と折り返し口縁が多く、とくに前者が多い。この点は甕同様、善光寺平中・南部と大きく様相を異にし地域相と考えられる。ただ、これを外来系の影響と見るべきか、中期以来の伝統を残したものと見るべきかという点は、今後の検討課題としたい。

③高坏形土器

箱清水系高坏形土器は坏部形態を基準にした編年が行われている(註7)。そこで、本遺跡資料も同様に分類した。

- 1 類：口縁部が鐮状に外へはり出す。
- 2-a類：坏部中位の稜が曲線的で不明瞭。
- 2-b類：坏部中位の稜を有し、口縁部は外反する。



第452図 高坏形土器の変遷

3-a類：坯底部から口縁部に内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや受口状になる。

3-b類：坯部形態は3類に似るが、口縁部は受口状でない。

1~3類は1→2-a→2-b→3a・bと変遷するが、3類は1・2類と系譜が異なる可能性が指摘されている。

本遺跡資料では坯部形態を基準として、第1~2段階(古)の1~2類と、第2段階(新)以降の3類を主とする段階に分けることができる(第452図)。住居址資料では、第14号住居址(第2段階)で2-bがほぼ完形で出土しているのに対し、第17号住居址(第3段階)では2類はなく3類が主流となる。本遺跡の第3段階は東海系土器が本格的に流入し、外来系土器が在地系土器を量的に凌駕する時期にあたる。また、北陸地方では在地の高坏・器台の一部が東海系に転換するなど、汎東日本のレベルで土器様相が一変する大きな画期と重なる段階である。旧来の型式(1・2類)が全く別の系譜(3類)に転換されることは、外部地域のそういった動向が関連していると考えられる。

④鉢形土器

量は減少するが、形態は大きな変化を見せない。とくにあげれば、第1~2段階(古)まで口縁部に山形の突起を付加するものがあるが、第2段階(新)以降見られなくなり、赤彩品が減少する。壺形土器同様、外来系土器の影響は形態上の変化をそれほど顕著に及ぼさなかったと思われる。

⑤内彎口縁鉢

第2段階(新)以降、口縁部の内彎が強まる。

⑥広口短頸壺

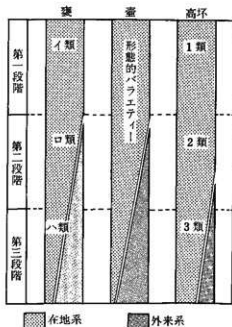
形態はある程度の変遷があるが、時期的な変遷に結びつかない。

⑦蓋形土器

形態にはかなりのバラエティーがあるが、時期的な変遷に結びつかない。

B 在地系土器の変遷類型

主要三器種(甕・壺・高坏)の量的な推移を第453図に示した。甕は外来系土器の影響を受け、イ→ロ→ハと変化しながら減少する。壺は形態的なバラエティーを保ちながら甕よりも早く減少する。これは外来系



第453図 主要三器種の量的推移

土器への転換がスムーズに行われたからである。高坏は外来の「設計図」を“受容”したタイプである。坯部の形態は外来系に似るが、赤彩に固執する点などは在地の伝統で、その系譜が比較的長く存続する。

このように主要三器種が異なった経過をたどって減少することには、それぞれ別な背景が考えられる。

そして、変化のパターンを、I 単純影響型(甕タイプ)、II 器種切替型(壺タイプ)、III 設計図受容型(高坏タイプ)とタイプ別に言い換えることも可能である。ちなみに、主要三器種以外の鉢・内彎口縁鉢・広口短頸壺・蓋はIIのタイプにあたる。

(4) 外来系土器

A 概要

七瀬遺跡では北陸系を主体として、東海系・近江系(註8)・畿内系(註9)の土器が出土した。これらは段階設定の基準

としたように、時間的に前後して当遺跡に流入している。すなわち、北陸系のみが流入している段階と、東海系および近江系・畿内系が流入する段階である。

北陸系土器は近年善光寺平周辺での資料が増加し、かなり早い段階から信濃への流入が始まっていたことがあきらかになりつつある(註10)。また、近江系・畿内系を含め東海系土器群は、赤塚がいう東海系土器の第1次拡散(註11)に伴う流入と考えられる。この拡散に伴う資料は、今のところ善光寺平全般では、中野市周辺に偏る傾向を示している。

以下各段階の外來系土器にふれるが、系統や編年の位置付けがある程度明確なもののみを検討する。取り上げられなかったものも多い。

B 北陸系土器

多少の問題点は残るが、本遺跡の北陸系土器はおおよそ月影式～白江式の要素をもつと考えられる。漆町編年[田嶋1986]に従えば、おおむね4群から6群土器に相当する。

器種としては、甕・壺・高坏・器台・鉢・有孔鉢・蓋・裝飾台付壺で、裝飾器台を欠くものの、北陸通有の器種構成である。そこで、器種毎に問題点をあげながら並行関係を確かめたい。

①甕形土器

甕には、有段口縁系と口縁部が「くの字」に外彎するいわゆる能登甕がある。

有段口縁系は時間の経過とともに口縁端部が先細りに外反するといわれ、これにしたがえば、第14号住居(第2段階(新))の資料は月影式に、第17号住居(第3段階)の資料は白江式に相当する。出土資料全体では、後者よりも前者の方が多い。また、この類は肩部に刺突を巡らすものが比較的目標立つ(第392図430～434・438)。この特徴は北陸地方では法仏式から月影式に認められる。

現状では北陸地方においても、いわゆる能登甕の編年が確立しているとはいえない。本遺跡資料についても、その変遷過程を明確にすることはできない。ただし、量是有段口縁系を上まわり、その点では、北陸地方のうちでも東北部に共通する。いわゆる能登甕は有段口縁系と時を同じくして流入したと思われる。

②壺形土器

有段口縁系の壺は、頸部が長く口縁部が狭いものと、頸部が短く口縁部が広いものがあり、前者が月影期に、後者は白江期に併行すると思われる。本遺跡では、前者は第2段階をもって、後者は第3段階をもって次第に減少する。

二重口縁壺は第2段階に認められず第3段階から出現する。第16号住居には見られず、それよりもやや新しい第17号住居で出土していることから、第3段階後半に出現したと考えられる。

③高坏形土器

やや大形の有段脚をもつ高坏形土器が第13号住居(第2段階(古))から出土している。北陸地方では時間の経過とともに高坏が小形化し、第2段階(古)にこの類が存在することに大きな問題はない。

また、口縁端部が肥厚するものが目立つ。これは法仏式に通有の特徴といわれ、第2段階を月影期とした場合、時間的にはやや問題が残る。第408図973は法仏期に並行するものとも考えることもできようが、全体の様相からは、それほどさかのぼるとは考えにくい。むしろ、口縁端部の肥厚というような形態上の局所の特徴が、新しい時期まで残るとした方が妥当と考える。

ところで、第3段階に相当する北陸系高坏を明確に指摘することはできない。これは白江期になると北陸地方でも東海系高坏が波及することと符合する事象であろう。

④器台形土器

月影期の器台と思われるものが第2段階に存在する。栗林遺跡第30号住居址からは、北陸系の高坏と器台がセットで出土している(第264図57・58)。後者は口縁端部が肥厚する鉢形の坏部を有する。伴出した在

地の裏から、第2段階であり時期も一致する。

やはり、第3段階に相当する北陸系器台を明確に指摘できない。

⑤鉢形土器

第2段階から有段口縁系の鉢が存在する。第3段階での様相は不明瞭である。

⑥有孔鉢形土器

第2段階から底部が小さくハケ整形する土器が存在する。第3段階での様相は不明瞭である。

⑦蓋形土器

第2段階から存在する。やはり、第3段階での様相は不明瞭である。

⑧裝飾台付壺

2点のみで、しかも時期推定の根拠を欠く。

以上が北陸系土器の概要である。北陸の編年に照らせば、おおそ第2段階が月影期、第3段階が白江期に相当する。漆町編年では、第2段階(古)が3群土器、(新)が4群土器、第3段階が5・6群土器にあたる。

C 東海系土器

本遺跡の東海系土器は第2段階(新)に初現し、第3段階に本格的な流入が始まるが、その流入の仕方は突如という感が強い。時期は欠山期の新しい段階から元屋敷期(古)段階に相当する。週間様式[赤塚1988]に照らせば、週間I式の終わりからII式前半のまさしく東海系土器の第1次拡散期と重複する。この観点に立てば、近江系・畿内系土器はこの拡散に伴って本遺跡に流入したと考えた方が妥当である。そこで、以下近江系・畿内系を含めて概観する。また、検討を壺・壺・高環・器台形土器に限る。

①壺形土器

S字状口縁：第3段階の第16号住居址からS字壺A類が、また、第17号住居址ではS字壺がまとめて出土している。後者には口縁部への刺突が認められないが、赤塚分類B類に相当するS字壺というよりA類を祖型として在地で変容したものと考えられる。

「くの字」状口縁：口縁端部を面取り、口縁部のハケを比較的多く残す。第2段階(新)以降の第14・16・17号住居址で出土している。第2段階(新)にわずかに認められ、第3段階から爆発的に増える。

受口口縁系：第15～17号住居址(第3段階)で出土している。頸部から肩部にかけてヘラ描文を施した土器が何点か認められる。

タタキ壺：第16・17号住居址(第3段階)で出土している。

②壺形土器

第17号住居址(第3段階)でいわゆるバレス壺の口縁部が出土している。また、内彎口頸壺と思われる土器が第17号住居址からまとめて出土している。このうち第414図1254～1256は、搬入品の可能性があるとの指摘を受けた(註12)。さらに、第1号溝からも内彎口頸壺が高環や器台と同一グリッド内で出土している。

③高環形土器・器台形土器

第17号住居址(第3段階)ではほぼ完形品がそれぞれ1個体づつ出土している。高環は深めの坏部を有するが、坏底部の稜は不明瞭で欠山式から元屋敷期式(古)段階にかけての要素をもつ。

第1号溝からは内彎口頸壺と高環・器台がまとめて出土している。後者の脚部には内彎志向が残され、坏部も比較的深めである。この点も上記の時期推定を裏付ける。

本遺跡の東海系土器には、前述のように搬入品の可能性を指摘された土器がいくつかある。搬入品であれば、東海地方との時間差が大きいとは考えにくい。総合すれば、本遺跡への東海系土器の流入開始が第1次拡散期にあたるものと考えられるのが妥当であろう。段階区分では第3段階の開始期にあたる。第2段階から第3段階への画期を東海系土器に求めたのもまさにこのためである。

D その他の系統

在来の箱清水系土器の中には、壺あるいは甕の口縁端部に縄文や擬縄文を施すという、在地以外の特徴をもつ土器がわずかながら存在する。

在地系の壺・甕が樽式土器と共通した要素をもつことは前述した。群馬県の土器様相を詳しく知らないが、縄文を施文する伝統は関東地方では古くから存在している。上州との交流の際に関連的な要素が流入した可能性は大きい。また、七瀬遺跡では土製紡錘車が多く出土している。これらは赤彩されたものが多く、縁辺が刻みによって加飾される例もある。以前、土製紡錘車の多出や加飾は上州にも認められるとの指摘を受け(註13)、土器以外にも共通点があることを知った。以上の点から、関東地方との交流も想定される。

関東地方ではこれまで、かなりの北陸系土器の存在が認められている[北田#1987]。北陸系土器の関東への流入ルートの一つが、当地方を経由したものであった可能性も十分考えられる。

E 並行関係

第454図に、北陸・東海との併行関係を示した。また、第455図には時間的な併行関係を捉え易い壺・高坏・甕の消長を図示した。

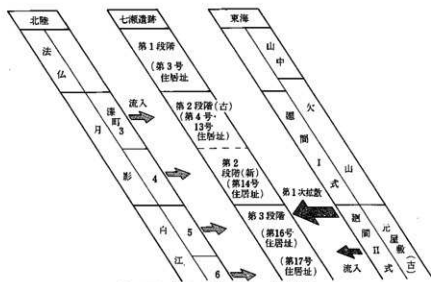
本遺跡の各段階は、両地域とも共通する土器様相の大きな画期となる。第2段階の開始は北陸の月影期である。漆町編年では3群土器に併行する。また、第3段階の開始は白江期、5群あるいは6群土器に併行し、東海の欠山期～元屋敷期(古)段階、廻間遺跡の4～5段階に相当する。北陸系および東海系の時間的關係は、その編年に照らしても矛盾しない。

(5) 各段階の土器様相

在地系・外来系土器の諸相についてふれてきた。ここで、各段階の様相をまとめておきたい。

第1段階土器群

外来系土器の流入以前の段階である。第3号住居址出土資料を指標とする。甕では胴部の球形化が見



第454図 北陸・東海地方との編年対照

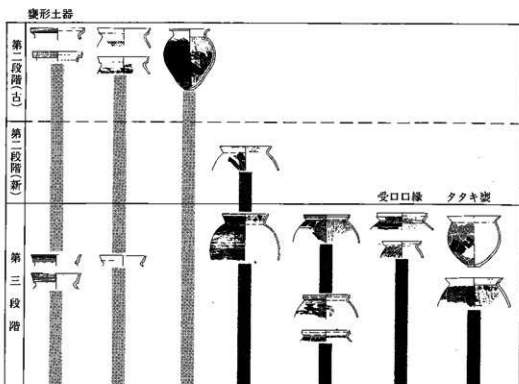
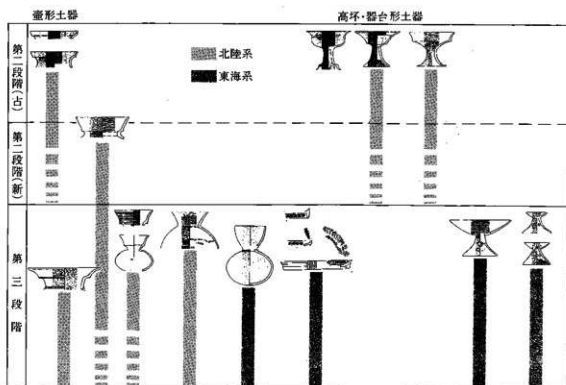
られないイ類、高坏は口縁部が鐮状にはりだす1類と坏部中位の稜が曲線的な2-a類によって占められる。鉢の形態は逆台形を呈し、口縁部に山形の突起が付加されるものがある。有孔鉢の形態は鉢と大きな違いはない。

第2段階(古)土器群

北陸系土器の流入が始まる段階である。同時に在地系甕の球形化が始まる。壺の一部にも球形化が認められる。高

坏は2-a類によって占められる。鉢は前段階からの系譜を引き、大きな変化はみせない。有孔鉢も同様である。

月形式に系譜をたどれる擬凹線文を施した有段口縁の甕や、有段脚の高坏・器台が、この段階で出現する。また、いわゆる能登甕といわれる変形土器も伴出する。この他、形態は在地の土器に類似するが、波状文が欠落したり整形が異なるなど外来系との折衷が、甕を中心にみられるようになる。



第455図 外来系・高坏・変形土器の消長

第2段階(新)土器群

主体は北陸系土器であるが、東海系がわずかに伴出する。在地の甕の球胴化はさらに進む。高坏に2-b類と3類が現れる。鉢の形態は前段階と変わらないが、山形の突起は付加されず、赤彩される土器が減少する。

外来系土器としては月影系の有段口縁甕やいわゆる能登甕が継続する他、口縁部が「くの字」に外折する土器が出現する。この中には端部に面を有し、口縁部の横ナデが強く入らずハゲが残るものがあり、東海系土器の初現と思われる。

第3段階土器群

東海系土器が本格的に伴出する段階である。第16・17号住居址の資料を指標とする。S字甕A類が第16号住居址から出土し、第17号住居址からもS字甕が多出し、さらに搬入品の可能性を指摘された内彎口頸壺なども出土している(註14)。赤塚がいう第1次拡散が東海系土器流入の契機である。

また、北陸系土器は擬凹線文がある有段口縁系甕の口縁部が、第17号住居址から出土している。この資料は、口縁端部が鋭く外反する点で白江期の所産と考えられる。乳白色の胎土で在地のそれとは明確に異なり、搬入品である可能性を指摘された(註15)。これらの点から、本段階が東海では第1次拡散期以降に、北陸では白江期にあたる時期と考えられる。

量的に外来系が在来系を凌駕する段階で、在地系自体も大きく変化する。在地の甕はさらに球胴化し、高坏は3類で占められる。壺や鉢は量が減少するものの、形態に大きな変容は認められない。おそらく、外来系土器への転換が器種の切り替え(先述のII型の変容)という方法で行なわれた結果であろう。

2 まとめとして—いわゆる庄内併行期の土器様相

(1) 外来系土器の流入

当該期の問題として「土器の移動」が取り上げられることが多い。ことに近年、北陸系および東海系土器の移動を通して古墳時代黎明期の土器様相を明らかにしようとする機運が高まりをみせている。

本遺跡において多量に出土した北陸系および東海系土器、若干の関東系の土器は、活発な「土器の移動」の一端を物語るものである。そして、前章ではそれらの流入時期に若干の相違があることをあきらかにした。すなわち、北陸系土器は第2段階(北陸の編年では月影期)から、東海系土器は第1次拡散に伴い、第3段階から本格的な流入が開始される。

ここまでの検討により、この二つの大きな波は異なる背景や目的をもって当地方に及んだと考えたい。なぜなら、流入開始の時期にずれがあることはもとより、流入の仕方に若干の相違があるからである。

北陸系の流入は第2段階の初めから徐々に増加し始める(第447図)。第3段階に入ると東海系の増加によって減少傾向を見せるが、それでも甕のおよそ半分は北陸系である。そして、次段階と想定される周辺の遺跡にも一定量の流入が認められ、その流入は連続的と言える。また、在地系と外来系の折衷は主に北陸系がモデルとなり、在地系土器変化のカンフル剤的な役割を果たしたと思われる。いわば、隣接地域ならではの流入とも受け取れるあり方である。

では、東海系土器の流入はどうであろうか。東海系の流入は突如かつ単発的という感が強い。第3段階から出現するが、次の段階以降と想定される周辺の遺跡には、前段階のような東海色を認めることはできない。つまり第3段階のみの一時的な流入と受け取れるのである。

中野市周辺には東海系土器が多出する傾向を指摘できるが、そのほとんどはS字甕A類に伴うもので、C類以降に伴う土器は客体的な存在である。つまり、第2次拡散の波を大きく受けなかった地域と考えられる。逆に善光寺平南部は第1次拡散に伴う時期の土器群は客体的で、第2次拡散に伴う土器群が集中し、

中野市周辺と対照的な様相を示す。ここにS字甕A類に伴う土器群が集中する地域＝中野市周辺、C類に伴う土器群が集中する地域＝善光寺平南部という図式がで上がる。

ところで、赤塚は東海系土器の拡散現象を「難民の排出」という政治的な意味合いで捉えようとしている〔赤塚1992〕。本遺跡における北陸系と東海系の対照的な流入の仕方、そういった特殊な事情を物語る可能性が高いと考えて良いであろう。全く好対照な善光寺平南部と中野市周辺の比較検討は、今後東海系土器の拡散現象を検討する上で大きな意味をもつものと思われる。

(2) 在地系土器の変化

当該期の在地系土器は、減少しながら次世代の土器に交代する。しかし、減少の速度や変化の具合には、器種毎に若干の違いがあることを前章で述べた。すなわち、I 形態的に変化をしながら徐々に減少し交代する単純影響型(甕タイプ)。II 形態的なバラエティーを保ちながらそれ以上の変化をせずに完結し、外来系土器に交代する器種切替型(壺タイプ)。III 外来の要素をそのまま受容することによって、在地系の系譜を存続する設計図受容型(高坏タイプ)である。このうち、II 器種切替型が最も交代が早く行なわれるのに対し、III 設計図受容型は在地系がかなり遅くまで存続する。

ここで、この様相が、箱清水系土器分布圏のすべてにあてはまるとはいえない点を強調しておきたい。なぜなら、以前から指摘されるように箱清水系土器には地域差が存在し、小地域毎に素地が異なるからである。また、箱清水様式圏内でも外来系土器流入のありかたには違いがあり、その点で土器が一様な変化をするとは考えにくいからでもある。

例えば、善光寺平南部と中野市周辺では甕・壺の口縁端部の形態に前述の地域差が認められる。しかも、東海系の流入は全く好対照である。善光寺平南部への北陸系の流入の仕方は、十分には明らかでないが、地理的な環境から考えても中野市周辺とは違うことが当然予想される。

3 残された課題

本遺跡の調査によって、外来系土器の流入の仕方や、在地系土器の変遷をほぼあきらかにすることができた。外来系土器を伴出する第2段階～第3段階のありかたは、中野市周辺という小地域内での土器様相を鮮明に物語っている。

しかし、残された課題は多い。主要な問題の一つに箱清水様式圏内での地域差の問題をあげなければならない。善光寺平南部と中野市周辺という近接した地域間でも、外来系土器の流入や在地系土器のありかたにははっきりとした違いがある。今後、小地域間での様相差を浮き彫りにし、小地域編年ともいべきものを組み上げてゆくことが、箱清水式土器の変遷を明らかにするために、さらには箱清水様式そのものの理解に近付くためにも必要な作業となる。

今一つは、在地に流入した外来系土器の問題である。つまり外来系土器が在地でどのような変化をするのかという問題である。在地に流入した外来系土器は彼の地の社会からは断絶し、当地の社会から多分な影響を受け、その点で彼の地の土器変化と同じ歩みをするとは考えられない。当然在地系土器と相互に影響しあいながら、独自の变遷を遂げると考えられる。箱清水式土器(=弥生土器)が、次世代の土器(古式土師器)に交代する姿を明確にするために重要な問題である。

註

註1 「シンボジウム“月影式”土器について」・「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器」・「東日本古墳出現過程の再検討」などのシンボジウムの開催や庄内式土器研究会の活発な活動などからうかがえる。

- 註2 文様・器様が在来の箱清水式から系譜をたどれない土器を外来系土器とする。また、箱清水様式圏内に系譜をたどれる土器を在来系土器とする。
- 註3 在地系土器の「在地」とは、七瀬遺跡を中心とした小地域圏を想定する。在来系土器とは箱清水系土器を指し、在地系土器とは箱清水系土器の地域色を指すものとする。
- 註4 器様は土器製作の設計図上で、他の器種と明確に区別される最も大きな枠組み。土器の用途に直接結びつくもの。それ故に、一つの文化圏内に通有のもの。形態は通常、器形と一括される内容。単純に形そのものを指す。
- 註5 千野 浩は、A類(胴部最大径を胴上位(肩部)に有し、口縁部は短く外反するもの。口縁部文様帯は存在しない)、B類(胴部最大径を胴上位に有し、口縁部が長く外反する形態)、C類(胴部最大径を基本的に胴中位付近に有し、B類に比べて口縁部が長く発達しない形態)に大別し、それらをさらに細別しながら、箱清水系変形土器の編年案を提示した〔千野1989〕。
- 註6 これは時期的・地域的な問題に関係している。府部の順曲状文は樽式土器にも認められ、群馬県北部では後期後半まで存続する。壺口縁部に折り返し口縁が多い点も樽式土器との共通点であり、地理的条件を考慮すれば、中野市周辺と樽式土器分布圏が似かよった土器製作上の設計図を有していたとしても不思議ではない。
- 註7 青木和明は、器内の編年を援用しながら在来の高杯の編年案を提示した〔青木1984〕。
- 註8 受口縁系の土器をこれにあてる。
- 註9 タタキ甕をこれにあてる。
- 註10 長野市北部に位置する本村東沖遺跡では法弘期に比定される北陸系土器が出土しており、七瀬遺跡よりも早い時期から流入が始まっていたことがうかがえる〔千野1993〕。
- 註11 赤塚次郎は、東海系土器の拡散現象を、類Ⅰ式後半からⅡ式前半に見られる第1次拡散と、Ⅱ式後半からⅢ式に見られる第2次拡散に分けている〔赤塚1990〕。
- 註12 加納俊介氏、赤塚次郎氏からのご教示による。
- 註13 橋本博文氏からのご教示による。
- 註14 (註12)と同じ。
- 註15 田嶋明人氏、坂井秀弥氏、川村浩司氏、春日真実氏からのご教示による。

引用文献

- 青木 和明 1984 「箱清水式土器の編年予察—千曲川流域弥生土器における高杯形土器を中心として—」『長野県考古学会誌』48
- 青木 一男 1984 「善光寺平南域における古墳出現期集落土器について」『古墳出現期の地域性』北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学読書会・千曲川水系古代文化研究会
- 青木 一男 1989 「土器に見る森林環境古墳出現の前後—千曲川流域の研究と今後の課題—」『長野県縄文文化財センター紀要』3 長野県縄文文化財センター
- 青木 一男・宇賀神誠司 1992 「4世紀を中心とした土器編年表」『科野における古墳出現期の現状と課題』長野県考古学会
- 赤塚 次郎 1990 「考察」『遼瀋遺跡』愛知県縄文文化財センター
- 赤塚 次郎 1992 「東海系のトレス—3・4世紀の伊勢内沿岸地域—」『古代文化』6 財団法人古代学協会
- 五十嵐 信・南雲芳昭 1986 「中村遺跡」『渋川市教育委員会』
- 宇賀神誠司 1988 「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県縄文文化財センター紀要』2 長野県縄文文化財センター
- 大江正行・平野通一 1982 「日高遺跡」群馬県縄文文化財調査事業団
- 大西雅広他 1990 「有馬遺跡II」群馬県教育委員会・群馬県縄文文化財調査事業団
- 金井 汲次 1979 「安部寺II」中野市教育委員会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「古墳出現前後における地後の土器様相—越後・会津・能登—」『磐城地方における古墳文化形成過程の研究』
- 笠沢 浩 1970a 「箱清水式土器の再検討—長野市内発見資料を中心として—」『信濃』23-4
- 笠沢 浩 1970b 「箱清水式土器発掘に関する一試論」『信濃』22-11 信濃史学会
- 笠沢 浩 1977 「弥生土器—中部高地」『考古学ジャーナル』133, 134
- 笠沢 浩 1978 「中部高地型構文の系譜」『中部高地の考古学』長野県考古学会
- 笠沢 浩 1986 「箱清水式土器の分布圏と小地域」『歴史手帖』2
- 佐藤 明人 1980 「樽式土器の様式推移と地域色」『群馬の考古学』群馬県縄文文化財調査事業団
- 田嶋 明人 1986 「TV考察—深町遺跡出土土器の編年の考察」『深町遺跡I』石川県立縄文文化財センター
- 千野 浩 1989 「千曲川水系における後期弥生式土器の安遷」『信濃』41-4 信濃史学会
- 千野 浩 1993 「2 本村東沖遺跡出土の弥生時代後期・北陸系土器について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会
- 土屋 積 1993 「長野県内の竪穴式石室と木棺」『長野県考古学会誌』69・70 長野県考古学会
- 比田井克仁 1987 「南関東の北陸系土器について」『古代』第83号 早稲田大学考古学会

第8節 善光寺平北部の古墳と地域集団

—七瀬・栗林遺跡の古墳時代集落—

1 中野市周辺の古墳

この地域における古墳で現在その内容が知られるのは、七瀬双子塚古墳(前方後円墳)をはじめとする5世紀以降の古墳だけである。その数は5世紀代のみを取り上げれば、周辺他地域よりも多い。しかし、後期古墳は夜間瀬古墳群など数基が知られるのみである。5世紀から6世紀前半頃までの古墳は、割竹形木棺の多さ、合掌形石室の存在や初期須恵器の出土など、特徴的な様相をもつものがある。この地域の古墳時代は、これらの中期古墳とともに、それに采譜的に直接先行するものとは考えられない蟹沢古墳・勘介山古墳(前方後方墳)の存在によって特徴付けられる。

七瀬遺跡と栗林遺跡のうち、弥生時代末から古墳時代初頭の集落は、前方後方墳の造営に、栗林遺跡のうちで古式の須恵器を有する集落は中期古墳の造営に、それぞれ脈絡をもって考えなければならない存在である。古墳時代前期・中期の古墳分布は、中野扇状地の周囲において、時期的・地理的にかなり偏在している。七瀬遺跡・栗林遺跡の所在する丘陵地は、地域最大の古墳である七瀬双子塚古墳〔土屋1982a〕に代

表され、林畔1・2号墳〔小野・横山1963〕など、県内他地域にあまり見られない割竹形木棺が集中し、中期古墳の濃密な分布域である〔土屋1993〕。これらは5世紀中葉以降の比較的短期間に集中して築かれ、この丘陵地では前期あるいは後期の古墳を確認できない。一方、扇状地東側には、蟹沢古墳〔田川・松沢1982〕のように前期段階の古墳が存在する。また、中期古墳としては紫岩古墳〔榎原1982〕・金鍬山古墳〔土屋1982b〕などの、初期須恵器を持ち埋葬施設の上でも横穴式石室導入期直前と考えられる特徴的な様相をもつ古墳が分布している。



第456図 周辺の主要古墳

▲ 七瀬遺跡	8 七瀬双子塚古墳
■ 栗林遺跡	9 京塚古墳
	10 立ヶ花2号墳
1 勘介山古墳	11 蟹沢古墳
2 山の神古墳	12 金鍬山古墳
3 林畔2号墳	13 高遼山古墳
4 林畔1号墳	14 純懐古墳
5 七瀬5号墳	15 光念寺古墳
6 七瀬3号墳	16 紫岩古墳
7 七瀬2号墳	

第25表 周辺の主要古墳

番号	古墳名	所在地	墳形	埋葬施設	棺	規模・その他
1	勸介山	飯山市静岡	前方後方			全長35m
2	山の神	中野市厚貝	円	木棺直葬	割竹形木棺	径32m・1948年発掘
3	林畔2号	〃 田麦	円	木棺直葬	割竹形木棺	径27m・〃
4	林畔1号	〃 田麦	円	木棺直葬	割竹形木棺	径23m
5	七瀬5号	〃 七瀬	円	木棺直葬	割竹形木棺	径20m・主体部3・1987年発掘
6	七瀬3号	〃 七瀬	円	木棺直葬	割竹形木棺	径19m・主体部3・1988年発掘
7	七瀬2号	〃 七瀬	円	木棺直葬?		径17m・1986年発掘
8	七瀬双子塚	〃 七瀬	前方後円	木棺直葬?		全長61m
9	京塚	〃 草間	円	木棺直葬	割竹形木棺	径30m・主体部3・1991年発掘
10	立ヶ花2号	〃 立ヶ花	円			径32m
11	蟹沢	〃 蟹沢	前方後方			全長36m
12	金龜山	〃 新野	円	合掌形石棺		径21m・1925年発掘
13	高遠山	〃 〃	前方後円			全長55m・前方後方の可能性
14	姥嶺	〃 更級	円?	木棺直葬?		径17m
15	光念寺	〃 小田中	円			
16	紫岩	〃 栗和田	円	横穴式?		径19m・竪穴式石室の可能性

2 前期古墳の築造

この地域の古墳は、東日本一円の状況から見て、前方後方墳である勸介山古墳〔松沢1982〕・蟹沢古墳に始まるものと考えられる。別項でも述べているように、この地域では、S字甕A類段階の集落が扇状地末端の低湿地帯周辺にかなり広く分布することがあきらかになりつつある〔越田1991〕。S字甕A類の分布と前方後方墳の存在こそが、この地域を特色付ける。4・5世紀の集落の状況はまだ充分あきらかではないものの、外来系土器を特徴とする集落は、七瀬遺跡に見られるように今のところ4世紀前半代より後には継続しない。また、栗林遺跡においては、前期と中期では立地をやや変えていることがあきらかにされた。この地域の外来系土器、なかでも東海系土器の多出は、前方後方墳築造の契機を間接的に示す現象であろう。蟹沢古墳の位置からすれば、前方後方墳築造を直接に担ったのは、七瀬遺跡や安源寺遺跡の集団ではなく低湿地帯東縁の集団と思われる。また、七瀬・安源寺遺跡〔金井・他1967〕の集団もその築造基盤の一部を構成したであろうことが、勸介山古墳との位置関係や集落における東海系土器のありかたなどからも読み取れる。前方後方墳の築造に示される歴史的条件が長期間継続するようなものでなかったことは、以後1世紀の間古墳築造が途絶えることばかりでなく、集落の動向からもうかがえる。

このような様相は、まさに赤塚のいう東海系土器(廻間様式)の第一次拡散期〔赤塚1990〕に対応する現象と見ることができるのではないか。いわゆる波及ルートの問題も、七瀬遺跡における北陸系・東海系土器群の消長から見れば、南方からの波及であった可能性は大きいと考える。提点的・一時的であるという

第一次拡散そのものの性格からしても、東海系土器の波及が七瀬遺跡よりもやや早かった塩尻市上木戸遺跡〔宇賀神・他1987〕の存在は、七瀬遺跡のもつ意義をよく示している。一方、この地の北陸系土器の濃密な分布から、前方後方墳の築造を北陸・越地域との交流に直接的契機を求めて理解しようという意見がある〔甘粕1986〕。しかし、七瀬遺跡における外来系土器の消長や地域全体の古墳の様相からすれば、S字甕A類の波及に先立つ北陸との関係は、その前提ではあっても直接の契機ではない。それは、東海系土器の波及にこそ求められるべきである。北陸東部系土器の影響が漸増する〔前島1993〕という前提があったが故に、この地に東海系土器がもたらされたのであり、前方後方墳が築かれたと考える。土器様相においては、この段階以降、畿内の様相を深める4世紀末ころまで、これほどの画期は今のところ認められない。土器の画期と相応する墓制の変化は、前方後方墳の出現以外には求められないのである。県内の前方後方墳のうち、弘法山古墳〔斎藤・他1978〕の周辺においても、以後の古墳築造の状況や外来系土器の様相・集落の動向〔白居1993、直井1993〕など同様に見てよいと思われる点がある。いま、この土器様相における画期と前方後方墳築造との時間的接点を確かめる材料は乏しい。しかし、この地の前方後方墳がS字甕A類の存在に示されるように、弘法山古墳にそれほど遅れるものでなかったとすれば、蟹沢古墳や勘介山古墳は越中・越後の古墳出現に先んじた可能性があることになろう。この推測が成り立つものであれば、いわゆる「北陸型」前方後方墳〔赤塚1992〕の出現の契機〔甘粕・他1993〕についても、やや考えを改めるべき点があるかもしれない。

一方、善光寺平南部においては、この第一次拡散期を示す現象は明確でなく、S字甕B類段階以降になると集落遺跡からの東海系土器の出土が、量的多寡は別としてかなり普遍的になる〔青木1993〕。これは同時期の畿内系土器のあり方からも、森将軍塚古墳〔岩崎・他1992〕の築造に示される事態に結果する現象であろう。この地域では森将軍塚古墳以降、4世紀半ばから6世紀初頭まで前方後円墳の築造が継続する〔岩崎1989〕。この状況は弘法山古墳周辺やこの地域の状況とはかなりの差があり、いわゆる前方後円墳体制〔郡山1992〕のうえで善光寺平南部の地域集団が占めた優位性を示す。同時に、前方後方墳の築造においては事情が異なることを暗示する。このことは、南部の前方後円墳集中地域における唯一の前方後方墳として知られる姫塚古墳〔岩崎1982〕が、蟹沢古墳や弘法山古墳とは、年代観も含めて、異なる歴史的条件のもとで築かれたことを推測させる。

3 中期古墳の築造

七瀬双子塚古墳の築造時期は、善光寺平南部の集中地域から盆地一円への前方後円墳の分布拡大期にあたる。蟹沢古墳の築造から1世紀以上の中絶を経て、前方後円墳体制はこの地域に及んだ。南半部の一部地域以外の善光寺平ほぼ全域に、この時期初めて、そして一斉に起こったことである。この時期に前方後円墳が波及した地域では、前方後円墳は1世代で途絶え、以後、古墳は墳形の変化・規模の急激な縮小化を示す。この現象には、畿内政権による全国的なレベルでの政治的再編過程を見るべきであろうことは、これまでも多く指摘されてきた。中野市域では、この段階の古墳のほとんどは扇状地西側の丘陵地に分布している。丘陵上では七瀬古墳群〔岩崎・滝沢・権取1989〕をはじめ、調査が行われた古墳のほとんどが5世紀半ば前後であるのに対して、扇状地東縁ではこの段階以前の古墳として銚懐古墳〔田川・松沢1982〕をあげうるのみである。これよりやや遅れ5世紀末から6世紀初頭になると、東縁の山頂に金鐘山古墳・紫岩古墳が築かれる。同じ時期丘陵上には目立った古墳は今のところ確認されていない。これ以降この地域には古墳が存在せず、後期古墳群としては、扇状地周囲の集団とは別な造営基盤をもつと思われる、地理的にやや離れた夜間瀬古墳群をあげうるのみである。中期古墳の様相は、前期古墳同様、古墳築造の契機が安定したものでなかったことを示している。しかし、それはその契機を得るという点での不安定であって、そのまま地域集団自体の不安定を示すものとはいえないだろう。

ところで、善光寺平の南部においては、複数の集団間による首長権の継承が跡付けられている〔岩崎1988〕。かつて、中野市域の前方後円墳や前方後方墳についても、同様の可能性が指摘されたことがある〔土屋1982〕。しかし、前方後円墳・前方後方墳に限れば、首長墓の継承という事態はこの地域ではまだ明確ではない。かわって、大形の円墳が時期ごとに場所を変えて何基か造られるという状況があらかになりつつある。これらの円墳は、立地や単独墳であることから、小首長墓と考えられるものが多い。同時期の分布から見れば、その首長権の範囲は一〜二の集落程度に及ぶものでしかなかったと考えられる。このなかで、七瀬古墳群に見られる時期差がそれほどない古墳の群集は、この地域で他に見られない。七瀬古墳群の中核は前方後円墳七瀬双子塚である。七瀬古墳群の円墳群は、一族から前方後円墳被葬者を輩出したことが、古墳築造契機という点で近隣他集団に比べて、この集団を相対的に優位に置いたことを示すものであろう。また、この集団を含む西部丘陵地周辺の集団が東部の集団に対して同様であったことが扇状地東西の分布の偏在に示されている。この事態は5世紀中葉から後半の短期間で終息し、一〜二世代後には、その優位は東部に移る。それも直後には古墳築造の契機が失われて、古墳が見られなくなるのである。

4 地域集団のすがた

善光寺平南部においては、一〜二の集落を基礎的な集団とし、それが複数集まって「ルーズな連合体」を構成して首長権の継承が行われる。その結果、数世代の前方後円墳がそれぞれの基礎的な集団を直接の母体として造営されながらも、「連合体」全体としては首長墓の累世的築造が行われたと考えられている。これに似た現象は、さきに見たように中野扇状地周辺においても見ることができる。つまり、この扇状地周囲の全体を包括する「連合体」が存在し、それは大きくは扇状地の東部と西部の集団に二分される。また、それぞれは一集落程度を基礎とする複数の集団から構成される。蟹沢古墳の築造に示されるこの「連合体」の形成には、扇状地末端の同一水系における低湿地開発の開始という事態が、大きく影響を及ぼしたと思われる。それは、蟹沢古墳の様相やこの時期の集落の外來系土器に見られるように、何らかのかたちで人の移動を伴うような対外的関係の深まりの中で起こった。それはこの地域の古墳時代の幕開けでもある。この動きは、土器群の消長によく示されるように、弥生時代後期からの畿内・東海・東国といった大きな関係のなかで理解されるべきものである。つまり、在地集団の政治的・社会的発展の結果というより、全国的動向のなかで、「越への道」あるいは「越からの道」という、この地域のおかれた地政学的位置によりもたらされたものであろう。それ故に、その後、東国における政治的動向の焦点が他地域に移るとともに、以後約1世紀の古墳の空白期を迎えざるを得なかったのではなからうか。また、その空白期も「連合体」が維持されていたであろうことは、蟹沢古墳とほぼ同様の空間的エリアを基盤として、七瀬双子塚が地域全体の首長墓として築かれたと考えられることからもうかがえる。

善光寺平南部においては、七瀬双子塚より以前から以後まで、前方後円墳の造営が継続して行われていた。それと比べて、前方後円墳築造の契機が5世紀中葉時点までなかったことに示されるように、この地域集団の基盤が相対的に弱いもの、言い換えればより「ルーズな」ものであったことは考えなければならない。これが、対外的には前方後円墳の築造を遅らせた一因である。また、前方後円墳を築造したことが集団の政治的発展を促したであろうことを考えると、この集団にはそのような変化を促す要因が、5世紀半ばまで存在しなかったことになる。岩崎は、この地域の割竹形木棺の卓越に畿内「棺制」〔都出1986〕の直接的反映を見、中央王権とのかかわりの深さを見た〔岩崎・滝沢・植原1989〕。遅れて加わったからこそ在地での政治的諸関係の未発達が存在し、それゆえ、個々の円墳に示されるような小首長が畿内に直接かかわりをもち得たとも考えられよう。このような集団のすがたは、前方後円墳が1代で終わり、1集落単位ほどの空間的開隔をもって円墳が築造されることにも示されている。つまり、地域全体を統合する方向より

も、集落単位で古墳築造契機を得るような方向への動きが見られるのである。この地域の中期古墳が、集団的発展の結果ではなく、対外的契機によりつく規定されて造営されたことは、一貫した首長系列がたどれないことにもうかがえる。そして、対外状況の変化とともに、政治的に十分発展し得なかったこの地域集団は、対外的にも対内的にも古墳造営の必然性を失い、それ故に後期群集墳の形成にも発展できなかったのではないかと。

善光寺平南部における前方後円墳の世代ごとの移動に類することは、扇状地の西部から東部への古墳立地の移動というかたちで見られた。今のところ、東部には七瀬双子塚の首長権を受け継いだ地域全体の首長墓を確認できないが、その候補として高遠山古墳〔田川・松沢1982〕をあげることができる。この古墳は前方後方墳の可能性もあり、前方後円墳であるとしても古い形態をとるように見える。しかし、この地域の古墳様相の中では、5世紀後半段階の可能性を考えるのも一案ではないかと思われる。そうだとすれば、東西2集団の存在はより蓋然性をもつだろう。

以上のような状況は、善光寺平北部の前方後円墳に示されるそれぞれの地域のすべてにおいて認められる現象である。中野・飯山市域と他地域の状況がもっとも異なるのは、前方後方墳の前史を持つかどうかという点である。5・6世紀、この地域はその前史をもちながらも、それをもたない地域とほぼ同じ古墳築造の状況を示す。前方後方墳の築造契機と前方後円墳のそれとに、質的ちがいが存在したことの傍証ともなろう。そのちがいは、これまで述べてきたことからもうかがえるように、古代国家形成過程の、それぞれの時点において在地集団がもたねばならなかった対外関係のレベルの違いである〔都出1989〕。

5 周辺の古式須恵器

ところで、栗林遺跡には、この地域の主要な古墳分布が扇状地東部へ移ろうとする時期の集落が存在した。その竪穴住居址からはTK208前後に相当する須恵器が見いだされている。この住居はやや規模が大きくかまどを造り付けているが、集落内で特別な位置を占めるようには見えない。須恵器が住居の時期を示すものとすれば、県内でも古い時期のかまどの一例である。善光寺平では、陶質土器やTK73・TK216・TK208段階の須恵器が盆地一円に分布することが知られている〔木下1992〕。これらI期の須恵器の大半が古墳出土品である。集落からの出土は長野市牟礼バイパスB地点〔栗山1986〕・長野市本村東沖遺跡など浅川扇状地遺跡群〔栗山1993〕、更埴市・長野市南部〔木下1992〕などでいくつか知られる。栗林遺跡例は集落出土の例を加えた。

中野市域はこの時期の須恵器の出土例が比較的多く、金鐘山古墳・紫岩古墳・七瀬5号墳の出土品、古墳以外では新井大ロフ遺跡〔金井1982〕で祭祀遺構にともなうと考えられるものがある。他の古墳として、長野市上池ノ平2・3号墳〔矢口・横山・青木1988〕・更埴市森2号墳〔岩崎・他1992〕などがあげられる。すべて中小の円墳であり、埋葬施設内への副葬ではなく墳丘または周溝内への供献状態で出土している点も共通している。県内他地域においてもほぼ同様である〔西山1988〕。この須恵器の存在は、前方後円墳が盆地一円に拡大した直後に、さきの円墳がさらに小集団を母体として築造された契機と不可分の現象を示すものである。善光寺平周辺では、TK47型式とされる、長野市松ノ山窯跡〔笹沢・原田1974〕が最古の須恵器窯である。それにさかのぼるこの時期の須恵器は、今のところ搬入品と考えねばならない。これら当時の文物として最新の須恵器は、中・小円墳の被葬者が、畿内政権とのかかわりのなかで得た古墳築造契機の一環としてもたらされたものであったと考えられる。なかでも、栗林遺跡・七瀬双子塚・紫岩・金鐘山古墳と浅川扇状地遺跡群・地附山古墳・上池ノ平2・3号墳という、集落・前方後円墳・円墳の相似した関係には、両地域の政治状況にも相通する点があったのではないかと思わせる。仮に将来、松ノ山窯跡にさかのぼる窯があきらかにされることがあっても、これらの須恵器のもつ意義はさほど変わらないであろう。

このように見た場合、栗林遺跡の須恵器は、先述した地域集団の発展段階の理解によく相応する資料であるといえないであろうか。憶測になるが、中期の円墳被葬者が、かまどや須恵器という最新の文物を受け入れてはいても、ほかの堅穴住居とそれほど変わるところのない住居を住まいとしていたとしよう。そこには対外的に共同体を代表し得ても、共同体のうちにおいてはまた政治的に卓越した存在に上昇し得ない小首長のすがたを見ることができるともかもしれない。これら小首長にまで古墳築造の契機を及ぼした後、善光寺平南部においても、ほぼこの段階で前方後円墳の築造は終了し、すでに群集墳の時代が始まろうとしていた[土屋1992]。善光寺平北部では前方後円墳の終了は南部よりやや早く、そして、同じ集団が中期から継続して後期古墳を造ることはなかった。このことに、どのような意義を見るかについては、もうしばらくの時間と資料の積み重ねが必要であろう。

引用文献

- 青木 一男 1993 「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70長野県考古学会
 赤塚 次郎 1990 『継円遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
 1992 「前方後方墳」『季刊考古学』40 雄山閣
 甘粕 健 1986 「古代文化の形成」『新潟県史通史編1』新潟県
 # ・他 1993 『越後山谷古墳』巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室
 飯島 哲也 1993 「本村東沖遺跡出土の古式須恵器について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会
 岩崎 卓也 1982 「川柳將軍塚古墳・藤原古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
 1988 「古墳と地域社会」『日本考古学を学ぶ(3)』有斐閣
 1989 「古代社会の基礎」『長野県史通史編一』長野県史刊行会
 # ・他 1992 『史跡藤原將軍塚古墳』更埴市教育委員会
 岩崎卓也・滝沢誠・榎原長則・他1989 『七瀬古墳群・田麦中級古墳群』中野市教育委員会
 宇賀神威司・他 1987 「上木戸遺跡」『中央道長野線発掘調査報告2』長野県埋蔵文化財センター
 白居 直之 1993 「弥生時代終末から古墳時代前期の様相」『長野県考古学会誌』69・70長野県考古学会
 小野勝平・横山浩一 1953 「下高井」長野県教育委員会
 金井 汲次 1982 「新井大ロフ遺跡」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
 # ・他 1967 『安瀬寺遺跡』長野県考古学会
 木下 亘 1992 「長野県下出土の古式須恵器概観」『史跡藤原將軍塚古墳』更埴市教育委員会
 斎藤忠・他 1978 『弘法山古墳』松本市教育委員会
 笹沢浩・原田勝美 1974 「長野県下出土の須恵器」『信濃』26-11
 田川幸生・松沢芳弘 1982 「瀬沢古墳・高遠山古墳・純徳古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
 榎原 長則 1982 「紫岩古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
 土屋 積 1982a 「七瀬双子塚古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
 1982b 「金籠山古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
 1992 「藤原將軍塚古墳の墓域構成について」『史跡藤原將軍塚古墳』更埴市教育委員会
 1993 「長野県内の堅穴式石室と木棺」『長野県考古学会誌』69・70長野県考古学会
 都出比呂志 1986 「堅穴式石室構造の地域性の研究」大阪大学文学部
 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
 1992 「墳丘の型式」『古墳時代の研究7』雄山閣
 直井 雅尚 1993 『弘法山古墳出土遺物の再整理』松本市教育委員会
 西山 克己 1988 「借遣国で須恵器が用いられ始めた頃」『借遣』40-4 借遣史学会
 前島 卓 1993 「北陸系土器の動向」『長野県考古学会誌』69・70長野県考古学会
 松沢 芳弘 1982 「輪介山古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
 矢口忠良・横山かよ子・青木和明 1988 『地蔵山古墳群』長野市教育委員会
 横山かよ子 1986 「古墳時代中期須恵器について」『浅川扇状地遺跡群』長野市教育委員会
 綿田 弘実 1991 「西条・岩船遺跡」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器。第3分冊』

あとがき

——栗林・七瀬遺跡の歴史的位置——

一連の発掘調査によって明らかにされた主要な時期は次の3つである。一つはこれまで長野県北部で資料の少なかった縄文時代後期、二つ目は著名な栗林式土器に示される弥生時代中期、三つ目は近年注目されつつある弥生時代末から古墳時代初期である。中野市西部の丘陵地がさまざまな時代の主要遺跡の密集地であることが、いまさらながら実証されることとなった。

栗林遺跡における調査の主要部分を、縄文時代が占めたことは予想外であった。県史跡指定地を中心に弥生時代以降の遺跡として認識されていた遺跡観は今後大きく改められることであろう。縄文時代の低湿地遺跡の調査は近年増加しつつあるが、その成果のなかにおいて今回の調査は重要な一角をなすものであり、県下初の事例となった。集落の全貌は充分明らかとはならなかったが、それに付随する生産活動の場が明らかにされた。わけても、水さらし場と考えられた構築物は、縄文時代の木工・水利技術の水準をよく示しており、貯蔵穴とならんで縄文時代の食料加工システムを鮮明に示している。

弥生時代中期の資料は両遺跡で得られている。とくに栗林遺跡では調査が広域に及んだことによって、史跡指定地周辺での掘立柱建物群やそれとは別の集落の存在を明らかにして、この遺跡の重要性をますます高めた。栗林式土器は弥生時代中期を代表するものとされながら、この地の資料は十分とは言えなかった。それを充実させた意義は大きい。また、七瀬遺跡の木製農具は、初期水田耕作を実証する資料として長野県内では最古のものである。今後、水田・集落跡と結びつけて考えられる日の来ることを期待する。

七瀬遺跡の外来系土器や栗林遺跡の古墳時代初期および中期の資料は、近年注目されている古墳時代初期の地域間交流の解明に貴重な資料を提供した。近畿地方以東の広域に系譜を求められる多くの資料は、古墳時代の始まりを理解するために重要である。すでに多くの方から注目されているが、安源寺遺跡をはじめとする周辺の同時代遺跡とあわせ、今後、この資料を抜きにしてこの時代は語れないであろう。

困難な発掘調査を終えてから本書の刊行に至るまでの期間は、膨大な遺構・遺物量に比してわずかな期間であった。日夜の努力にもかかわらず、記述の不統一や意を尽くせない点が多い。各担当者間での論議を十分行う時間がなかったために、ことに考察部分において内容は必ずしも一致していない。また、力及ばず現在の研究状況に通じていない点、水準に達しない点もあろうかと思われる。この調査にかかわった者に一層の精進が求められることも十分承知しているが、今後本書が多くの方に御活用いただければ、不足の点は補っていただけるものと信じる。遺跡が人を育て、人が遺跡を育てる。栗林・七瀬の両遺跡はこの調査によって、これまで知られなかった部分で大きく成長した。これを今後に生かし、遺跡とともに育ちたいものである。このことを肝に銘じつつ、本書に御名前を掲げられなかった多くのかたがたも含め、発掘調査から本書の成るまで御世話になった皆様に深く感謝申し上げます。

栗林遺跡遺構覆土説明

縄文時代

貯蔵穴

遺構番号	層	説 明
1	1	VII b 相当
2	1	暗灰色 粘土 VII シルト 小塊点在 炭化物含む 鉄集積あり
3	1	VII a 相当
4	1	暗灰色 粘土
5	1	明茶褐色 粘土
6	1	VII a・VII b 混入
7	1	暗褐色 砂質
8	1	VII a
9	1	黄灰色 粘土質砂 炭化物少々含む
	2	黄灰色 炭化物少々含む 砂礫含まない
10	1	暗褐色 砂質 礫は混入しない
	2	黒色 粘土質 しまり有
11	1	明茶褐色 砂質 しまり良い 鉄分濃あり VII 近似的縄文色含層に類似
12	1	黒色 シルト質 粘土質 粘性強 しまり弱
13	1	VII a を基調
	2	黄灰色 粘土混砂 しまり有
14	1	VII a 相当
	2	黒褐色 鉄分含む
	3	黒褐色 粘土 しまり有 炭化物含む
15	1	VII a 相当
	2	黒色 シルト質 粘土質 粘性強 しまり弱 砂層混入
	3	黒色 砂質 砂質分強 粘性あり VII b が混入する
	4	黒色 しまりやや弱 3 に VII b 相当混入
16	1	灰褐色 砂 VII b 近似
	2	にぶい黄褐色 砂礫 VII b 近似
	3	灰黄色 砂粘土構成
	4	褐灰色 砂混粘土質 底に炭化物あり
17	1	褐灰色 粘性強
	2	粘土混砂質
	3	黒褐色 炭を含む
	4	黒褐色 砂質 粘土質 黒っぽい
18	1	黒色 シルト質 粘土質 しまり良 炭化材含む 管状に鉄分集積多量 VII a が入りこむ
	2	黒褐色 砂質 しまり良 VII a ロック混入
	3	黒色 シルト質 粘性強 炭粒含む 1・3 の境付近で樹皮確認される
19	1	黒褐色 シルト質粘土
	2	黒褐色 砂多く含む 炭化 礫混入
	3	礫
20	1	VII a 相当
	2	黒褐色 粘性を多くもつ クルミ数点、出土
21	1	褐灰色 粘性質 粘性良 しまり良 多量の炭片若干の焼土含む 砂粒混
	2	褐灰色 砂質粘土 鉄分集積あり
	3	灰色 粘土
	4	黄灰色 粘土

	5	暗灰色 粘土
	6	灰色 砂質 粘性強 鉄分沈着なし 壁際の部分堆積物である
	7	灰色 砂質 粘性強 鉄分沈着なし
	8	灰色 砂質粘土
22	1	黒褐色 上～中にⅦaが部分的に混入
	1	Ⅶaに相当
	2	黒褐色 シルト 粘性有 しまり強 白色砂粒混
	3	黒褐色 シルトⅦに近似 やや粘土質で黒い
23	4	黒褐色 粘性有 しまり有 褐色酸化 粘土塊混入
	5	黒褐色 粘性有 しまり有 褐色酸化 粘土塊混入は4より多い
	6	黒色 シルト
	7	黒色 灰緑色粘土粒 砂粒混入
24	1	暗褐色 粘性さほど無 しまりさほど無 極めて少量の炭含む 鉄分多量沈着 縄文土器多量出土
	2	暗褐色 粘性良 しまり良 1より多くの炭含む 鉄分沈着と縄文土器は1より少ない
25	1	暗褐色 粘性あまり無 しまり良 微量の炭片含む 鉄分沈着多い 砂粒混入
	2	暗褐色 粘性あまり無 しまり良 微量の炭片含む 鉄分沈着少 砂粒混入多
	3	黒褐色 粘性有 しまり良 炭片混入は1・2より多い
	4	灰褐色 若干の炭片を確認 砂粒多量 3混入
26	1	灰黄褐色 砂質 粘性無 しまり良 細粒 3～5cm大小円礫若干混入 茶褐色土粒子多量混入
27	1	黒褐色 上～Ⅶa堆積 中～小礫混黒色土 下位上部一植物繊維を伴う
28	1	黒褐色 砂混粒土 粘性強 細粒
29	1	黒褐色 粘性やや有 細粒
	2	褐色 粗粒 青白色土塊混入
30	1	暗褐色 粘性有 しまり有 若干の炭片を含む
31	1	Ⅶb相当
	1	Ⅶa相当
	2	黒褐色 粘性やや有 しまり良 炭片 微細骨片を含む
	3	黒褐色 粘性やや有り しまり良 極少量の炭片含む
	4	灰褐色 砂質 粘性無 しまり無 混入物なし
	5	灰褐色 砂質 粘性やや有 しまりやや有 黒褐色土混入
	6	黒褐色 粘性有 しまり良 炭片相当量含む 微細骨片含む
33	1	褐・黒色土が細粒の状態で混合
		褐色 粘性無 しまり良 細粒 シルト質を帯る酸化鉄粒混入 黒色土より硬い
		黒色 粘性無 しまり良 細粒 1mm以下の砂粒若干混入
34	1	黒褐色 砂質 粘性有 しまり有 Ⅶa混入 礫少々混入
	2	黒褐色 粘性良 しまり良 炭片極少量含む
	3	黒褐色 粘性良 しまり良 黄褐色粘土混入
35	1	暗褐色 砂質 粘性やや有 しまり良 鉄分多量沈着 白色土粒子混入
	2	暗褐色 粘性1より有 しまり良 若干の炭片含む 1より鉄分沈着少量
	3	暗褐色 (最も暗い) 粘性良 しまり良
36	1	黒褐色 砂質 粘性若干有 しまり良 炭片極少量含む クルミ出土
	2	黒褐色 粘性有 しまり良 黄褐色の粘土塊が多く混入
	3	黒褐色 2より黒い 極少量の炭片含む 縄文土器片出土
37	1	灰褐色 砂質 粘性有 炭化物若干含む
	2	灰褐色 砂質 1cm前後の礫を混入
	3	黒褐色 粘性
	4	黒褐色 粘性有 しまり良 クルミ出土 炭片少量含む

	5	暗褐色 砂質 粘性やや有 しまり良 炭片若干含む
38	1	灰黄褐色 粘性無 しまり良 粗粒 2~5mm大円礫多量混入
	2	黒褐色 粘性有 しまり良 微細粒 ややシルト質 植物遺体含む 酸化鉄若干混入
39	1	黒褐色 粘性有 しまり良 黄褐色粘土粒(5mm前後)全体に混入 細炭片少量含む
40	1	黒褐色 粘性有 しまり良 細粒 植物遺体含む 酸化鉄混入
	2	黒色 粘性やや強 しまり良 細粒 1mm以下の石英(様)粒混入 植物遺体含む 酸化鉄混入
41	1	VII a 相当
	2	灰色 砂混シルト質 しまり良 縄文土器片及び粗砂混入 炭含む
	3	灰オリーブ色 シルト質 礫の堆積と思われる黄灰色シルト質土
	4	灰色 粘土混シルト質 下層基盤の青灰色砂質土の塊混入 小炭片含む
42	1	VII b 相当
	2	VII b 相当
	3	褐灰色 砂質・粘土質構成 炭片多量に含む 上部部分的に粘質土堆積
	4	灰黄褐色 砂質・粘土質構成 黒褐色粘土を含んだ砂質土内よりクミミ出土
43	1	暗褐色 粘性有 しまり良 礫(2~5mm)混入 褐鉄鉱の量多い
	2	黒褐色 粘性特に強 しまり良 少量の炭片含む 1層との境付近に褐鉄鉱多い
44	1	黒褐色 砂質 粘性弱 砂が多く混入
	2	黒褐色 粘性良 しまり良 炭片含む 黄褐色粒子混入
	3	暗褐色 粘性良 しまり良 黄褐色粘土がまばらに入る
45	1	黒褐色 砂質 しまり良 炭多い
	2	暗赤褐色 砂質 しまり良 砂質強 くされ礫混入
	3	暗赤褐色 砂質 礫多い
	4	黒褐色 ビート砂質 しまり良
46	1	砂礫色 VII a が浅く入り込む 多少の土器片を含む
	2	灰黄褐色 礫が塊状に混入 炭化物を含む
	3	黒褐色 粘性有 炭化物を含む
	4	黒褐色 砂質 礫の土が混入 土器片を含む
47	1	黄褐色 粗砂混シルト質 硬くしまる 縄文土器片混入 10cm巨礫含
	2	黄灰色 砂質シルト 粘性強 シルト主体 粗砂包含 炭片含む 縄文土器片・巨礫混入
48	1	黒褐色 粘性無 細粒 灰白色細粒土混入
	2	黒褐色 粘性無 しまり良 細粒 1との境に土器片出土 礫少量混入
	3	黒褐色 灰白色土塊多量混入
49	1	黒褐色
50	1	暗褐色 VI流入土 礫多量混入
	2	暗褐色 VI流入土 シルト質粘土質混入 くされ礫多く混入
	3	暗褐色 しまり有 砂・シルトの互層
	4	黒褐色 しまり有 VI基調の流入土 礫多い
	5	黒褐色 礫多く含む
	6	黒色 粘質多い しまり良
51	1	にぶい黄褐色 VII a 砂礫
	2	灰黄色 砂 粘性有
	3	黒褐色 粘土 砂混じり
52	1	灰黄褐色 しまり良 きめ細く鉄分散
	2	黒褐色 しまり良 きめ細く炭まばらに含む
	3	暗褐色 しまり良 きめ細く鉄分多く混入
	4	黄褐色 地山近似
	1	VII a 相当

53	2	Ⅶb相当
	3	黄灰色 粘土混砂
	4	黄灰色 砂混粘土 炭含む
54	1	Ⅶa相当
	2	オリーブ黒色 砂混シルト質 かくしまる 粗砂混入 炭片含む
	3	オリーブ黒色 シルト質砂 厚さ2~3cm
	4	黒色 細砂混シルト質 中心部は黒色粘土質シルト オリーブ灰・砂・シルト質・細粒砂層の塊多量混入
	5	オリーブ黒色 シルト混砂質 谷壁部隅にあり 粗流砂混入
55	1	礫 Ⅶa基調 風化礫多量
	2	黒褐色 砂シルト質粘土
	3	砂シルト しまり無 砂・シルトの互層
56	1	緑黒色 シルト混粘土質
	2	暗オリーブ灰色 粗粒砂
	3	暗オリーブ灰色 粘土質シルト
	4	オリーブ灰色 細砂混シルト
	5	暗緑灰色 シルト質細粒砂
	6	黒褐色 植物繊維(葉)を多く含む
	7	黒褐色 クミル多量に包含
57	1	暗褐色 砂質 粘性あまり無 しまり有 礫若干混入 褐鉄鉱多く沈着 Ⅶaに相当
	2	暗褐色 砂質 粘性あまり無 しまり有 礫若干混入 褐鉄鉱ほとんどない Ⅶaに相当
	3	暗褐色 砂質 粘性あまり無 しまり有 礫若干混入 褐鉄鉱多く沈着 Ⅶaに相当
	4	黒褐色 砂質 粘性有 しまり有 礫褐鉄鉱の混入無し 5に1が混入か?
	5	黒褐色 粘土 粘性有 しまり有 礫はきわめてわずか混入
	6	黒褐色 粘土 粘性有 しまり有 クミル出土
58	1	灰黄褐色 しまり良 細粒 鉄分散在
	2	褐色 砂質 鉄分特に多量混入
	3	暗褐色 しまり良 細粒 鉄分多量混入
	4	黒色 細粒 炭多量に混入
	5	黒褐色 粘性有 しまり良 細粒 炭まばらに含む
	6	灰黄褐色 粘性特に強 しまり良 細粒
59	1	褐灰色 砂礫 Ⅶa相当
	2	褐灰色 粘性 砂礫混入
	3	黒褐色 粘性有 しまり良 砂を若干混入 クミル出土
	4	黒褐色 粘性有 しまり良 砂礫を混入
	5	黒褐色 粘性土 粘性有 クミル多量に出土
60	1	灰色 砂混粘土質 木炭片多量に含む 縄文土器小片含む
	2	灰色 細砂混シルト質 炭片土器片含む 砂質
	3	暗オリーブ灰色 粘土質シルト質 炭片含む 2より緑色を帯る
	4	暗緑灰色 粘土質シルト質 炭屑片多量に含む 3より黒色を帯る
	5	暗緑灰色 粘土質シルト 礫含む
61	1	褐灰色 粘性無 きめ細 鉄分散在
	2	黒褐色 粘性無 細粒 黄褐色土塊混入
	3	黒褐色 粘性無 細粒 炭・骨を含む 地山塊混入
	4	黄褐色 地山近似
	1	黒色 粘性無 細粒 鉄分少々含む 小中の礫混入
	2	黒褐色 粘性無 細粒 骨片・炭微かに含む 黄褐色塊散る

62	3	黒褐色 粘性やや有 細粒 砂礫かを含む
	4	褐灰色 粘性強 細粒 炭微かを含む
	5	黄褐色 地山近似 黒色土塊若干混
63	1	灰黄褐色 しまり良 細粒 鉄分含
	2	黒褐色 しまり良 細粒 炭まばらに含
	3	暗褐色 しまり良 細粒 鉄分多量含
	4	褐色 砂質 鉄分多量含
	5	黒色 細粒 炭多量を含む
	6	黄褐色 VIIの黄褐色塊である
	7	黒褐色 粘性有 しまり良 細粒 炭まばらに含
	8	灰黄褐色 粘性特に強 しまり良 細粒
64	1	灰褐色 しまり良 細粒 炭が散る
	2	黒褐色 しまり良 細粒 炭まばらに散る
	3	灰黄褐色 やや粘性有 しまり良 細粒
65	1	褐灰色 粘性無 細粒 鉄分散在
	2	黒褐色 粘性無 細粒 黄褐色土塊散在
	3	黒褐色 粘性有 細粒 炭散在 骨片少々散在 地山土塊混入
	4	黄色 地山近似である黒褐色土塊、多少混入
66	1	VIIb相当
	2	褐灰色 砂質粘土質
67	1	褐灰色 酸化鉄混入
	2	褐灰色 黒色を帯る
68	1	灰色 砂質 5mm以下の風化礫片、炭片多量含
	2	暗灰色 粗砂混シルト質 全体に炭片包含 中央部に不連続な粗砂層(3~8cm厚)
	3	オリーブ黒色 粘土混シルト質 均質で炭片を含む VIIb青灰色シルト塊を鑿際で混入
	4	暗緑灰色 粘土混シルト質 4・VIIb・青灰色シルト塊・3とで構成される
69	1	黒褐色 砂質 粘性無 しまり良 細粒 2~4cm大の小円礫混入
	2	黒褐色 砂質 粘性無 しまり良 細粒 2~4cm大の小円礫混入、木炭多量に含
70	1	褐色 粘土混砂質
	2	黒褐色 砂混粘土 木炭含
	3	黒褐色 粘土質 木炭含 VIIシルト混、礫出土
	4	黒色 粘土質 VIIシルト混 大礫混入
71	1	黄灰色 砂質粘土 VII混入
	2	黄灰色 砂質粘土 粘性強 しまり良い 炭片含む
	3	黄灰色 シルト質粘土 炭片含む
	4	灰色 砂混粘土質
	5	オリーブ黒色 砂混粘土質 腐植片を混入
	6	オリーブ黒色
72	1	黄灰色 小礫混砂質 少量の炭片含む 3cm前後の礫と縄文土器片を含む粗砂主体
	2	灰色 礫混 シルト・砂混合 炭片含む 粘性を帯びるシルト質土中に粗砂混入
	3	灰オリーブ色 粗粒砂 底部から土器片出土 単独の砂層
	4	オリーブ黒色 シルト・砂・混合 4より下層で土器片及び礫が多量に混入
	5	青灰色 砂+オリーブ黒の混り
	6	黒褐色
73	1	黄褐色 砂質粘土
	2	黄灰色 砂質粘土 1より粘性強
	3	黄褐色 シルト混粘土 木炭片及び骨片多数

	4	灰色 砂混粘土 巨礫を包含 上部層部より注口土器出土
	5	オリーブ黒色 粘土・砂・シルトにより構成 粘性有 しまり良 4の緑灰色斑入る
	6	オリーブ黒色 粘土・砂・シルトにより構成 粘性有 しまり良 炭多く含む 腐植物多く含む
74	1	黒色 粘性無 細粒
	2	灰黄褐色 やや粘性有 しまり良 細粒 鉄分まばらに含む
	3	黒褐色 粘性特に強 しまり良 細粒
75	1	灰褐色 粘土質 粘性有
	2	灰黄色 砂質 粘土混じり
76	1	VI
	2	VII a
	3	VII b
	4	黒褐色 シルト質 白色シルト土が塊状に混入、土器片包含
	5	黒褐色 シルト質 白色シルト土が塊状に混入
	6	黒褐色 シルト質 ビート質IXと礫の土塊混り
	7	黒褐色 砂礫混
	8	黄褐色 しまり良 VII黄褐色土塊で構成される クルミ包含
77	1	VII a 相当
	2	灰黄褐色 粘土質 粗粒砂 炭粒を含む 巨礫混入
	3	によい黄褐色 砂・シルト・粘土 3に似るがVIIを多量に混入
	4	黒褐色 シルト・砂・混合 黒灰色
	5	黒褐色 粘土 粗粒砂・クルミ・炭片を多量に含む。腐植物混入
78	1	VII a 相当
	2	黒褐色 しまり良 鉄分有 3との境に炭化物帯状に入る 白色粘質土混入は3より少ない
	3	黒褐色 シルト質砂質 しまり良 鉄分有 白色シルト質土塊混入
	4	黒褐色 シルト質砂質 陶土よい粘土 炭化物多く含む 2より明るい
	5	VII b 崩落土
	6	褐灰色 シルト質 3近似の黒褐色土が帯状・塊状に互層をなす 3・4の境に樹皮出土
	7	黒褐色 砂質 粘性有
	8	黒褐色 砂質 粘性有 しまりあり 炭化物含 5層より細粒 クルミ出土
	9	黒褐色 砂質 6と基本的に同層 しまりは6より弱い
	10	黒褐色 砂質 5・6・7と比較して砂質 粘質は強い

土 坑

遺構番号	層	説	明
1	1	黒色 礫混シルト質 炭片多量含む 土師器片含む	
	2	黒褐色 礫粗砂混シルト質 酸化し1より褐色帯る 1~6 cm大の礫多量に含む 縄文土器片含む 縄文時代の埋土と思われる	
	3	褐灰色 シルト混砂質 小礫粗粒砂で構成される 底部の巨礫を包含 縄文土器片出土	
2	1	灰褐色 礫混砂	
	2	褐色 砂礫 硬くしまる 礫が多く混入	
3	1	VII b 相当	
4	1	黒褐色 粘性無 細粒 黄褐色ブロックがまばらに混入	
	2	黄褐色 粘性強 細粒 黒色ブロックがまばらに混入	
5	1	黒褐色 粘性無 細粒 黄褐色ブロックまばらに散る	
	2	黄褐色 粘性強 細粒 黒色ブロックまばらに散る	
6	1	黒褐色 粘性無 細粒 黄褐色ブロックがまばらに混入	
	2	黄褐色 粘性強 細粒 黒色ブロックがまばらに混入	
7	1	黒褐色 粘性無 細粒 黄褐色ブロックがまばらに混入	

	2	黄褐色 粘性強 細粒 黒色ブロックがまばらに混入
8	1	黒褐色 粘性無 細粒 黄褐色ブロックがまばらに混入
	2	黄褐色 粘性強 細粒 黒色ブロックがまばらに混入
9	1	灰褐色 粘性若干有 細粒 しまり良 地山塊若干混入
	2	黒褐色 粘性強 細粒 しまり良 砂粒 (1mm大) 極少量混入
10	1	黒褐色 粘性無 細粒
	2	黄褐色 粘性強 細粒
11	1	黒褐色 粘性無 細粒
	2	黄褐色 粘性強 細粒
12	1	VIIa相当
	2	黒褐色 粘性有 しまり良 極少の炭を含む 黄褐色 (3~5mm) 粒子混入
13	1	黒褐色 粘性無 細粒 黄褐色ブロックがまばらに混入
	2	黄褐色 粘性強 細粒 黒色ブロックがまばらに混入
14	1	黒褐色 粘性無 細粒 黄褐色ブロックまばらに混入
	2	黄褐色 粘性強 細粒 黒色ブロックまばらに混入
15	1	黒褐色 粘性無 細粒 黄褐色ブロックまばらに混入
	2	黄褐色 粘性強 細粒 黒色ブロックまばらに混入
16	1	黒褐色 粘性無 細粒 しまり良 小円礫 (2~3cm大) を若干混入
17	1	黒褐色 粘性無 細粒 しまり良
	2	黒色 粘性弱 細粒 しまり不良
	3	黒褐色 粘性強 しまり不良 礫 (5cm以下) を含む細粒
	4	硬りすぎ
18	1	明黄褐色 砂質シルト 斑点状の鉄の集積あり 土器片あり
	2	褐灰色 粘性弱 マンガン沈殿 酸化鉄を含んだ砂質土混
	3	黒褐色 シルト質 粘性大 炭化物片少々含む
	4	暗褐色 砂質シルト主体 酸化鉄により団結
	5	褐灰色 シルト・砂混粘土質主体 部分的に鉄が集積し団結
	6	灰色 シルト混粘土質主体 骨片含む
	7	灰色 シルト混粘土質主体 均質で炭粒子・骨片を含む
19	1	黒褐色
20	1	褐灰色 粘土質 粘性有 しまり良 砂粒混 炭片多量含有 焼土若干含有
21	1	黒褐色 しまり弱 土器片混入 V b 近似
	2	黒色 しまり良 細粒砂 礫混入
22	1	黒褐色

水さらし場状況

遺構番号	層	説	明
	1	褐色 砂質が中心でわずかに礫が混入	
	2	褐色 粘性有 礫の混入	
	3	灰白色 かなり大きな礫が混入	
	4	砂礫	
	5	灰白色 粘土質	
	6	黒褐色 土器器出土	
	7	砂礫 直径30cm大礫混入 縄文土器片・土器器多数出土	
	8	黒褐色 粘性強く炭化物・縄文土器片出土	
	9	黒褐色 植物遺体・礫出土	
	10	黒褐色 植物遺体・礫出土	
	11	砂礫	

12	灰白色 粘土混 砂礫・炭片・縄文土器片を多量に含む
13	褐色 砂混 シルト質 微細な腐植片が多数混入 炭片・土器片・板様の木片をはさむ 径20cm大礫及び少数の礫含む
14	黒褐色 液物遺体・炭化物・縄文土器片出土
15	黒褐色 植物遺体・炭化物・縄文土器片出土
16	黒褐色 粘性強 礫出土
17	灰白色 粘土質
18	黒褐色 19の中に茶褐色土が混入している
19	黒褐色 ビート質
20	黒褐色 粘性の強い灰白色土が混入している
21	黄褐色 粘性良くしまっている
22	砂礫

土器埋設土坑

遺構番号	層	説	明
1	1	暗褐色 しまり良 骨片・骨粉含む 焼土塊散在	
	2	暗褐色 骨片・骨粉含む 焼土塊散在	
	3	明褐色 3と暗褐色構成 骨粉散在	
	4	暗褐色 褐色強い 炭化粒多含 骨片含	
	5	地山塊 しまり良 炭粒なし	
	6	暗褐色 粘性有 しまりあり 炭化物多混 骨片多	
	7	地山+暗褐色土 しまり良 骨片・炭なし	
2	1	攪乱土	
	2	暗褐色 しまりない 5mm大の礫含む	
	3	明暗褐色 しまり良 焼土粒多含 炭粒・骨粉含む	
	4	明暗褐色 炭化粒多含	
	5	黄色	
3		覆土なし	
4		覆土なし	

弥生時代中期 (A・B区)

住居址

遺構番号	層	説	明
1	1	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまりやや不良 5cm大の円礫を含む 1~5mm大の砂粒・小礫を含む	
	2	黒褐色 粘性やや有 粒子細 しまり良 土器片を多く含む 黄褐色の粒子を含む	
2	1	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまり良 砂粒・小礫粒を含む	
	2	貼床と考えられる床面	
	3	基盤層 (地山層)	
	4	焼土	
	5	耕作土	
3	1	黒褐色 粘性無 粒子細 しまりやや不良 2cm大の円礫を含む	
	2	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 1cm大の円礫を少量含む 土器片を含む	
4	1	黒色 粘性有 粒子細 しまり不良 やや砂粒を含む	
	2	黒褐色 粘性やや有 粒子細 しまりやや不良 1mm大の砂粒を含む 1~2cm大の小円礫を含む	
	3	燻煙にともなう攪乱層	
5	1	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまり良 5~10cm大の円礫を含む	
	2	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまり良 5~10cm大の円礫を含む 5mm大の白黄色土の粒子を多く含む	
6	1	黒色 粘性無 粒子細 しまり良 10cm大の円礫を含む 5mm大の小礫粒を多く含む 黄褐色土の粒子を含む	

	2	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 5mm大の小礫粒をやや含む 黄褐色のブロックを含む
7	1	黒色 粘性有 粒子細 しまり良 5~10cm大の円礫を含む
	2	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 5cm大の円礫を含む
8	1	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまりやや不良 5~15cm大の円礫を含む
	2	黒褐色 粘性有 粒子細 しまり良
9	1	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまり良 1~2cm大の大円礫を含む
10	1	黒褐色 粘性無 粒子やや粗 しまり良
	2	黒褐色 粘性無 粒子やや粗 しまり良 黄褐色土のブロックを含む
	3	擾乱層
11	1	黒色 粘性無 粒子細 しまり良 1~5cm大の円礫を含む
	2	暗褐色 粘性やや有 粒子細 しまり良 2cm大の円礫を含む
12	1	覆土 確認できず
13	1	擾乱層
	2	黒褐色 粘性無 粒子やや粗 しまり良 1cm大の円礫を含む
	3	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良
	4	暗赤褐色 粘性無 粒子細 しまり良
14	1	黒色 粘性無 粒子粗 しまり良 砂粒を含む
	2	暗褐色 粘性無 粒子細 しまり良 砂粒を若干含む
15	1	表土
	2	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまり良 5~10cm大の円礫を含む
16	2	黒色 粘性無 粒子細 しまり良 5cm大の円礫を含む
	3	黒色 粘性無 粒子細 しまり良 砂粒を若干含む
	4	黒褐色 粘性無 粒子やや粗 しまり良
	1	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良
18	1	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 1cm大の小礫を若干含む
	2	暗褐色 粘性無 粒子細 しまり良
	3	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまり良 1~2mm大の砂粒を含む
	4	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 5mm大の黄色土のブロックを多量に含む
19	1	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 1~5cm大の円礫を多く含む
20	1	黒褐色土 粘性無 粒子細 しまり良 炭化物含

土 坑

遺構番号	層	説	明
23	1	黒褐色 やや粘質の砂質土 小礫混入 開口部付近しまりない	
	2	黒色 赤褐色の粒子含む 緻密	
24	1	黒色 緻密	
	2	黒色 黄色気味がかかる	
	3	黒色 黄色土粒子を含む	
25	1	黒色 黄色土粒子を含む	
	2	黄色 褐色土粒子を混入する	
	3	黒色	
26	1	黒色 砂質 黄褐色土が底に薄く認められた	
27	1	黒色 粘性無 粒子細 しまり良 1~5cm大の白黄色ブロックが混ざる	
	2	黒色 粘性有 粒子細 しまり良 5cm大の円礫を若干含む	
28	1	黒褐色 粘性無 粒子やや粗 しまり良 0.5cm~1cm大の小礫を多く含む	
	2	黒色 粘性無 粒子細 しまり良 小礫等をわずかに含む	
	3	褐色 粘性無 粒子細 しまり良 基盤(地山)層	
29	1	黒色 粘性やや有 粒子細 しまり良 1mm大の砂粒を含む	
	2	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまり良 5mm大の白黄色土粒子含む	

	3	灰黄褐色 粘性やや有 粒子微細 しまり良 やや褐色をおび、ブロック状の土が混じる
30	1	黒色 粘性無 粒子細 しまり良 2-5cm大の円礫を含む
	1'	黒色 粘性無 粒子細 しまり不良 2-5cm大の円礫含む 擾乱層と思われる
31		不明
32	1	黒褐色 粘性無 粒子粗 しまり良 砂粒1-2cm大の小礫を極少量含む
	2	黒褐色 粘性やや有 粒子細 しまり良 1cm大の小円礫を含む
	3	黒褐色 粘性やや有 粒子細 しまり不良 1cm大の小円礫を含む

円形周溝

遺構番号	層	説	明
1	1	黒褐色 粘性無 粒子微細 しまりやや不良	若干量の砂粒(1mm大)・5mm大の小石を極少量含む

弥生時代中期 (D・E区)

土 坑

遺構番号	層	説	明
33	1	褐灰色 しまり良	
	2	黒褐色 鉄分多量含む 炭化物含む	
	3	黒色 粘性有 暗褐色土少量 炭化物多量を含む	
	4	黒褐色 褐色土・黒色土混入	
	5	黒褐色 褐色土・黒色土混入	
34	1	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 炭化物若干含む 茶色が強い	
	2	褐色 粘性無 鉄分多く含むが3より少ない 炭化物若干含む	
	3	黒褐色 炭化物一番多く入る 灰色が強く鉄分多く含まれる	
35	1	黒褐色 粘性あまり無 非常にしまり良 炭化物多く含む	
36	1	暗褐色 粘性無 しまり無 炭化物多量含 底部から土器を出土	
	2	暗褐色 粘質 しまり良 鉄分多い	
	3	暗褐色 粘質 しまり良 地山黄褐色土多量混入	
	4	暗褐色 しまり弱 鉄分多量 赤色ブロック多量土中に水分浸透による間ケギが小さく入る	
	5	鉄分を多く含む砂層	
	6	鉄分集積	
37	1	褐色 粘性弱い 砂質 土器片含まない 地山の土が混入する	
38	1	黒褐色 粘性無 2より粒子細 しまり良 炭化物含む(2より少量)	
	2	黒褐色 粒子粗 炭化物多く含む	
39	1	擾乱土	
	2	黒褐色 粘性無 粘土混シルト質 しまり無 重なりあった土器片の間に満たす(遺物包含層)	
	3	黒褐色 粘土混シルト質 基盤の黄褐色土が全体にしみこむ様に混入 2より少ないが遺物混入	
	4	黒色 粘土混シルト質 基盤の黄褐色土が塊で混入 土器の混入少ない	
	5	黒色 シルト混粘土質 基盤の黄褐色土筋状に入る 土器破片混入	
40	1	黒褐色 細粒砂混シルト質 炭粒子多く含む 土器破片含む	
	2	黄灰色 細粒砂混シルト質 1より黒土減る 土器破片多く含む 鉄の点状集積	
	3	黄灰色 細粒砂混シルト質 2と同質 土器片多量包含	
	4	褐灰色 細粒砂混シルト質 酸化鉄 点状集積 明黄褐色土点在	
	5	黒褐色 シルト混粘土質 土器片多量に混入	
	6	褐灰色 粘土質シルト 基盤明黄褐色土中心の薄層	
	7	黒色 シルト質粘土 基盤土の塊をブロック状にはさむ 土器片を含む 炭多量を含む	
41	1	3と同質	
	2	黒褐色 粘土質シルト IVとほぼ同質で粘性に富む 土器・炭を含む	
	3	暗灰黄色 砂質シルト IV・Vの流れ込みにより構成されその間に灰色粘土層が薄く入る	
	4	暗灰黄色 粘土質シルト 灰色粘土質土・IV・Vの混合である 炭片を含む	

	5	暗灰黄色 砂質シルト IV・Vの流れ込みにより構成その間に灰色粘土質層が薄く入る
42	1	黒褐色 やや粘性有 粒子細 非常にしまり
	2	褐灰色 粘性有 粒子細 しまり良 炭まばらに含む
	3	黒褐色 非常に粘性有 粒子細 しまり良
43	1	暗赤色 砂混 鉄分多 赤味の強い土 黒褐色土が塊状に入る
44	1	耕作土
	2	黒褐色 1と黄色の混入土(埋め戻し土)
45	1	耕作土
	2	黒褐色 1と黄色の混入土(埋め戻し土)
46	1	黄灰色 かなり砂っぽいが粘性の強い土も含まれる
	2	礫相土
47	1	黒褐色
48	1	褐色 しまり良 炭化物含む
49	1	黒色 炭多量に含む
50	1	黒色 非常に粘性有 鉄分多量に含む 礫はなし
	2	灰色 粘性1より弱い砂質 鉄分の塊が広くみられる 土器片・礫は含まない
51	1	褐色灰色 しまり良 鉄分・炭化物含む 炭土はなし
	2	黄灰色 1より茶色がかかる 粘りがある 炭化物はあるが焼土はなし
52	1	褐色灰色
53	1	黒色
54	1	攪乱土 細砂混シルト質 均質で酸化鉄の斑点状集積 下部ほど黒みがかかる
55	1	黒褐色 粒子細 しまり良 下層に黄砂混入
56	1	暗褐色
57	1	黒褐色 粘性無 粒子細 非常にしまり 鉄分散る
	2	黒褐色 粘性有 粒子細 炭がまばらに散る
	3	灰黄褐色 やや粘性有 粒子細 非常に炭が散る
58	1	暗褐色
59	1	黒褐色

弥生時代後期

住居址

遺構番号	層	説	明
21	1	黒色 粘質性 2cm大の礫3%混 におい黄褐色のこまかい砂レキが斑点状に混入	
22	1	黒色 粘性やや有 粒子やや粗 しまり良 3~7cm大の円礫を含む	
	2	黒褐色 粘性有 粒子細 しまりやや不良 5cm大の円礫を若干含む	
23		不明	
24	1	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 5mm大の白黄色土の粒子を多く含む	
	2	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 炭化物(木炭)の粒子を多量に含む	
	3	暗褐色 粘性無 粒子粗 しまり良 5mm大の小礫を若干含む	
25	1	黒色 粘性無 粒子細 しまり良 5mm大の白黄色土の粒子を含む 砂粒を若干含む	
	2	黒褐色 粘性やや有 粒子細 しまり良 炭化物(木炭)の粒子を若干含む	
	3	表土	
	4	黒色 粘性有 粒子細 しまり良(木根か?)	
26	1	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 1~2cm大の小礫粒を含む	
	2	黒褐色 粘性無 粒子細 しまりやや不良 1cm大の円礫を含む	
	3	攪乱層	
	1	黒色 粘性無 粒子細 しまりやや不良	

27	2	黒褐色 粘性有 粒子細 しまり良
	3	黒褐色 (褐色のブロック含む) 粘性有 粒子細 しまり良
	4	攪乱
28	1	黒色 粘性有 粒子細い しまり良
	2	黒褐色 粘性有 粒子細い しまり良
29	1	黒色 粘性若干有 粒子細 しまり良 1~2cm大の小礫を若干含む
	2	黒褐色 粘性やや有 粒子細 しまり良 1~2cm大の小礫を若干含む
30	1	黒色
	2	黒色 礫のブロックを含む 上面やや硬い 粘床と考える
	3	黒色 しまりあり

古墳時代前期

住居址

遺構番号	層	説	明
31	1	黒褐色 密 しまり良 中礫・極粗砂を含む	
	2	黒褐色 粘性やや有 密 しまり良 中礫・極粗砂を含む	
	3	黒色 粘性有 可塑性小 しまり良 密 中礫・極粗砂を含む	
	4	黒色 粘性有 可塑性有 しまり良 密 中礫・極粗砂を含む	
	5	黒褐色 粘性有 可塑性有 しまり良 密 中礫・極粗砂を含む	
32		不明	
33	1	黒褐色 砂質 ボロボロした感じ 岩石の崩解した細粒 前面に分布	
	2	によい黄褐色 砂質	
	3	黒色 やわらか しめり気あり	

古墳時代中期

住居址

遺構番号	層	説	明
34	1	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまり良	
	2	黒褐色 粘性有 粒子細 しまり良	
	3	黒褐色 粘性有 粒子細 しまり良	
35	1	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまりやや不良	
	2	黒褐色 粘性有 粒子細 しまり良	
	3	黒褐色 (黄褐色土ブロック含む) 粘性あり 粒子細い しまり良	
36	1	黒色 粘性やや有 粒子細 しまり良 1~2cm大の小礫を含む	
	2	黒褐色 粘性有 粒子細 しまり良 1~3cm大の小礫を若干含む	
37	1	黒色 粘性無 粒子細 しまり良 1~2cmの小円礫を含む 土器片を含む	
	2	暗褐色 粘性無 粒子細 しまり良 黄色土の粒子を含む	
	3	黒褐色 粘性無 粒子微細 しまり不良 1cm大の円礫を含む	
38	1	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 1cm大の小礫を若干含む	
	2	暗褐色 粘性無 粒子細 しまり良	
	3	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまり良 1~2cm大の砂粒を含む	
	4	黒褐色 粘性無 粒子粗 しまり良 5mm大の黄色土のブロックを多量に含む	
	5	黒褐色 粘性わずかに有 粒子細 しまり良 炭化物 (木炭) を少量含む	
	6	黒褐色 粘性無 粒子粗 しまり良 炭化物 (木炭) と焼土を多量に含む	
39	1	黒色 粘性有 粒子細 しまり良 3~7cm大の円礫を含む 1mm大の砂粒を含む	
	2	黒褐色 粘性有 粒子やや粗 しまり良 1mmの砂粒を含む 5~8cm大の円礫を若干含む	
40	1	攪乱層	
	2	黒褐色 粘性無 粒子粗 しまり良 2~5cm大の円礫を含む	

41	1	黒色 粘性無 粒子細 しまり良 小礫を少量含む
	2	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良
42	1	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 2cm大の円礫を含む
43	1	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良 円礫を含む

平安時代
住居址

遺構番号	層	説	明
44	1	黒色 粘性無 粒子やや粗 しまり良	
	2	黒褐色 粘性有 粒子細 しまり良 炭化物の粒子を含む	
	3	黒褐色 粘性無 粒子細 しまり良	
45		不明	
46	1	黒色 しまり良	
47	1	黒色 砂礫含む	
	2	黄褐色 小礫含む	
	3	暗黄色 砂質	
	4	黒色 しまり良	
	5	黒褐色 しまり良	
48	1	黒色 粘性無 粒子やや粗	
	2	黒褐色 粘性有 粒子細	
	3	黒褐色 黄色ブロック含む 粘性有 粒子細い	
49	1	黒色 粘性無 粒子やや粗	
	2	黒褐色 粘性有 粒子細	

土師器焼成遺構

遺構番号	層	説	明
1	1	黒褐色 焼土多量に含む	
2	1	黒褐色 焼土塊一部で確認	
3	1	暗褐色 2cm前後の焼土塊・炭が多量に含まれる	
	2	暗褐色 1と同様であるが焼土・炭は全く無	
	3	褐色	
	4	暗褐色 黄褐色土が塊状に入る 炭含まれるか1層より少い	
	5	黒褐色 黄褐色土が若干入る	

土 坑

遺構番号	層	説	明
1	1	黒褐色 しまり良 炭粒含	
	2	擾乱土	
2	1	暗褐色 しまり無 炭粒等無	
3	1	黄褐色 若干しまり無 焼土粒若干含 VIII近似	
4~9	1	暗赤褐色	
10	1	黒褐色 粘性弱 しまり良 炭片若干含	
11	1	黒褐色 黄褐色粘土塊多量混入	
	2	暗褐色	
	3	黒褐色 1より明るい 2と同じ黄褐色土若干混入 炭片若干含 1より少量	
	4	黒褐色 粘性有 しまり良 1より暗い	

溝

遺構番号	層	説	明
2	1	黒褐色 しまり弱 細い炭片 黄褐色土若干混入	
3~5	1	灰褐色 粘性強	

6	1	黒褐色土 (粘性無 しまり良) と黄褐色土 (粘性無 しまり良) との互層により構成
7	1	黒褐色 粘性有 ややしまり良 黄褐色土まばらに混入
8	1	黒褐色

中世
土坑

遺構番号	層	説	明
1	1	黒暗褐色 粘土質 しまり良	
	2	黒暗褐色 鉄分集積 2mm大礫混入	
	3	黒暗褐色 グライ (化) 色混い	
2	1	黒褐色 砂質 VI土塊混	
3	1	黒褐色 粘性無 粒子細 VI塊混	
4	1	褐灰色 粘土質 しまり良 炭粒微量含有 底に鉄分斑確認	
5	1	褐灰色 粘土質 しまり良	
6	1	暗褐色 しまり無 鉄分マンガン集積 鉄製品出土	
	2	暗褐色 しまり無 1より茶が強い	
	3	暗褐色 しまり無 粗粒砂	
	4	暗褐色 しまり無	
7	1	黒褐色 白色シルトがまばらに混入 炭塊含 焼土まばらに含む	
	2	黒色 砂質粘土 しまり有 細い炭を含む 白色シルト混入	
8	1	暗赤褐色 粘性無 礫混入せず 鉄分含	
9	1	にぶい黄褐色 しまり良 細粒砂	
	2	黒褐色 細粒砂 鉄分斑文多	
10	1	暗赤褐色 粘性無	
	2	黒褐色 鉄分含 細粒砂	
11	1	暗褐色	
12	1	黒褐色	
13	1	黒暗褐色 粘質 しまり良	
14	1	暗褐色 粘性無 鉄分含	
15	1	暗赤褐色 粘性無 礫混入無 鉄分含み赤味帯る	
16	1	褐灰色 粘土質 しまり良	
17	1	褐色 粘質 しまり良 灰色強い 黄褐色土塊20%混入	
	2	褐色 粘質 しまり良 灰色強い 黄褐色土塊40%混入	
	3	橙色 粘質	
	4	橙色 明褐色土主体 3より砂の混入が多い	
	5	褐色 粘土質 しまり良 灰色やや強い 黄褐色土塊20% 砂10%混入	
	6	褐色 粘土質 砂50%混入	
18	1	褐色	
	2	褐色 粘性有 炭化物含 白色塊と1で構成される	
	3	黒褐色 粘性無 細粒 1は混入しない	
	4	黒褐色 粘性有 白色土がシマ状に混入	
	5	褐灰色 粘性有 白色土に1が混入	
	6	にぶい黄褐色 粘性有 白色土と同一と考えられる	
	7	灰黄色 粘性有 白色塊と1で構成される	
19	1	黒褐色 粘質 しまり良 VIIブロック混入	
	2	赤黒色 粘質 しまりやや良 下部に砂礫を伴う	
20	1	暗赤褐色 粘性の黒色粘土がブロック状で混入	
	1	黒褐色 粘性有 しまり良 2~3mmの黄褐色土粒多量混入 焼土粒・炭片多く含む	

21	2	黒褐色 粘性有	しまり良	粘土がまだら状に混入	炭片若干含む
	3	黒褐色 粘性有	しまり良	焼土	炭片を全く含まない
	4	紫黒色 粘性有	しまり良	植物質繊維多く含む	水分多量に含む
	5	黒褐色 粘性有		粘土がマーブル状に混入	焼土粒わずかに含む
	6	暗褐色 粘性有	しまり良	粘土がかなり混入する	
	22	1	V区に相当		
23	1	黒褐色	粘質微かに硬い	黄褐色粘質土塊混入	径5～10mmの礫混入
	2	黒褐色	細粒砂	黄褐色粘質土塊混入	1との境に径2cm大砂礫層あり
	3	黒褐色	細粒砂	灰色が強い	2より黄褐色粘質土が少ない
	4	にぶい黄褐色	粘質	しまり無	地山ビート層の混入
	5	にぶい黄褐色	粘質	しまり無	地山ビート層の混入
	6	黒褐色	粘性無	しまり無	細粒砂
24	1	暗褐色			
	2	暗褐色 (埋め戻し土)			
	3	緑灰色			
25	1	黒色			

溝

遺構番号	層	説	明		
13・14・15	IVa ₁	砂質粘土 粗粒砂混入と砂礫層			
16・17	1	シルト質砂	細粒砂で構成	酸化鉄点在	
	2	シルト質砂	細粒砂で構成	しまりあり	炭粒子
	3	シルト質砂	細粒砂で構成	粘土混入	酸化鉄塊及びシルト混入
	4	シルト質砂	酸化鉄により固化したシルト塊	・明黄褐色のシルト塊で構成	
	5	砂質シルト	中央部はシルト及び粘土が多くしまる	壁際ほど砂質になる	
	6	粘土・シルト混合			
18・19・20	1	黒褐色 粘性無	粒子細	しまりあり	褐色土粒子混入
21	1	褐灰色	小礫混シルト質粘土質	管状鉄集積	
	2	灰黄褐色	小礫混入シルト質粘土質	シルト分多	褐色を呈す
	3	にぶい黄褐色 粘土質シルト質			
	4	灰黄褐色	褐色粘土の塊	1と同質の粘質土の混合層	
	5	灰黄褐色	シルト質粘土	地山土を混入	
	6	灰黄褐色	粘土質シルト	4土塊混入	
22	1	暗赤褐色			
23	1	暗赤褐色			
26	1	暗赤褐色			
27	1	砂質粘土 (グライ化)			

畝

遺構番号	層	説	明
1	1	暗褐色	

七瀬遺跡遺構覆土説明

弥生時代中期

住居址

遺構番号	層	説	明			
1	1	黒褐色 粘性無	細粒子	しまり良	黄褐色ブロック含	4～5cm大の礫若干含む
2	1	黒褐色 粘性有				
	2	黒褐色 粘性有	細粒子	しまり良	砂粒含	灰白色シルトブロック含

土 坑

遺構番号	層	説	明
1	1	黒色 粘性強 微細粒子 しまり良 灰白色シルトブロック含	
2・3	1	黒色 粘性強 微細粒子 しまり良 砂粒含	
	2	明褐色 砂層	
	3	黒色 粘性強 微細粒子 しまり良	
	4	黄褐色 灰白色シルトブロック多含	
	5	黒色 粘性やや強 微細粒子 しまりやや良	
	6	黄褐色 灰白色シルトブロック若干含	
4	1	黒色 粘性強 微細粒子 しまり良	
	2	黄褐色 灰白色シルトブロック多含	

溝

遺構番号	層	説	明
2	1	黒色 粘性有 細粒子 しまり良 砂ブロック含	
	2	黒色 粘性無 細粒子 しまり良 (砂層)	
	3	黒褐色 粘性有 細粒子 しまり良 (粘質土層)	
	4	黒色 粘性有 細粒子 しまり良 (粘質土層)	

弥生時代後期

住居址

遺構番号	層	説	明
3	1	黒褐色土 粘性有 細粒子 しまり良 炭化物多含	
	2	黒褐色土 粘性有 細粒子 しまり良 炭化物少含	
	3	灰褐色土 粘性有 灰白色シルトブロック多含	
4	1	黒褐色 粘性有 細粒子 しまり良 極少量の砂粒含	
	2	黒褐色 厚さ約5cmの炭化物層	
5・6・7	1	黒褐色 粘性無 細粒子 5~20cm大の円礫含	
	2	極暗赤褐色 焼土層	
	3	赤黒色 炭化物層	
8	1	黒褐色 粘性無 細粒子 5~20cm大の円礫含	
9	1	黒褐色 粘性無 細粒子 5~20cm大の円礫含	
11	1	黒色 粘性無 密 1~5cm大の砂粒多含	
	2	黒色 粘性無 密 土礫片含 0.5~1cm大の小礫粒含	
	3	黒褐色 粘性無 密 土礫片含 5cm大の礫、1cm弱の小礫粒含	
	4	黒褐色 粘性無 密 炭化物含 0.5~1cm大の小礫粒含 (第16号住居址の覆土)	
	5	にふい褐色 粘性無 1cm大の黄褐色ブロック含 5~10cm大の礫含 (第16号住居址の床面)	
12	1	黒色 粘性無 密 1~5mm大の砂粒多含	
	2	暗褐色 粘性無 粗粒子 砂粒含 5~20cm大の円礫多含	
	3	黒褐色 粘性無 細粒子 5cm大の円礫少量含	
	4	黒色 粘性無 密 土礫片含 0.5~1cm大の小礫粒含	
13	1	黒色 粘性無 細粒子 小礫を微量含む	
14	1	黒褐色 細粒子 大小の礫含	
15	1	黒褐色 細粒子 しまりやや良 小礫を若干含む	
16	1	黒色 粘性無 密 5mm以下の黄色粒子多含 2~5cm大の円礫含	
	2	黒褐色 粘性無 密 2~5cm大の円礫含	
	3	暗褐色 上層より細粒子 しまり悪 大小の礫含	
	4	黒色 粘性有 しまり無 砂粒微量含	
	5	黒褐色 粘性無 密 大小の礫を多く含む	

17	1	黒褐色 粘性無 細粒子 5cm大の礫含
	2	黒褐色 粘性無 細粒子 5~10cm大の円礫含
	3	黒褐色 粘性やや有 やや粗粒子 土器片や5~10cm大の円礫含
	4	黒褐色 粘性やや有 やや粗粒子
	5	黒褐色 粘性無 やや粗粒子 土器片含
	6	暗褐色 粘性やや有 やや粗粒子
	7	暗褐色 粘性有 細粒子 石粒含
	8	黒褐色 粘性無 細粒子 小中礫を若干含む

土 坑

遺構番号	層	説	明
6	1	黒色 粘性有 細粒子 しまり良 5cm大の礫を若干含む	
7	1	暗褐色 粘性有 細粒子 しまり悪	
8	1	暗赤褐色 粘性有 細粒子 しまり悪 第7号土坑の覆土と同一(第7号土坑より礫多い)	
9	1	黒褐色 細粒子 しまり悪 黄褐色や赤褐色ブロックを微量含む	

谷状地形

遺構番号	層	説	明
	1	灰褐色 細粒子 しまり悪 混入物なし 灰に近い	
	2	赤褐色 細粒子 しまり悪 焼土に近い 焼土ブロック(?)を多含	
	3	黒褐色 粘性有 細粒子 しまり良 小・中の礫含 土器包含層	
	4	黒褐色 粗粒子 しまり良 小礫粒(3mm以下)を多含	
	5	黒褐色 粘性強 細粒子 大礫を多含	

写 真 図 版
(P L)

PL.1 (栗林遺跡)

A区



PL. 2



D区



E区

PL.3 (栗林遺跡)



F区(1次)



F区(2次)

PL.4



F区(2次)



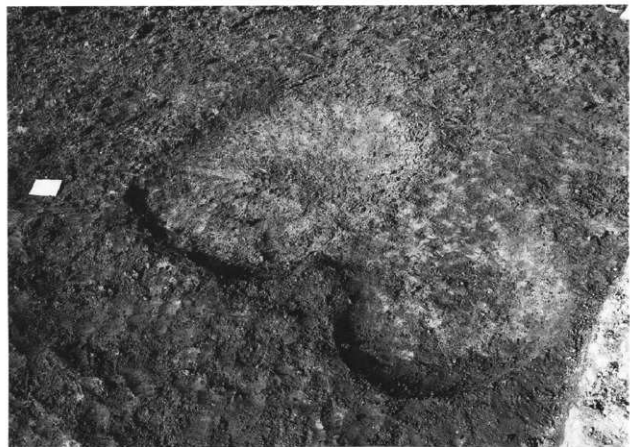
F区(2次)



PL. 6



旧石器時代



第1号・31号貯蔵穴



第7号 貯藏穴



第8号 貯藏穴



第10号 貯藏穴



第12号 貯藏穴



第15号 貯藏穴



第15号 貯藏穴



第18号 貯藏穴



第18号 貯藏穴



第19号・22号・27号・50号 貯藏穴全景



第20号 貯藏穴



第21号 貯藏穴



第23号 貯藏穴



第24号 貯藏穴



第27号 貯藏穴



第30号 貯藏穴



第37号 貯藏穴



第38号 貯藏穴



第39号 貯藏穴



第40号 貯藏穴



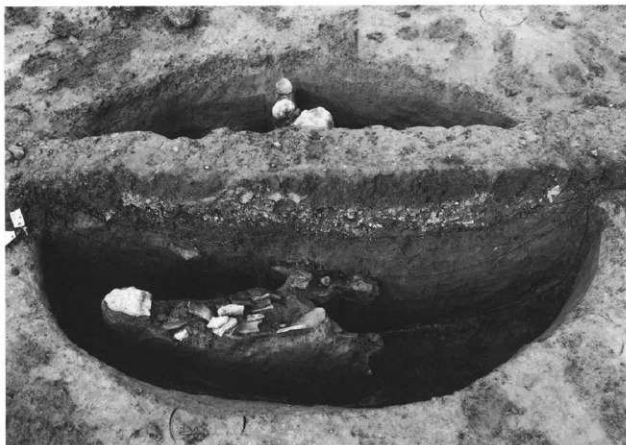
第42号 貯藏穴



第46号 貯蔵穴



第49号 貯蔵穴



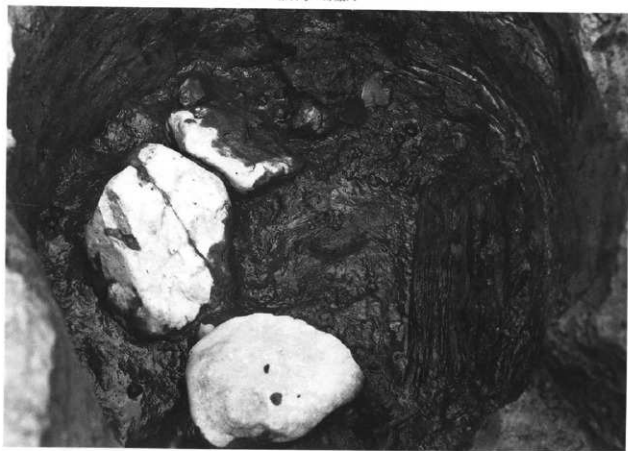
第51号 貯藏穴



第52号 貯藏穴



第56号 貯藏穴



第56号 貯藏穴



第56号 貯藏穴



第56号 貯藏穴



第58号 貯蔵穴



第59号 貯蔵穴



第59号 貯藏穴



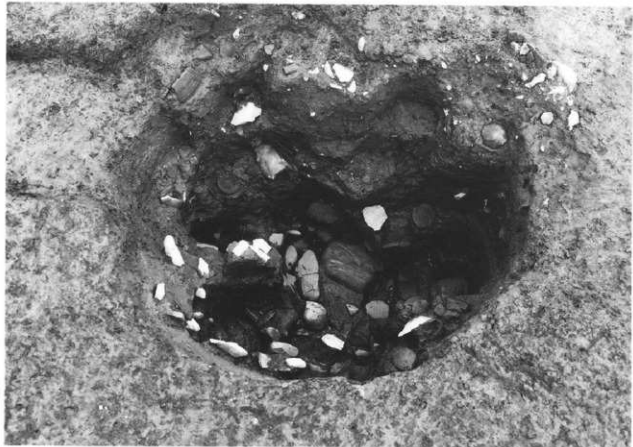
第62号 貯藏穴



第64号 貯蔵穴



第69号 貯蔵穴



第72号 貯藏穴



第72号 貯藏穴



第74号 貯藏穴



第76号 貯藏穴



第76号 貯藏穴



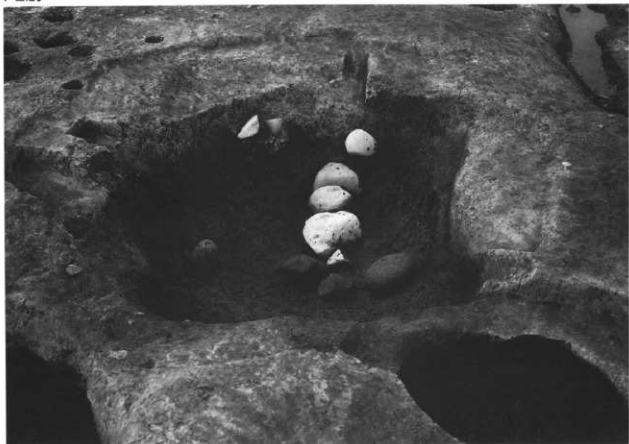
第77号 貯藏穴



第77号 貯蔵穴



第78号 貯蔵穴



第1号 土坑



第2号 土坑



第3号 土坑



第19号 土坑